（様式１）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成２９年度委託事業完了報告書【総括】

| 都道府県名 | 愛知県 | 番号 | ２３ |
|---|---|---|---|

| 推進地区名 | 協力校名 | 児童生徒数 |
|---|---|---|
| 稲沢市 | 稲沢市立祖父江小学校 | １８０名 |
| | 稲沢市立領内小学校 | ２９７名 |
| | 稲沢市立長岡小学校 | １２６名 |
| | 稲沢市立祖父江中学校 | ５５７名 |

| 推進地区名 | 協力校名 | 児童生徒数 |
|---|---|---|
| 知立市 | 知立市立知立小学校 | ８６７名 |
| | 知立市立猿渡小学校 | ３６８名 |
| | 知立市立来迎寺小学校 | ６７８名 |
| | 知立市立知立東小学校 | ２７７名 |
| | 知立市立知立西小学校 | ６９２名 |
| | 知立市立八ツ田小学校 | ４２４名 |
| | 知立市立知立南中学校 | ６４５名 |
| | 知立市立知立中学校 | ７４２名 |
| | 知立市立竜北中学校 | ７１６名 |
| | 知立市立知立南中学校 | ５６８名 |

## ○　実践研究の内容

１．推進地域における取組

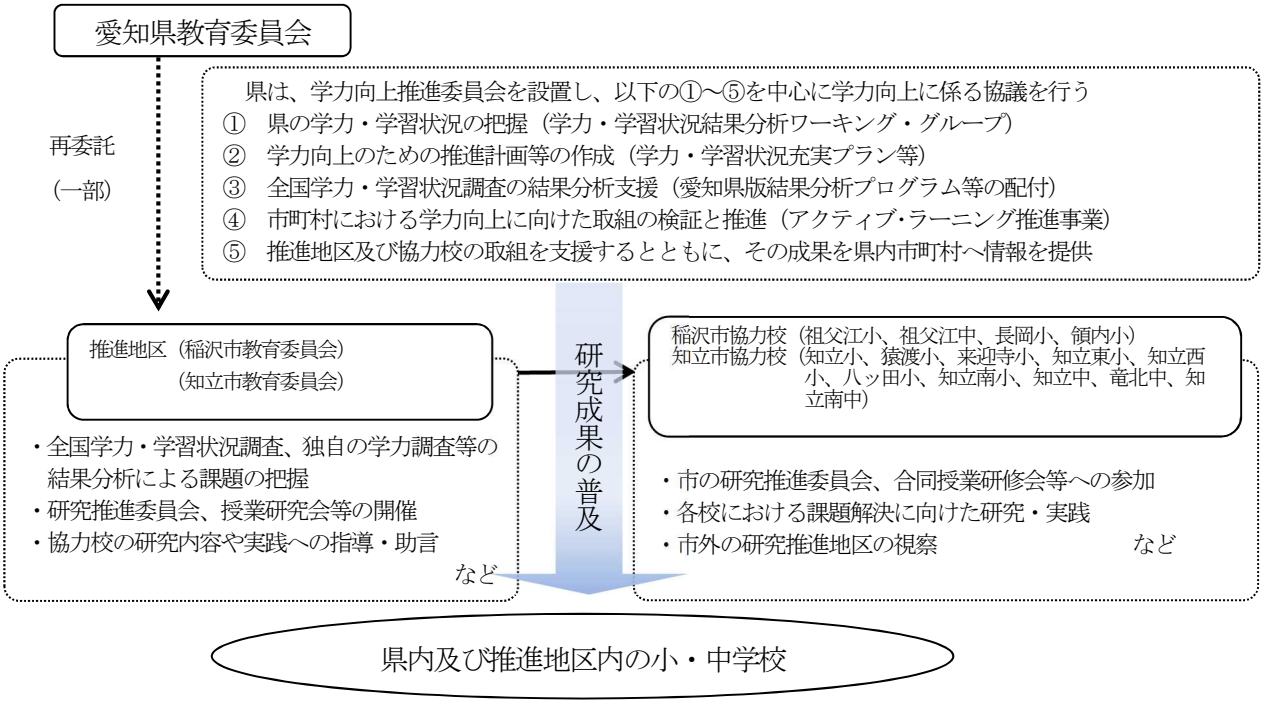
本県では、学力向上に向け、全国学力・学習状況調査結果の分析を基に、学力及び学習状況の県全体の傾向や課題の改善の方向性と「改善の指針」を示してきた。

平成２８年度には、新たに「学力・学習状況の充実に向けたガイドライン」を作成し、各市町村教育委員会と学校に「県としての改善の指針」として次の３点を示した。

| | | |
|---|---|---|
| Ⅰ | 授業改善 | 自ら課題を解決できる「思考力・判断力・表現力」を育てましょう。 |
| Ⅱ | 校内体制 | 児童生徒の実態を全職員で把握し、カリキュラム・マネジメントの充実を図りましょう。 |
| Ⅲ | 地域連携 | 学校を中心に家庭・地域と一体となった教育を推進しましょう。 |

平成２８年度の研究推進地区の２市では、半年間の取組により研究に対する成果と課題が明確になった。そこで、平成２９年度は、域内の児童生徒の学力の向上に向け、学力調査の結果をもとに学力の向上を図ろうと施策を展開してきた自治体に対して、引き続いて本事業を委託し、実践研究を行うことで、「県としての改善の指針」の具現化を図り、その成果を周知することで、県内の多くの自治体で取り組んでいるそれぞれの課題解決に向けた取組を支援していきたいと考えている。

県は、本事業の推進地域として、下のような研究体制を組織し、学力定着に課題を抱える学校への各校の課題に応じた支援に関する実践研究を進めていく。




（１）県の学力・学習状況の把握

県教育委員会義務教育課と愛知県総合教育センター合同で、「学力・学習状況結果分析ワーキング・グループ（以下「ワーキング・グループ」という）」を組織し、全国学力・学習状況調査の問題及び結果の分析、「愛知県版結果分析プログラム」の作成を行った。

・ 「学力・学習状況充実プラン」等の作成で、ワーキング・グループの分析結果を活用した。

・ 「愛知県版結果分析プログラム」は、市町村や学校が、文部科学省から提供されたデータを読み取り、結果分析に必要な表やグラフを作成するエクセルファイルで、それぞれの結果分析を支援した。

（２）愛知県学力向上推進委員会の設置と推進計画等の作成

愛知県学力向上推進委員会を組織し、協議を通じて、学力向上のための推進計画である「学力・学習状況充実プラン」の充実を図り、推進地区や協力校及び県単独で行う「アクティブ・ラーニング推進事業」の実践地区の取組に対する指導助言を行った。

ア 愛知県学力向上推進委員会について

＜構成＞ 教職大学院教授、県小中学校ＰＴＡ連絡協議会役員、県生涯学習関係機関主査、推進地区教育委員会指導主事、協力校代表校長、県総合教育センター研究指導主事

＜協議・報告内容＞

〇第１回 ①学力向上に向けた県の取組方針及び計画について検討

※ 委員会で決定（確認）した主な事項

・ 学力向上に向けた本年度の取組の重点として「分析・検証の充実」「実効性のある学

校支援」「研究成果の積極的な活用」を実施していく。

○第２回　①１０月までの県の取組について報告
②「学力・学習状況充実プラン」の構成・配付計画及び「小・中学校版学力・学習状況充実プラン」の内容について検討
③推進地区の取組状況について検討

※　委員会で決定（確認）した主な事項

・　実効性のある学校支援のため、１１月に『小学校版学力・学習状況充実プラン』、１２月に『中学校版学力・学習状況充実プラン』、『愛知県の子供たちの学力向上に向けたガイドライン』というように３回に分けて配付すること」等を確認した。

・　本調査研究の推進地区に対して、小・中の接続を意識した取組や学校と家庭が連携した家庭学習を一層推進すること、児童生徒の基礎学力の定着のための市の取組についてのポイントを絞った授業改善を行うことを助言した。

○第３回　①１月までの県の取組について報告
②「小・中学校版学力・学習状況充実プラン」について報告
③「愛知県の子供たちの学力向上に向けたガイドライン」の検討
④推進地区（稲沢市・知立市）の報告書について検討

イ　「学力・学習状況充実プラン」について

愛知県学力向上推進委員会で委員の指導・助言を受け、「学力・学習状況充実プラン」の内容、まとめ方、配付方法などについて、実効性のある支援、研究成果の積極的活用を図った。

また、「学力・学習状況充実プラン」は、推進地区及び協力校の取組を生かした内容を取り入れた。逆に、推進地区及び協力校が新たな教育施策や指導改善を行うための具体的な支援として、改善の方向性や方策を示した。

①　「愛知県の子供たちの学力向上に向けたガイドライン」（平成３０年３月配付）
県の課題解決のための方策として、平成２７年度から平成２９年度全国学力・学習状況調査の結果を分析しまとめた。

②　「学力・学習状況充実プラン（小学校版）」（平成２９年１１月配付）
小学校調査結果から明らかになった課題や課題解決のための授業改善のポイント、各設問の正答率から明らかになった個別の課題とその改善の方向性をまとめた。

③　「学力・学習状況充実プラン（中学校版）」（平成２９年１２月配付）
中学校調査結果から明らかになった課題や課題解決のための授業改善のポイント、各設問の正答率から明らかになった個別の課題とその改善の方向性をまとめた。

④　「授業アドバイスシート」（プランと同時に配付）
明らかになった課題解決のための具体的な取組のポイントや授業アイデア、授業で活用できるプリント等を作成した。

⑤　愛知県版結果分析プログラム・活用マニュアル（平成２９年９月配付）
各小・中学校用と市町村教員委員会用の結果分析プログラムを作成し配付した。また、結果分析プログラムの使い方や作成した表やグラフを活用した分析方法をマニュアルとしてまとめ配付した。

ウ　県の取組の積極的な活用に向けた取組

＜全県に向けた課題分析研修会（学校教育担当指導主事会）＞

①　日　　時　平成２９年１０月６日（金）

② 参　加　者　県内５３市町村教育委員会指導主事、県関係者

③ 研 修 内 容

「平成２９年度全国学力・学習状況調査　愛知県の結果について」

・各調査区分の分析結果について

・児童（生徒）質問紙の質問項目における回答の状況について

＜各教育事務所単位の研修会＞

① 日時・場所等

| 期　日 | 時間 | 地　区　名 | 場　所 | 参加者 | 参加者数（人） |
|---|---|---|---|---|---|
| １１／２７（月） | 14:00～14:40 | 知多地区 | 知多教育事務所 | 担当指導主事 | ２６ |
| １２／　４（月） | 9:30～10:10 | 東三河地区 | 東三河県庁 | 担当指導主事 | ４０ |
| １２／　８（金） | 9:30～10:10 | 西三河地区 | 西三河教育事務所 | 担当指導主事 | ６４ |
| １２／１５（金） | 9:00～9:40 | 海部地区 | 海部教育事務所 | 担当指導主事 | ２０ |
| １２／１９（火） | 15:00～15:40 | 中島・丹葉地区 | 三の丸庁舎 | 担当指導主事 | ２５ |
| １／　５（金） | 9:30～10:10 | 尾張地区 | 三の丸庁舎 | 担当指導主事 | ３４ |

② 研修内容

「学力・学習状況充実プラン（小学校版）」「授業アドバイスシート」を使った研修を実施

・ 分析プログラムを使った地区の結果分析の仕方について

・ 調査から見えてきた課題と授業アドバイスシートについて

＜地域の要請に基づいた研修会＞

① 日時・場所等

| 期　日 | 時間 | 地　区　名 | 場　所 | 参加者 | 参加者数（人） |
|---|---|---|---|---|---|
| １２／１４（木） | 9:00～10:00 | あま市 | あま市役所 | 校長 | ２４ |

② 研修内容

各地区の調査の結果を使って研修を実施

・ 教科に関する調査の各調査区分の平均正答率による分析について

・ 学力・学習状況充実プラン小学校版の概要に

全市町村に対し、丁寧に「研究成果の積極的活用」を呼び掛けた成果として、単独で教育事務所が課題研究会を実施したり、市町村の校長会や教務主任者会等で、県が発出した学力・学習状況充実プランや結果分析プログラムの活用マニュアルを使った研修会等を実施したりする市町村が増えてきた。また、各市町村では、県の取組を参考にして、独自の授業改善の取組や学力向上推進委員会を立ち上げた地区も増えてきた。

２．推進地区における取組

＜稲沢市＞

代表者会を毎月定期的に開催し、４校の教務主任と指導主事が研究の進捗状況について確認を行い、今後の方向性や改善策を話し合った。各学校の児童生徒の実態や昨年度からの研究課題をもとに、本年度は、分かる授業づくりに向けて、①学びのスタンダードの確立、②授業改善と評価活動の工夫（ア　授業の流れの明確化、イ　学習意欲の向上、ウ　四つの出力の場の設定、エ　評価活動の工夫）、③家庭との連携、地域の学校との連携という３本柱に重点を置き、分かる楽しさ・できる喜びを味わい、確かな学力を身に付けた児童生徒を計画的に育成していきたいと考えた。また、授業に出力の場を意図的に設定する中で、「自分の考えを書く力」や「友達と話し合い、自分の考えを広げたり深めたりする力」を高め、学んだことを生かして活用問題に粘り強く取り組むことができる児童生徒を育成したいと考えた。以下の方法で研究を進めていくことにした。

①　協力校において１学期と２学期に１回ずつ授業研究会を開催し、指導主事や各学校の教員１名が参加して、研究の具現化を図った。また、授業研究会後には、教室環境を見学し合い、掲示物等のあり方について互いに学び合った。授業研究会での学びは、各学校の現職教育で還元するようにした。また、１０月２３日には岐阜聖徳学園大学教授の玉置崇先生、１１月２４日には愛知教育大学教職大学院教授の佐藤洋一先生にも参加していただき、稲沢市の研究課題に向けて指導助言をいただいた。

６月１３日（火）祖父江中学校　２年生　数学
６月２８日（水）領内小学校　　５年生　国語
６月２９日（木）祖父江小学校　６年生　算数
７月　４日（木）長岡小学校　　３年生　算数
１０月２３日（月）祖父江小学校　１年生　国語
岐阜聖徳学園大学教授　玉置　崇先生
１０月３０日（月）領内小学校　　４年生　国語
１１月　２日（木）祖父江中学校　２年生　英語
１１月２４日（金）長岡小学校　　５年生　算数
愛知教育大学教職大学院教授　佐藤　洋一先生

②　研修視察

協力校の教員に、学力定着に関する研究推進校や研究発表会への参加を促し、研修視察を実施した。研修視察後には、勤務校で報告会を行うとともに、研究に関わる４校の教員が集まる研修会においても報告会をもった。特に、「分かる授業づくり」や「主体的・対話的で深い学び」について研修してきたことを重点的に報告してもらうことにより、各校の参考となるようにした。

③　研修会

教師の授業指導力の向上に向けて、夏休みと冬休みに協力校４校の全ての教員が参加する合同研修会を実施した。大学の教授を招き、稲沢市の研究課題についての指導・助言をいただいたり、模擬授業を通して学力定着・向上を目指す授業づくりのあり方について具体的に学んだりした。

＜知立市＞

知立市学校教育スタンダードとして、「活用力（言語活動）」「粘り強さ（最後まで頑張る）」「生活･学習習慣」の三つを重点項目とし、市内全教員が大事にしたい教育的内容を共有し、学習指導・生活指導を行っていく。

（１）活用力（言語活動）を身に付けさせるために

・「知立市学校教育スタンダード　かきつばた」の視点での授業実践

| 「知立市学校教育スタンダード　かきつばた」 |
| --- |
| **か**　課題（めあて）とふり返り（まとめ）を明確に、授業に見通しを！ |
| **き**　「聞く」「話す」「書く」学習スキルの習得を！ |
| **つ**　伝え合い、学び合う授業づくりを！ |
| **ば**　板書で子どもの思考の足跡を！ |
| **た**　だれもが「わかる」「できる」授業を！ |

各校で「かきつばた」の視点を指導案に位置づけるとともに、学力調査の結果を踏まえた重点項目を決め、授業実践を行った。教師の授業力向上を図り、子供たちが「分かった」「できた」という達成感が得られるようにした。

・　外部講師を招いた研究授業の推進

各学校の課題にきめ細かく対応するために、専門的な外部講師を招いた授業研究を行った。平成 29 年度には、のべ 17 名の外部講師を招聘し、子供の学力を高めるとともに、教師の授業力向上を図った。

（2）粘り強さ（最後まで頑張る）を身に付けさせるために

・　基本的な学習習慣を確立する

相手を意識した聞き方や話し方が身に付くように、機会を捉えて学習習慣についての指導を行った。また、小学校低・中・高学年、中学校向けと発達段階に合わせ、授業中に心掛けたいことを「かきつばた学習」としてまとめ、授業中子供が意識して学習に臨めるように掲示物を作成した。

・　適応指導・日本語指導・少人数指導の工夫

最後まで諦めずに学習に取り組む習慣を身に付けるため、実態に合わせ、取り出し授業・学級入り込み授業などを行った。分かる授業、できる授業が実感できるように、単元によって等質や習熟度別の学級編成やティーム･ティーチングを行い、少人数指導の工夫を図った。

（3）生活・学習習慣を身に付けさせるために

・　家庭学習の推進

子供たちが確かな学力を身に付けるために、発達段階に合わせた取組内容の紹介や目安とする学習時間を示した「家庭学習のススメ」（リーフレット）を改訂発行し、全家庭に配付した。また、リーフレット裏面記載の「我が家のチェックシート」（子供用・保護者用）について、全児童生徒・保護者に対してアンケートを取り、全家庭にその結果を配付する。

３．協力校における取組

＜稲沢市＞

協力校においては、次の取組を実施した。

（1）　学びのスタンダードの確立

・　学習規律を確立し、授業における指導の一貫性を図った。３小学校では、五つの学習スローガンを各教室に掲示して、「チャイム席」「整理整頓」「挨拶」「言葉遣い」「姿勢」についての徹底を図った。中学校では「返事」「姿勢」「発表」の３つをキーワードにして指導し、継続的に学習規律の徹底を図ることにした。

・　学習に集中できる環境を作るために、前面黒板や黒板周りをすっきりさせることを徹底した。前面黒板に不必要なものが掲示されていないよう共通理解を図った。

・　「聞き方のあいうえお」・「話し方のかきくけこ」を四つの小・中学校の全ての教室に掲示し、聞き方・話し方のスキルを継続的に指導できるようにした。掲示するだけでなく、スキルを身に付けさせるために、日常の授業場面での指導を具体的に位置付けることに気を付けた。

・　稲沢市の教務主任と稲沢市教育員会の指導主事が何度も話し合い、学びのスタンダードを統一した。協力校の校区は単学級の小学校が多いため、大規模な中学校への入学後に学校生活への不適応を起こして、不登校となる生徒がいる。そこで、小・中学校が継続的に指導することで、児童は小学校で身に付けたスキルを中学校でも安心して活用し、賞賛され自信をつけるというサイクルを作ることができる。

（2）　授業改善と評価活動の工夫

ア　授業の流れの明確化

・　４校の授業研究会からの学びをもとに、「学力向上を図るための授業づくりのポイント」を作成し、目指す授業像に向けての共通理解を図った。

・　「めあて・まとめ」の提示を徹底するために、４校共通の「めあてカード」「まとめカード」を作成し、全ての教員が取り組めるようにした。

・　児童生徒の意見を取り入れた構造的で分かりやすい板書づくりを行った。

イ　学習意欲の向上

・　学力を向上させるためには、授業の導入段階で児童が「あれ？何でだろう」「やってみたい」「考えてみたい」と感じる課題を提示する必要があることを共通理解し、 導入の５分の教材提示や活動を工夫した。

・　「資料の提示」「インパクトのある実験の提示」「活動から導入」「前時の学習の掲示物」「フラッシュ教材」などを活用し、児童生徒が意欲的に参加で きるよう導入を工夫した。

・　「選択肢から選ぶ」「複数のものを比較する」「隠されたものを見つける」「正しい順序に並べる」「間違っているところを正す」などの誰もが参加しやすい活動を導入に位置づけ、児童生徒がまず参加し、次に活躍へとステップアップができるように工夫し、全員参加の授業を目指した。

・　講師を招いての模擬授業を参観し、意図的指名や発表への対応の仕方について学ぶ研修会を実施した。机間指導で一人一人の学習状況を把握した上で意図的指名を効果的に行い、全員を巻き込むような授業の組み立てについて学んだ。

ウ　四つの出力の場の設定

・　学力を向上させるために、授業の中で児童に分かりやすく「入力」させることを大切にするとともに、「出力」させる場を設定し、全員が生き生きと活動できるように工夫した。協力校の授業研究から、以下の四つのパターンの「出力」に取り組むことを共通理解した。

○　学んだことを声に出して知識を定着させる。（話す・書く）
　音声計算トレーニングや重要語句の暗記をする。
　導入の場面で前時に学んだことを 30 秒で話す。

○　本時の課題について考える。（書く）
　課題についての自分の考えをノートに書き出し、まとめる。

○　本時の課題についての考えを広げ、深める。（話す・話し合う・書く）
　ペア・グループ・全体などで伝え合い、考えを広げ、深める。

○　振り返りの場面で本時の学びをまとめる。（書く）
　視点をもとに振り返りを書く。次時の学習や家庭学習につなげる。

エ　評価活動の工夫

・　授業の目標をもとに、具体的な児童の姿で判定基準（A基準、B基準）を設定し、B基準に達しない児童生徒には個別の支援を行うことを共通理解した。

・　授業中のポイントとなるタイミングで、どれだけの児童生徒が目標に向けて順調に学習を進めているか、すなわち児童生徒の進捗状況を、挙手の人数、ノートチェックなどで確認するよ

うに努めた。

・　同じく、授業中のポイントとなるタイミングで個別評定（～に対する意見を５個以上書けたらＡ、三つ以上ならＢなどの声掛け）を行い、児童生徒の力を引き出すための具体的な目標を設定することや即時評価で賞賛することの重要性についても共通理解を図った。

（３）　家庭・地域の学校との連携

ア　家庭との連携

・　「家庭学習の手引」を作成して学級懇談会で説明し、家庭学習の目標時間や具体的な内容について家庭との連携を図った。

・　授業における振り返りと家庭学習とのリンクを図り、ドリル的な内容だけでなく、考える力を育むための内容にも取り組むことができるように工夫した。

・　「学習チェック表」を作成し、家庭学習が順調に実施されているかを保護者に確認してもらった。

イ　協力校における小中連携

・　研究実施計画に基づき、具体的な研究課題を設定し、各協力校で授業研究及び研究協議会を実施した。研究課題については、昨年度の取組の課題をもとに設定した。

・　「学力向上を図るための授業づくりのポイント」をもとに、「学力向上をめざす授業づくり」チェックリスト（右図）を作成した。授業研究会の指導案を作成する際には、チェックリストをもとに目指す授業となっているかを確認した。また、授業研究会当日には、参観者にチェックリストを配付し、研究協議の際に活用した。

・　研究協議会後には、各学校の教室環境を自由に参観し、よい点を互いに学び合うことができるようにした。

**「学力向上をめざす授業づくり」チェックリスト**　【資料３】

《研究の柱立て》　学びのスタンダードの確立…①　分かる授業に向けての指導の工夫…②
出力させる場づくりの工夫…③　指導に生きる評価の工夫…④

| | ポイント | | チェック内容 | 大変良い　良い | メモ |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 学習規律 | ① | 学習規律（チャイム前、授業の準備、あいさつ、返事、姿勢）が守られていましたか。 | 4・3・2・1 | |
| 2 | 学習環境 | ① | 前面黒板や黒板周りはすっきりとしており、集中して学習できる環境がつくられていましたか。 | 4・3・2・1 | |
| 3 | 聞き方・話し方 | ① | 話す人を見て発表を聞くことや、丁寧な言葉ではっきりと話すことができていましたか。 | 4・3・2・1 | |
| 4 | めあてとまとめ | ① | 学習課題（めあて）やまとめは適切であり、子どもに分かりやすく示されていましたか。 | 4・3・2・1 | |
| 5 | 授業の導入 | ② | 教材提示や活動を工夫し、授業の導入で全員をひきつけることができましたか。 | 4・3・2・1 | |
| 6 | 教材・教具 | ② | 具体物やＩＣＴ、掲示物などを効果的に使って、分かりやすく授業を行っていましたか。 | 4・3・2・1 | |
| 7 | 板書 | ② | 子どもの考えを取り入れた構造的で分かりやすい板書づくりがされていましたか。 | 4・3・2・1 | |
| 8 | 学習形態 | ② | 学習形態の工夫を通して、全員を授業に参加させ、一人一人の理解を深めることができましたか。 | 4・3・2・1 | |
| 9 | 出力への準備 | ③ | 全員が学習課題に対する考えをもてるように工夫されていましたか。（発問、ワークシート等） | 4・3・2・1 | |
| 10 | 出力への意欲化 | ③ | 自分の考えを進んで発表することができるように工夫されていましたか。 | 4・3・2・1 | |
| 11 | 出力による深化 | ③ | 対話などを通して、考えを広げたり深めたりする場を設定することができましたか。 | 4・3・2・1 | |
| 12 | 出力による定着 | ③ | 全員が考えを出力し、学んだことを定着させる場が設定されていましたか。 | 4・3・2・1 | |
| 13 | 評価基準の提示 | ④ | 評価基準の提示を工夫し、子どもの意欲を効果的に高めることができていましたか。 | 4・3・2・1 | |
| 14 | 机間指導個別支援 | ④ | 明確な意図をもって、効果的に机間指導を行い、指導・支援に生かすことができましたか。 | 4・3・2・1 | |
| 15 | 振り返り | ④ | 学んだことが実感できるような、授業の振り返りの時間に確保されていましたか。 | 4・3・2・1 | |

＜知立市＞

・「知立市学校教育スタンダード　かきつばた」についての「学習指導チェックカード」を使い、自己分析し、授業改善に努めた。また、教員のスキルアップのために、講師を招聘し、授業の在り方や指導方法を学んだ

・ワークシート・メモの活用

まとまりのある文章が書けるようにワークシートを準備し、作文指導を行った。一連の学習活動を行い、読み手に分かるように整理して文章を書く力が付くように指導を行った。

・思考ツールの活用

目的や意図に応じて文章を書くために、思考ツール「マトリックス」「ウェビング」「ベン図」などを活用し、経験や情報を想起・整理し、文章を書く指導を行った。また、話し合い活動にも思考ツールを使い、自分の考えを整理する工夫を図った。

・「ペアトーク」「フリートーク」の活用

全員発言を目指し、担任もしくは子供から出された話題のフリートークの時間を設定した。気さくに話し合う雰囲気ができ、集団で話すことに慣れることができた。

・「学習ボード」の活用

資料を挟む、自由に書き込む、黒板に貼ることができる学習ボードを作成し、自分の考えを整理す

る場面や話し合いの場面で活用し、言語活動の充実を図った。

・基本的な学習習慣を確立する

話を聞くときには発表者に体を向け、顔をしっかり見ることや相槌を打ちながら話を聞くことなど、機会を捉えて指導した。また質問や付け足し、友達の意見を聞いてつなげて発言するなど、「話し方あいうえお」「聞き方かきくけこ」の合言葉で、聞き方・話し方が身に付くよう指導した。

・「学び合う」ことができる学習集団づくり

学力向上のための基礎（土台）は良好な人間関係にあると考え、学級づくり（学級経営）の充実を目指した。そのために、hyper-QU 検査を年２回実施し、結果から学級の傾向や児童一人一人を理解し、その対応にあたった。

・長期休業を生かす

長期休業時に「学びの日」（補充学習）を実施し、学習内容を振り返り、学力の向上を図った。支援の必要な子に対して、個別あるいは少人数で対応した。

・自己存在感を高める

機会をとらえ、自分たちの学級についてみんなで話し合い、「できた」「自分の意見が仲間の役に立った」「自分にもよさがある」といった自己存在感、自己有用感を味わわせた。

・ＩＣＴを活用した授業の実践

タブレットや書画カメラ等視覚化を図るＩＣＴ機器を積極手に活用する。デジタル教科書を活用し、聞き取りが苦手な子に視覚的な情報を与え、支援した。

・学校保健会・学校給食センターとの連携

睡眠と生活習慣が学習に及ぼす影響に着目し、「早寝・早起き・朝ご飯」を合言葉に、市学校保健会で研究に取り組んだ。また、学校給食センターは「共食で心も体も育つ」の考えの下、食の大切さを「食育だより」として発行している。

## ○　実践研究の成果

１．協力校における取組の成果

＜稲沢市＞

①　全国学力・学習状況調査の児童・生徒質問紙の質問項目をもとに本研究用に作成した「児童生徒用意識調査」、学校質問紙の質問項目をもとに作成した「教師用意識調査」を５月、７月、１２月に実施し、その結果を比較する。

②　その他、授業中の児童生徒の様子や「出力」した内容、学力コンクールへの取組状況など、各学校の実践内容に応じて変容をみる。

③　平成２８年度と２９年度の標準学力調査（ＣＲＴ）の結果を比較する。

【祖父江小学校】

・　５月と１２月の児童の意識調査の結果を比較すると、「黒板にめあてを示している」「ノートにめあてとまとめを書いている」「課題に対して自分から取り組んでいる」「自分の考えを発表する機会が与えられている」「話し合う活動をよく行っている」の項目が大きく伸びている。特に経験の浅い教員の学級ほど大きく伸びている傾向がみられる。授業の流れの明確化に取り組むことによって、見通しのある授業づくりが行われ、分かりやすい授業づくりに結び付いたと考える。

・　出力場面を意図的に設定することにより、自分の考えをもち、表現することができる児童が増えた。また、学び合いの場面では、積極的に意見を言ったり、友達と考えを比べ合って考えを一つに焦点化したりすることができるようになってきた。

・　ＣＲＴの結果を比較すると、国語科の「話すこと・聞くこと」、算数科の「図形」の領域で向上がみられた。出力場面を設定し、児童が主体的に自分の考えを発表したり、話し合い活動に参加したりしたことの効果が出ている。

【領内小学校】

・　児童の意識調査の結果をみると、めあてやまとめが黒板に示されていることや、課題に対して自分から考え、自分から取り組んでいるという項目が向上している。

・　出力場面を設定したことにより、授業の中で「考えをもち学び合う児童の姿」「友達の説明を聞いて理解を深める児童の姿」「自己評価により目標をもって学ぶ児童の姿」がみられるようになってきた。出力する場を設定する等の授業改善を行ったことで、児童が主体的に学ぶようになり、学習意欲が向上したと捉える。

・　ＣＲＴの結果を比較すると、多くの学年、観点で向上がみられたが、特に「関心・意欲・態度」の観点で大きく向上した。

【長岡小学校】

・　児童の意識調査の結果から、授業中に「出力」する場を繰り返し設定したり、「出力」の仕方を工夫したりすることによって、「出力」に対する苦手意識が低下し、自信をもって学習に取り組むことができるようになった。

・　ＣＲＴの結果を比較すると、国語科と算数科で特に関心・意欲・態度の観点が高まっている。授業の導入で挿絵を活用したり、ＩＣＴ機器を使って教材を提示したりして、児童の興味・関心を高めるなどの授業改善を行ったことによって、授業の内容が分かりやすいものとなり、関心・意欲・態度の観点が向上した。

・　ＣＲＴの結果から、算数科の「数学的な考え方」の観点が前年度に比べて向上している。ペアやグループでの発表などの学習形態の工夫や、自分の考えを整理しながら書けるワークシートの活用など、児童に「出力」させる場を工夫したことによって、児童が理由や根拠を明確にして主体的に考えることができたからであると捉えている。

【祖父江中学校】

・　５月と１２月の生徒の意識調査結果を比較すると、「ノートにめあてとまとめを書いている」、「学習内容をふりかえる活動をよく行っている」、「相手の話を最後まで聞き、自分の考えを伝えている」「話し合う活動をよく行っている」の項目が大きく伸びている。また、教師の意識調査結果を比較すると、「めあてとまとめを書く」、「相手の考えを最後までしっかりと聞く」、「自分の考えをしっかりと相手に伝える」、「話し合い活動で自分の考えを深めたり広げたりできる」「資料を使って発言できる」ことへの指導の項目が大きく伸びている。教師が重点的に取り組んだ内容と生徒の意識がほぼ一致しており、継続的・効果的な指導が行われたと考えられる。

・　授業後に振り返りの場を設定し、振り返り活動を継続することによって、生徒は知識や技能を身に付けることができている実感をもつことができた。また、振り返り活動で生徒が記述した文章からも、学習を積み重ねてきたことによって自信をもち、学びを生かしたいという思いをもったことを読み取ることができた。

・　ＣＲＴの結果を比較すると、特に数学の平均得点率が向上している。また、５段階評価をみると、学力が心配される１と２の生徒数が減少している。多くの生徒が授業に主体的に参加し、知識や技能を着実に身に付けている様子が伺える。

・　意識調査で「学校が楽しい」「授業が分かる」と答える生徒数が増加しており、不登校生徒数が、昨年度から本年度にかけて大きく減少している。特に中学１年生の不登校数が減少しており、授業改善の成果がみられる。

＜知立市＞

実践研究の成果を検証するために、以下の４項目で検証を行った。

①学習状況チェックカードによる子供の意識アンケートの実施

②学習指導チェックカードによる教師の意識アンケートの実施

③全国学力･学習状況調査や標準学力検査等による児童生徒の調査結果と学習状況の把握と分析

④学校評価アンケート等による児童生徒・教師の学習・指導への意識の変容の把握と分析

【来迎寺小学校】

・　教科・目的に合わせて思考スキル・ツールを工夫することにより、自分の考えを整理し、表現することができた。スキルアップタイムでの成果もあり、低学年でもツールを使って考えたことをまとめることができた。（かきつばたスタンダードの「**き**」の項目）

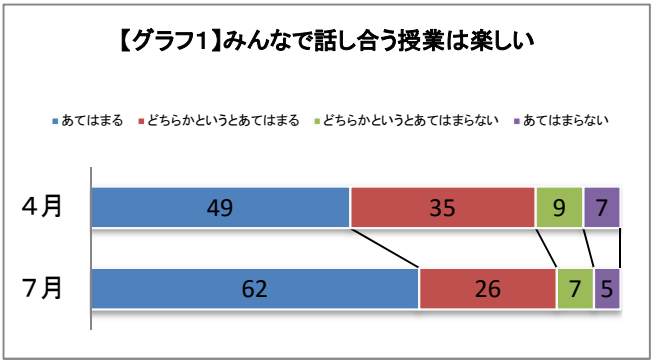
・　話し合いの場を工夫することで、話す抵抗感が少なくなり、意欲的に話し合い活動に参加したり、つなげた発言をするなど考えを深めたりすることができた。（かきつばたスタンダードの「**つ・ば・た**」の項目）

・　「かきつばた学習」の掲示物を作成し、学習習慣を身に付ける指導に力を入れてきたことで、28 年３月と 29 年 12 月に行った６年生の学習アンケートでは、『なるほど』『さすが』と感じながら聞く」が 14 ポイント、「『賛成』『付け足し』などの考えを発表できる」が７ポイント向上した。児童の意識が変化したからと思われる。

【知立西小学校】

・　ペアトークを取り入れることによって、子供が自分の考えに自信をもち、発言することができるようになった。ペアトーク・グループトークを取り入れる目的は、場面により様々であるが、児童に自信をもたせたり考えを広げさせたりすることに有効であった。

・　関わり合いを意識した授業を繰り返した結果、４月と７月に児童に行ったアンケートの結果より、本校児童の 62%が「みんなで話し合う授業は楽しい」と答え、４月よりも 13%増えている。人と関わることが楽しい、自分の思いを伝えることが大切だ、と感じている児童が増えている。




【知立南小学校】

・　「知立市学校教育スタンダード　かきつばた」を基にした授業改善を行ったことで、教師はユニバーサルデザインを意識した授業づくりに心がけることができた。分かりやすい授業を心がけたことで、「学校が楽しい」と児童の 90%が答えた。

・　音声計算を取り組むことで、計算が苦手な児童も四則計算に慣れ、正答率が上がった。また、習熟度の低い児童の計算力を高めるのに効果があった。

【音声計算事前事後正答率比較】（児童数300人）

| 音声計算年比較 | 2016 ⑩事前 | 2017 ⑪事後 | 成長度 |
|---|---|---|---|
| ４年 | 91 | 99 | 8.0 |
| ５年 | 87 | 98 | 11.0 |
| ６年 | 84 | 99 | 14.8 |
| 平均 | 87 | 97 | 10.1 |

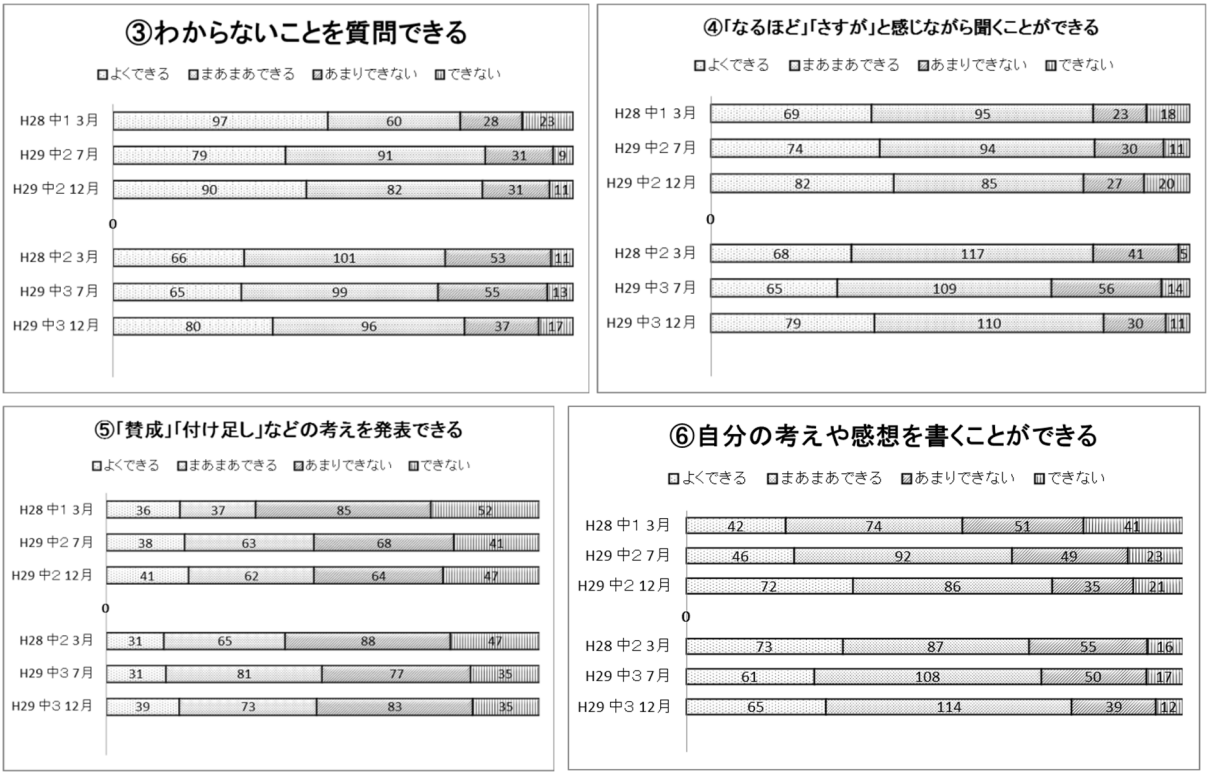
・　算数科での少人数指導により、「分かりやすい」と回答した児童の割合が約 90%であった。

・　「ペア・グループトーク」での話し合いを通して、基本的な「話型」、「聴く・話す」習慣が定着し、自分の意見が言えるようになり、協働的な話し合いの場面が増えた。また、少ない時間で意見を書く力も高まり、自分の考えをまとめようとする子が増えてきた。

【竜北中学校】

・　平成 29 年度全国学力・学習状況調査では、全国平均を上回る結果であった。正答率は、国語Ａで＋0.６%、国語Ｂで＋1.８%、数学Ａで＋2.４%、数学Ｂで＋1.９%である。

・　学習スタンダードに対する教師の意識の向上が見られた。
学習指導チェックカード（授業改善意識調査）から、「聞く、話す、スキルの習得、向上」に向けて、「できている」、「ややできている」と回答した教師は80.75％（H29.7）から88％（H29.12）に向上した。また、「伝え合い、学び合う授業づくり」に向けて、「できている」、「ややできている」と回答した教師も69.2％（H29.7）から78.4％（H29.12）に向上した。
・　生徒の主体的に学ぶ姿勢や聞く、話す、書くスキルの向上が見られた。



【生徒学習アンケート結果（一部抜粋）】

生徒向けの学習アンケートの推移を見ると、「わからないことを質問できる」生徒が増えており、主体的に学ぼうとする生徒が増えていることが分かる。「なるほど」「さすが」と感じながら聞くこと、「賛成」「付け足し」などの考えを発表すること、自分の考えや感想を書くことにおいても数値の上昇が見られる。授業の中で、学び合いや振り返りをしっかりと位置づけることで、自らの学びに自信をもち、さらなる学びに向かおうとする姿を読み取ることができた。

## ２．実践研究全体の成果

＜稲沢市＞

・　毎月一回のペースで代表者会を開催し、４校が研究の足並みをそろえることによって、研究推進への意識が高まった。特に、授業の中で、めあて、まとめ、ふりかえりを大切にすることや「出力」場面を設定して児童生徒が知識の定着や能動的な学習ができるように工夫しようとする意識が高まった。
・　「日常授業の改善なくして学力向上なし」という考えのもと、１時間の授業を大切にする意識が高まった。
・　協力校での授業研究会、大学の教授を招いて４校合同で実施した研修会、先進校視察で学んだことについての情報共有会を通して、４校の教員が学び合う場を設定し、力量向上を図った。
・　「学力向上をめざす授業づくりチェックリスト」などを作成し、その内容の検討を繰り返すことによって、めざす授業像の明確化を図ることができ、授業づくりを効果的に行うことができた。

・　研究構想図の内容を検討し合うことで、研究内容の明確化を図ることができた。

＜知立市＞

平成２９年度中学３年生の全国学力調査の正答率は、国語Ａは全国平均と同等であり、その他は上回っていた。これは、２８年度から研究委嘱を受け、知立市学習スタンダードを基に、実践研究を積み重ねてきたからだと考える。また中学３年生の結果を３年前の小学６年生当時の結果を比較すると、明らかに学力が向上していることが資料①から読み取れる。かきつばたスタンダードの意識化は、特に中学校において学力向上の効果が高かった。もちろん、小学校からの授業改善も中学校の結果として出ていると考えたい。

【全国平均との差　同じ学年の経年変化】（資料①）

| | 国語Ａ | 国語Ｂ | 数学（算数）Ａ | 数学（算数）Ｂ |
|---|---|---|---|---|
| 平成26年度小６ | ＋０．２ | －５．０ | －１．３ | －０．７ |
| 平成29年度中３ | －０．４ | ＋１．８ | ＋１．４ | ＋０．９ |
| 比較 | －０．６ | ＋６．８ | ＋２．７ | ＋１．６ |

しかし、国語Ａにおける 0.6 ポイントの減少は、適切な語句を用いて書くなどの基礎・基本がおろそかになっているからとも言える。

質問紙の回答から、小学校でも国語の勉強が好きと答えた児童の割合が、28 年度より 2.9 ポイント増加しており、算数の勉強が好きと答えた児童の割合よりも低いものの、増え幅は大きい。（資料②）伝え合う授業づくりに力を入れたことにより、小学生においても意欲を向上させつつある。さらに、中学校では、国語の勉強が好きと答えた生徒の割合が、28 年度より 13.4 ポイントも増加しており、中学校での効果の高さが伺える。「考えの理由が分かるように気を付けて書いている」と答えた生徒の割合も 28 年度より 3.7 ポイント増加しており、「書く」「話す」ことを意識しながら学習に取り組むようになってきたと言える。（資料③）

【小学校　質問紙より】（資料②）

| | 国語の勉強が好き | 算数の勉強が好き |
|---|---|---|
| 平成28年度 | ５３．５％ | ６９．７％ |
| 平成29年度 | ５６．４％ | ７２．２％ |
| 比　較 | ＋２．９ | ＋２．５ |

【中学校　質問紙より】（資料③）

| | 国語の勉強が好き | 考えの理由が分かるように書いている |
|---|---|---|
| 平成28年度 | ４８．８％ | ６２．２％ |
| 平成29年度 | ６２．２％ | ６５．９％ |
| 比　較 | ＋１３．４ | ＋３．７ |

学校評価アンケート等の結果から、各学校から以下のような報告があった。

・　ワークシート・メモを活用して作文指導をしたところ、「上手に文章が書ける」と答えた児童が実践前の 43%から 60%まで上昇した。

・　ペアトーク・グループトークを取り入れることで、自分の考えに自信をもって発言することができるようになった。「みんなで話し合う授業は楽しい」と答えた。

・　学校評価アンケートで「授業中、意見や考えをすすんで発表しているか」の問いに対して「できた・だいたいできた」と回答した児童が平成 28 年度よりも 6.6 ポイント増加した。

３．取組の成果の普及

＜愛知県＞

愛知県学力向上推進委員会において、「学力・学習状況充実プラン」の作成に当たり、有識者の意見を取り入れ検討したことで県内の各校で活用しやすい内容にすることができた。また、推進地区の

担当者を愛知県学力向上推進委員会の構成員にしたことで、委員会で協議された内容が早い段階で推進地区や協力校で活用できる体制ができたことも本調査研究の成果である。

また、推進地域の取組として、平成２９年度は研究推進地区のすべての取組を「学力・学習状況充実プラン」に掲載し、県内の市町村教育委員会と小・中学校に示すことができた。

３月末には、本調査研究の推進地区や協力校及び「アクティブ・ラーニング推進事業」の実践校の取組を義務教育課Ｗｅｂページで紹介していく予定である。

＜稲沢市＞

・　代表者会を毎月定期的に開催し、４校の教務主任と指導主事が研究の進捗状況の評価を行い、今後の方向性や改善策を確認した。話し合った内容を各学校の現職教育等を活用して、一人一人に還元した。
・　学校訪問を通して、各協力校の学力定着・向上の取組について計画的に指導・助言を行った。
・　各協力校における授業研究会を学期に一回実施し、相互に授業参観と研究協議を行った。
・　協力校４校の教員が集い、長期休業中に合同研修会を行った。大学の教授を招き、稲沢市の研究課題についての指導・助言をいただいたり、模擬授業を通して学力定着・向上を目指す授業づくりのあり方について具体的に学んだりした。
・　各協力校の研究課題をもとに先進校視察を実施し、そこで学んだことを４校合同研修会で報告し、還元した。
・　「愛知県学力充実プラン」で稲沢市の研究内容の一端を紹介し、推進地区への普及を図った。
・　研究内容についてリーフレットを作成し、推進地区の教務主任が集まる会議で研究内容を普及していく。

＜知立市＞

・　学力向上研究推進委員会を定期的に月１回開催し、取組の進捗状況の評価を行い、今後の方向性や改善策を確認した。
・　知立市ホームページに全国学力・学習状況調査の結果と考察を公表し、指標を示した。
・　「これから求められる“資質・能力”と確かな学力の定着・向上」という演題で、夏季研修会を全教員対象に対し実施した。（平成28年度）
・　教職経験４年目までの教員対象に「かきつばた勉強会」を実施した。（平成28年度）
・教務主任対象の研修会に、愛知県学力向上推進委員長佐藤洋一先生を講師として御招きし、ご講演いただき、今後の方向性についてご示唆をいただいた。（平成28年度）
・知立市内における教育研究会において取組内容を発表し、研究成果の普及を図った。

## ○　今後の課題

＜愛知県＞

平成２８年度に県から示した三つの改善の指針について、研究推進地区や協力校の取組により、具体的な成果を得ることができた。「平成２９年度学力・学習状況充実プランの授業等アドバイスシート」では、研究推進地区や「アクティブ・ラーニング推進事業」の実践校の取組の成果を掲載し、県内の小中学校に広く周知することができた。

２年間の研究により研究推進地区や推進校から新たな課題も明らかになってきたことから、次年度以降も、学力向上に関する各推進事業において、新たな推進地区に研究を委嘱し、その取組成果を検証していく必要がある。

そして、愛知県全体の課題とした「思考力・判断力・表現力等の育成」や「主体的に課題を解決する児童生徒の育成」について、県や市町村がいかに支援していくことが児童生徒の学力定着につながるかについて研究を重ね、今後も市町村の優れた取組を広く県内に還元していくことで、本県の児童

生徒の学力向上につなげていきたい。

＜稲沢市＞

・　２年間の取組を通して小中連携による研究体制を構築し、取組を充実させてきた。特に２年目となる本年度は、代表者会や授業研究会を充実させ、着実に研究を推進してきた。本年度に構築した体制を、今後も可能な限り持続できるように工夫していく必要がある。また、市内の他校に成果を発信し、研究の成果の普及に努めていく。

・　各学校の意識調査やＣＲＴの結果を分析していくと、学年によって大きな差がみられる学校もある。特に小規模校や生徒指導が困難な学校においては、研究の内容が十分に浸透していない。今後も各学校の研究への取組が継続できるように支援し、分かる楽しさ・できる喜びを味わい、確かな学力を身に付けた児童生徒を計画的に育成していきたい。

＜知立市＞

・　中学校では学年が上るにつれ、「勉強することが楽しい」と答えた生徒の割合が増加した。しかし、小学６年生の３月と中学１年生の７月を比較したとき、アンケート結果のどの項目の数値も一旦下がっている。小・中学校間にギャップがあると言わざるを得ない。持続可能な小中学校連携の推進体制の強化が必要である。合同研修会を開催し、学校間交流の工夫を図っていきたい。

・　「家庭学習のススメ」を作成して家庭との連携も進めてきたが、その成果について十分に検証することができなかった。「宿題以外に自分で考えてやっている」の問いに対して、中学３年生以外、肯定的に回答した児童生徒の割合が低い。家庭での自分の学力に見合った主体的な学習はいまだ不十分と言える。「家庭学習のススメ改訂版」を作成して発達段階に合わせた取組を家庭に紹介した。家庭学習への意識がどう変わったのかを注視しながら、さらに工夫し啓発を行っていく必要がある。家庭学習の時間の確保や学習内容の質を上げるためには、家庭の協力はもちろんのこと、学級担任、学校の取組が大きく影響してくる。市全体の取組の成果を共有しながら、今後も工夫改善に努めていきたい。

（様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成２９年度委託事業完了報告書

【推進地区】

| 都道府県名 | 愛知県 | 番号 | ２３ |
|---|---|---|---|

| 推進地区名 | 稲沢市 |
|---|---|

## １．研究課題

全国学力・学習状況調査において、ここ数年、稲沢市は国語Ｂ問題の平均正答率が低い傾向がみられる。特に、「目的に応じて必要な情報を取り出して、自分の考えを書くこと」や「話し合いの中で相手の発言の意図をとらえ、自分の考えを広げたり深めたりすること」についての問題は、平均正答率が低かった。

昨年度は、学力定着・向上を図るために、基礎・基本の定着、主体的な学びを促す工夫、教員の指導力向上の３点に取り組んだ。各学校の研究課題をもとに、「めあてとまとめ」を意識した授業づくりや学力コンクールを実施し、基礎・基本の定着や主体的な学びを促す工夫に取り組んだ。しかし、「授業が分かる」と感じる児童生徒は増加せず、本市の課題である全国学力・学習調査の国語Ｂ問題の結果の改善まで至らなかった。また、質問紙調査の結果から、「自分の考えの発表」や「友達との話し合い」といった学習内容を出力することに苦手意識があることも明らかになった。

そこで、本年度は、分かる授業づくりに向けて、①学びのスタンダードの確立、②授業改善と評価活動の工夫（ア　授業の流れの明確化、イ　学習意欲の向上、ウ　４つの出力の場の設定、エ　評価活動の工夫）、③家庭との連携、地域の学校との連携という３本柱に重点を置き、分かる楽しさ・できる喜びを味わい、確かな学力を身に付けた児童生徒を計画的に育成していきたいと考えた。また、授業に出力の場を意図的に設定する中で、「自分の考えを書く力」や「友達と話し合い、自分の考えを広げたり深めたりする力」を高め、学んだことを生かして活用問題に粘り強く取り組むことができる児童生徒を育成したいと考えた。

## ２．研究課題への取組状況

(1)　分かる授業づくりに向けて

①　代表者会を毎月定期的に開催し、４校の教務主任と指導主事が研究の進捗状況について確認を行い、今後の方向性や改善策を話し合った。めざす授業像や家庭

との連携のあり方について何度も検討し合った。また、協力校において１学期と２学期に１回ずつ授業研究会を開催し、指導主事や各校の教員１名が参加して、研究の具現化を図った。また、授業研究会後には、教室環境を見学し合い、掲示物について互いに学び合った。授業研究会での学びは、各学校の現職教育で還元するようにした。

| | | | |
|---|---|---|---|
| ６月１３日（火） | 祖父江中学校 | ２年生 | 数学 |
| ６月２８日（水） | 領内小学校 | ５年生 | 国語 |
| ６月２９日（木） | 祖父江小学校 | ６年生 | 算数 |
| ７月　４日（木） | 長岡小学校 | ３年生 | 算数 |
| １０月２３日（月） | 祖父江小学校 | １年生 | 国語 |
| １０月３０日（月） | 領内小学校 | ４年生 | 国語 |
| １１月　２日（木） | 祖父江中学校 | ２年生 | 英語 |
| １１月２４日（金） | 長岡小学校 | ５年生 | 算数 |

② 研修視察

協力校の教員に、学力定着に関する研究推進校や研究発表会への参加を促し、研修視察を実施した。研修視察後には、勤務校で報告会を行うとともに、研究に関わる４校の教員が集まる研修会においても報告会をもった。特に、「分かる授業づくり」や「主体的・対話的で深い学び」について研修してきたことを重点的に報告してもらうことにより、各校の参考となるようにした。

③ 研修会

教師の授業指導力の向上に向けて、夏休みと冬休みに協力校４校の全ての教員が参加する合同研修会を実施した。大学の教授を招き、稲沢市の研究課題についての指導・助言をいただいたり、模擬授業を通して学力定着・向上を目指す授業づくりのあり方について具体的に学んだりした。

また、各協力校の研究課題をもとに先進校の視察を実施し、そこで学んだことを４校合同研修会で報告し、還元した。

(2) 研究の内容

代表者会や授業研究会を通して、以下のような研究の柱立てをつくり、４校が足並みをそろえて研究課題に取り組むことができるようにした。

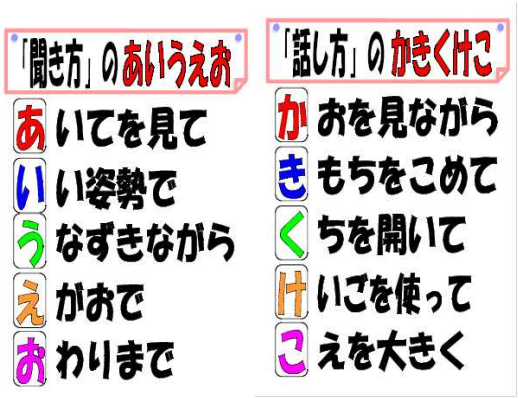
① 学びのスタンダードの確立

・ 学習規律を確立し、授業における指導の一貫性を図った。３小学校では、５つの学習スローガンを各教室に掲示して、「チャイム席」「整理整頓」「挨拶」「言葉遣い」「姿勢」についての徹底を図った。中学校では「返事」「姿勢」「発表」をキーワードにして指導し、継続的に学習規律の徹底を図ることにした。

・ 学習に集中できる環境をつくるために、前面黒板や黒板周りをすっきりさせることを徹底した。前面黒板に不必要なものが掲示されていないよう共通理解

を図った。

・　資料１の「聞き方のあいうえお」・「話し方のかきくけこ」を４つの小中学校の全ての教室に掲示し、聞き方・話し方のスキルを継続的に指導できるようにした。掲示するだけでなく、スキルを身に付けさせるために、日常の授業場面での指導を具体的に位置付けることに気を付けた。



【資料１】聞き方・話し方の合い言葉

・　教務主任と指導主事が学校代表者会等で何度も話し合い、学びのスタンダードを統一した。協力校の校区は単学級の小学校が多いため、大規模な中学校への入学後に学校生活への不適応を起こして、不登校となる生徒が多数いる。小・中学校が継続的に指導することで、児童は小学校で身に付けたスキルを中学校でも安心して活用し、賞賛され自信をつけるというサイクルをつくることができる。

②　授業改善と評価活動の工夫

ア　授業の流れの明確化

・　４校の授業研究会からの学びをもとに、「学力向上を図るための授業づくりのポイント」を作成し、めざす授業像に向けての共通理解を図った。

・　「めあて・まとめ」の提示を徹底するために、４校共通の「めあてカード」「まとめカード」を作成し、全ての教員が取り組めるようにした。

・　児童生徒の意見を取り入れた構造的で分かりやすい板書づくりを行った。

イ　学習意欲の向上

・　学力を向上させるためには、授業の導入段階で児童が「あれ？何でだろう」「やってみたい」「考えてみたい」と感じる課題を提示する必要があることを共通理解し、 導入の５分の教材提示や活動を工夫した。

・　「資料の提示」「インパクトのある実験の提示」「活動から導入」「前時の学習の掲示物」「フラッシュ教材」などを活用し、児童生徒が意欲的に参加できるよう導入を工夫した。

・　「選択肢から選ぶ」「複数のものを比較する」「隠されたものを見つける」「正しい順序に並べる」「間違っているところを正す」などの誰もが参加しやすい活動を導入に位置づけ、児童生徒がまず参加し、次に活躍へとステップアップができるように発問や指示を工夫し、全員参加の授業を目指した。

・　講師を招いての模擬授業を参観し、意図的指名や発表への対応の仕方について学ぶ研修会を実施した。机間指導で一人一人の学習状況を把握した

上で意図的指名を効果的に行い、全員を巻き込むような授業の組み立てについて学んだ。

ウ　四つの出力の場の設定

・　学力を向上させるために、授業の中で児童に分かりやすく「入力」させることを大切にするとともに、「出力」させる場を設定し、全員が生き生きと活動できるように工夫した。協力校の授業研究から、以下の４つのパターンの「出力」に取り組むことを共通理解し、学力の定着・向上を目指した。

○　学んだことを声に出して知識を定着させる。（話す・書く）
音声計算トレーニングや重要語句の暗記をする。
導入の場面で前時に学んだことを30秒で話す。

○　本時の課題についての考えをつくる。（書く）
課題についての自分の考えをノートに書き出し、まとめる。

○　本時の課題についての考えを広げ、深める。（話す・話し合う・書く）
ペア・グループ・全体などで伝え合い、考えを広げ、深める。

○　振り返りの場面で本時の学びをまとめる。（書く）
視点をもとに振り返りを書く。次時の学習や家庭学習につなげる。

エ　評価活動の工夫

・　授業の目標をもとに、児童の反応を予想し、具体的な姿で判定基準（Ａ基準、Ｂ基準）を設定した。Ｂ基準の姿を複数考えておくとともに、その姿に達しない児童生徒にはどのような個別の支援を行うかを丁寧に考え、準備することを共通理解した。

・　授業中のポイントとなるタイミングで、どれだけの児童生徒が目標に向けて順調に学習を進めているか、すなわち児童生徒の通過率を、挙手の人数、ノートチェックなどで確認するように努めた。

・　同じく、授業中のポイントとなるタイミングで個別評定（～に対する意見を５個以上書けたらＡ、三つ以上ならＢなどの声かけ）を行い、児童生徒の力を引き出すための具体的な目標を設定することや即時評価で賞賛することの重要性についても共通理解を図った。

②　家庭・地域の学校との連携

ア　家庭との連携

・　「家庭学習の手引き」を作成して学級懇談会で説明し、家庭学習の目標時間や具体的な内容について家庭との連携を図った。

・　授業における振り返りと家庭学習とのリンクを図り、ドリル的な内容だけでなく、考える力を育むための内容にも取り組むことができるように工夫した。

・　「学習チェック表」を作成し、家庭学習が順調に実施されているかを保護者に確認してもらった。

イ　協力校における小中連携

・　各学校で学期に１回ずつ授業研究会を開催し、相互に参観し合い、学び合うシステムづくりを行った。

・　「学力向上を図るための授業づくりのポイント」をもとに、「学力向上をめざす授業づくり」チェックリストを作成した。授業研究会の指導案を作成する際には、チェックリストをもとにめざす授業となっているかを確認した。また、授業研究会当日には、参観者にチェックリストを配付し、研究協議の際に活用した。

・　研究協議会後には、各学校の教室環境を自由に参観し、掲示物などについてよい点を互いに学び合うことができるようにした。めあて・まとめカードや聞き方、話し方の合い言葉も、そこから生まれた。

## ３．実践研究の成果の把握・検証

実践研究の成果を明確化するために、年度当初の代表者会で検証の方法について話し合い、以下の三つの方法で検証することにした。

①　全国学力・学習状況調査の児童・生徒質問紙の質問項目をもとに本研究用に作成した「児童生徒用意識調査」を５月、７月、１２月に、学校質問紙の質問項目をもとに作成した「教師用意識調査」を７月と１２月に実施し、その結果を比較する。（４段階で意識調査を実施。４点満点で学校の平均値を比較する）

②　平成２８年度と２９年度の標準学力調査（ＣＲＴ）の結果を比較する。（全国比の数値を比較する。※全国平均の場合、全国比は１００、その学校の平均値÷全国平均値×１００で算出）

③　授業中の児童生徒の様子や「出力」した内容、学力コンクールへの取組状況など、各学校の実践内容に応じて変容をみる。

(1)　児童生徒意識調査の結果より

| 児童生徒用意識調査 | 祖父江小 | | | 領内小 | | | 長岡小 | | | 祖父江中 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ５月→12 月　　月 | 5 | 12 | 伸び | 5 | 12 | 伸び | 5 | 12 | 伸び | 5 | 12 | 伸び |
| 黒板にめあてが示される | 3.61 | 3.83 | 0.22 | 3.66 | 3.76 | 0.10 | 3.64 | 3.77 | 0.13 | 3.77 | 3.87 | 0.10 |
| 授業の最後にふりかえり | 3.18 | 3.32 | 0.14 | 3.17 | 3.28 | 0.11 | 3.41 | 3.56 | 0.15 | 2.89 | 3.06 | 0.17 |
| ノートにめあてとまとめ | 3.54 | 3.79 | 0.25 | 3.16 | 3.70 | 0.54 | 3.77 | 3.78 | 0.01 | 3.32 | 3.56 | 0.24 |
| 友達の意見を最後まで聞く | 3.43 | 3.54 | 0.11 | 3.45 | 3.49 | 0.04 | 3.83 | 3.88 | 0.05 | 3.56 | 3.50 | -0.06 |
| 考えを発表する機会がある | 3.09 | 3.32 | 0.23 | 3.21 | 3.23 | 0.02 | 3.76 | 3.77 | 0.01 | 3.43 | 3.41 | -0.02 |
| 話し合い活動をよく行う | 3.09 | 3.36 | 0.27 | 3.17 | 3.24 | 0.07 | 3.68 | 3.74 | 0.06 | 3.19 | 3.33 | 0.14 |
| 話し合いで考えを広げ深める | 3.04 | 3.14 | 0.10 | 3.17 | 3.34 | 0.17 | 3.55 | 3.55 | 0.00 | 3.08 | 3.10 | 0.02 |
| 理由を挙げて書く | 3.06 | 3.30 | 0.24 | 2.96 | 3.19 | 0.23 | 3.50 | 3.53 | 0.03 | 3.03 | 3.02 | -0.01 |
| よいところを認めてくれる | 3.18 | 3.25 | 0.07 | 2.98 | 3.25 | 0.27 | 3.41 | 3.59 | 0.18 | 3.08 | 3.17 | 0.09 |
| 分かるまで教えてくれる | 3.41 | 3.47 | 0.06 | 3.37 | 3.41 | 0.04 | 3.82 | 3.85 | 0.03 | 3.28 | 3.30 | 0.02 |
| 学校の平均値 | 3.26 | 3.43 | 0.17 | 3.23 | 3.39 | 0.16 | 3.64 | 3.70 | 0.06 | 3.26 | 3.33 | 0.07 |

・　「黒板にめあてが示される」「授業の最後に学習内容をふりかえる活動をよく行

っている」「ノートに学習のめあてとまとめを書いている」の項目は、どの学校も順調に伸びている。授業の流れの明確化を図り、同じめあてカードやまとめカードを活用して授業を進めたことにより、どの学級でも見通しをもって学習に取り組むことができるようになったと考える。

・　「友達の意見を最後までしっかりと聞く」「考えを発表する機会がある」「話し合い活動をよく行う」「話し合い活動で考えを広げ深める」の項目は、小学校では少しずつ向上している。学びのスタンダードの確立で話す力・聞く力の基盤づくりを行うとともに、四つの出力の場を設定し、本時の課題について「考えをつくる」「考えを広げ、深める」活動に取り組むことにより、意欲的に話し合うことができたと考える。一方、中学校においては、向上がみられない項目もあった。どの生徒も安心できる学級づくりを基盤にして、自己存在感を感じることができる授業づくりを充実させていきたい。

(2)　教師の意識調査の結果より

| 教師用意識調査 | 祖父江小 | | | 領内小 | | | 長岡小 | | | 祖父江中 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 7月→12月　　月 | 7 | 12 | 伸び | 7 | 12 | 伸び | 7 | 12 | 伸び | 7 | 12 | 伸び |
| 黒板にめあてを示す | 3.31 | 3.56 | 0.23 | 3.46 | 3.69 | 0.23 | 2.2 | 2.7 | 0.5 | 3.52 | 3.83 | 0.31 |
| 授業の最後にふりかえり | 3.22 | 3.44 | 0.22 | 3 | 3.23 | 0.23 | 1.9 | 2.6 | 0.7 | 3 | 2.96 | -0.04 |
| ノートにめあてとまとめ | 3.11 | 3.56 | 0.45 | 3.08 | 3.38 | 0.3 | 1.9 | 2.4 | 0.5 | 3.09 | 3.22 | 0.13 |
| 友達の意見を最後まで聞く | 2.5 | 2.88 | 0.38 | 2.38 | 2.46 | 0.08 | 1.7 | 1.8 | 0.1 | 2.74 | 3.13 | 0.39 |
| 考えを発表する場づくり | 2.88 | 3 | 0.12 | 2.46 | 2.85 | 0.39 | 1.5 | 1.8 | 0.3 | 2.61 | 2.91 | 0.3 |
| 話し合いで考えを広げ深める | 1.88 | 2.75 | 0.87 | 2.38 | 2.54 | 0.16 | 1.5 | 1.8 | 0.3 | 2.22 | 2.91 | 0.69 |
| 資料を使って発表 | 2.22 | 2.78 | 0.56 | 2.85 | 3.38 | 0.53 | 1.9 | 1.9 | 0 | 1.87 | 2.35 | 0.48 |
| 分かりやすく文章に書かせる | 2.67 | 3.22 | 0.55 | 2.31 | 2.65 | 0.34 | 2.2 | 2.3 | 0.03 | 2.43 | 2.7 | 0.27 |
| よいところを認める | 2.89 | 3.25 | 0.36 | 3.31 | 3.46 | 0.15 | 2.8 | 2.5 | -0.3 | 2.91 | 3 | 0.09 |
| 授業での形成的評価 | 2.71 | 2.75 | 0.04 | 2.62 | 2.92 | 0.3 | 1.9 | 1.7 | -0.2 | 2.7 | 2.52 | -0.18 |
| 学校の平均値 | 2.74 | 3.12 | 0.38 | 2.79 | 3.06 | 0.27 | 1.95 | 2.15 | 0.2 | 2.71 | 2.95 | 0.24 |

・　研究の内容に従って、「めあてとまとめ、ふりかえり」、「話すこと・聞くことの指導」に力を入れていることが意識調査から読み取れる。また、四つの出力の場において、話し合いの内容を高めるために、「資料を使って分かりやすく発表する」、「考えを分かりやすく文章に書く」ことも重点的に指導していることが分かる。四つの出力の場を設定するだけでなく、出力の内容を高める指導をすることで、話し合いの質を向上させ、思考力・判断力・表現力の育成に努めていることが分かる。

・　児童生徒のよいところを認めることや授業の中で評価を生かすことについては、不十分な結果が出ている。評価活動の工夫について、４校の教員の共通理解を図っていきたい。

・　上記の表以外の項目で、「学習についての学校の課題を全職員で共有すること」については、学校間で大きな差がみられた。今後はさらに研究の三つの柱に対する共通理解を図り、研修の浸透度を高めていく必要がある。

(3)　教研式標準学力検査（ＣＲＴ）の結果より

| 小学校国語 | 関心・意欲・態度 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全国比の比較 | 祖父江小学校 | | | 領内小学校 | | | 長岡小学校 | | |
| Ｈ２８→Ｈ２９ | Ｈ２８ | Ｈ２９ | 伸び | Ｈ２８ | Ｈ２９ | 伸び | Ｈ２８ | Ｈ２９ | 伸び |
| １年生→２年生 | 97 | 101 | 4 | 105 | 105 | 0 | 106 | 105 | −1 |
| ２年生→３年生 | 104 | 104 | 0 | 96 | 96 | 0 | 105 | 114 | 9 |
| ３年生→４年生 | 82 | 111 | 29 | 87 | 98 | 11 | 116 | 121 | 5 |
| ４年生→５年生 | 97 | 102 | 5 | 92 | 101 | 9 | 126 | 115 | −11 |
| ５年生→６年生 | 105 | 111 | 6 | 106 | 101 | −5 | 117 | 110 | −7 |

| 小学校算数 | 関心・意欲・態度 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全国比の比較 | 祖父江小学校 | | | 領内小学校 | | | 長岡小学校 | | |
| Ｈ２８→Ｈ２９ | Ｈ２８ | Ｈ２９ | 伸び | Ｈ２８ | Ｈ２９ | 伸び | Ｈ２８ | Ｈ２９ | 伸び |
| １年生→２年生 | 104 | 108 | 4 | 97 | 98 | 1 | 106 | 106 | 0 |
| ２年生→３年生 | 102 | 105 | 3 | 95 | 101 | 6 | 107 | 108 | 1 |
| ３年生→４年生 | 98 | 117 | 19 | 86 | 93 | 7 | 116 | 120 | 4 |
| ４年生→５年生 | 92 | 105 | 13 | 92 | 99 | 7 | 119 | 112 | −7 |
| ５年生→６年生 | 104 | 112 | 8 | 104 | 104 | 0 | 109 | 110 | 1 |

| 中学校数学 | 数学的な見方や考え方 | | |
|---|---|---|---|
| 全国比の比較 | 祖父江中学校 | | |
| Ｈ２８→Ｈ２９ | Ｈ２８ | Ｈ２９ | 差 |
| ６年生→１年生 | 102 | 112 | 10 |
| １年生→２年生 | 118 | 117 | −1 |

| 中学校数学 | 知識・理解 | | |
|---|---|---|---|
| 全国比の比較 | 祖父江中学校 | | |
| Ｈ２８→Ｈ２９ | Ｈ２８ | Ｈ２９ | 差 |
| ６年生→１年生 | 101 | 114 | 13 |
| １年生→２年生 | 112 | 111 | −1 |

教研式標準学力検査（ＣＲＴ）について、前年度と本年度の結果を比較をしたところ、以下のようなことが明らかになった。

- 小学校においては、関心・意欲・態度の観点の全国比の値が大きく向上した。授業の流れの明確化、学習意欲の向上、四つの出力の場の設定に取り組み、授業改善を図ったことは効果的であったと考える。
- 中学校においては、数学科の知識・理解と数学的な見方や考え方の観点の全国比の値が向上した。特に、中学校１年生での向上が大きい。授業の流れの明確化や学習意欲の向上、四つの出力の場の設定に取り組み、一人一人が参加・活躍できる授業づくりを行ったことは効果的であったと考える。
- 他の観点の全国比の値については、学年によって大きなばらつきがあり、研究の成果としてまとめることは難しい。この研究の内容に継続的に取り組み、全学年に浸透することを目指していきたい。

(4)　授業中の児童生徒の様子より

＜祖父江小学校＞

・　出力場面を意図的に設定することにより、自分の考えをもち、表現することができる児童が増えた。また、学び合いの場面では、積極的に意見を言ったり、友達と考えを比べ合って考えを一つに焦点化したりすることができるようになってきた。

＜領内小学校＞

・　出力場面を設定したことにより、授業の中で「考えをもち学び合う児童の姿」「友達の説明を聞いて理解を深める児童の姿」「自己評価により目標をもって学ぶ児童の姿」がみられるようになってきた。出力する場を設定する等の授業改善を行ったことで、児童が主体的に学ぶようになり、学習意欲が向上したと捉える。

＜長岡小学校＞

・　授業の導入で挿絵を活用したり、ＩＣＴ機器を使って教材を提示したりして、児童の興味・関心を高めるなどの授業改善を行ったことによって、授業の内容が分かりやすいものとなり、関心・意欲が向上した。

・　ペアやグループでの発表などの学習形態の工夫や、自分の考えを整理しながら書けるワークシートの活用など、児童に「出力」させる場を工夫したことによって、児童が理由や根拠を明確にして主体的に考えることができた。

＜祖父江中学校＞

・　授業後に振り返りの場を設定し、振り返り活動を継続することによって、生徒は知識や技能を身に付けることができている実感をもつことができた。また、振り返り活動で生徒が記述した文章からも、学習を積み重ねてきたことによって自信をもち、学びを生かしたいという思いをもったことを読み取ることができた。

・　意識調査で「学校が楽しい」「授業が分かる」と答える生徒数が増加しており、不登校生徒数が、昨年度から本年度にかけて大きく減少している。特に中学１年生の不登校数が減少しており、授業改善の成果がみられる。

## ４．今後の課題

・　２年間の取組を通して小中連携による研究体制を構築し、取組を充実させてきた。特に２年目となる本年度は、代表者会や授業研究会を充実させ、着実に研究を推進してきた。本年度に構築した体制を、今後も可能な限り持続できるように工夫していく必要がある。また、市内の他校に成果を発信し、研究の成果の普及に努めていく。

・　各学校の意識調査やＣＲＴの結果を分析していくと、学年によって大きな差がみられる学校もある。特に小規模校や生徒指導が困難な学校においては、研究の内容が十分に浸透していない。今後も各学校の研究への取組が継続できるように支援し、分かる楽しさ・できる喜びを味わい、確かな学力を身に付けた児童生徒を計画的に育成していきたい。

（様式２）

**「主体的･対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小･中学校）」**

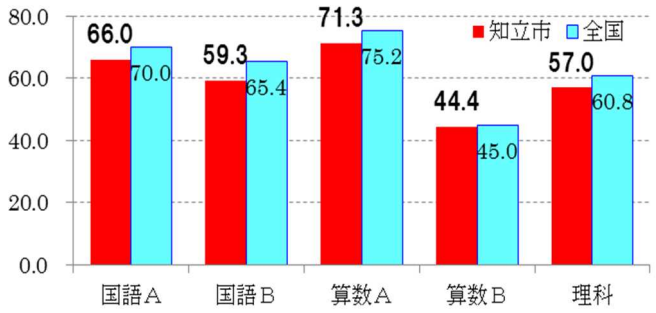
**平成２９年度委託事業完了報告書**

**【推進地区】**

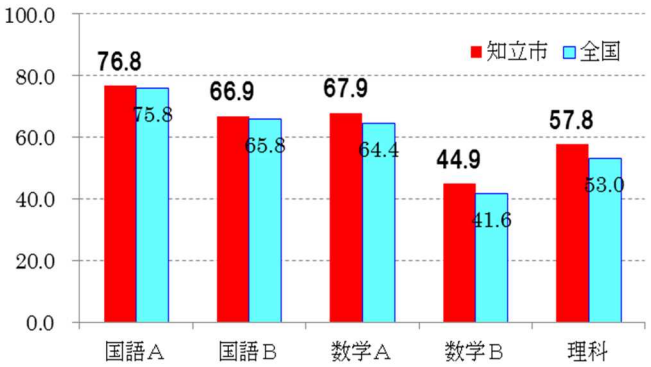
| 都道府県名 | 愛知県 | 番号 | ２３ |
|---|---|---|---|

| 推進地区名 | 知立市 |
|---|---|

１．研究課題

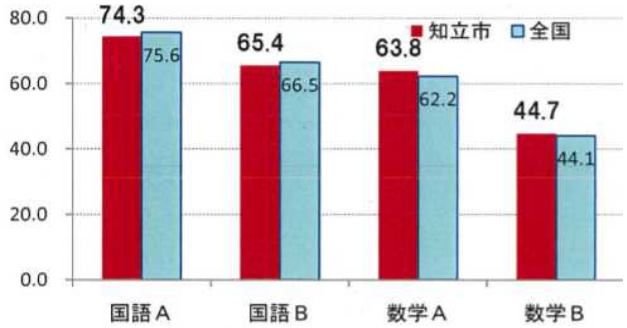



平成 27 年度全国学力･学習状況調査知立市結果(小学校)




平成 27 年度全国学力･学習状況調査知立市結果(中学校)

平成 28 年度全国学力･学習状況調査知立市結果(小学校)




平成 28 年度全国学力･学習状況調査知立市結果(中学校)

平成２８年度全国学力・学習状況調査において、本市小学校の結果は、国語Ａ・Ｂ算数Ａ・Ｂともに全国平均より下回っている。しかし、その差は平成２７年度と比較すると小さくなっており、改善されている。１教科あたりの正答率は平成２７年度の－３．６８から－１．９０になり、「おおむねできている」段階評価を得た。中学校においては、数学Ａ・Ｂの正答率ともに全国平均を上回ったが、国語Ａ・Ｂでは下回った。１教科あたりの正答率は平成２７年度の＋２．５４から－０．０５となり、「おおむねできている」段階評価を得た。調査内容を分析すると、小学校では、特に国語Ｂの「話し手の意図を捉えながら聞き、話の展開に沿って質問する」「活動報告文において「課題」を取り上げた効果を捉える」つまり、「話す・聞く・書く」の力が十分に身に付いていないことが明らかになった。中学校では国語Ａの「文章を読み返し、文の使い方などに注意して書く」つまり、「書く」力が十分でないことが分かった。

本市では、外国籍児童生徒が多く在籍している学校があり、「話す」「書く」といった国語の基礎学力の定着に問題を抱えている学校がある。それ以外の学校でも、複数の内容を整理して書いたり、資料から必要な情報を取り出して関連付け、自分の考えを書いたりすることに課題があることが分かった。どの学校においても、語彙力を高め、全ての教科で言語活動教育の一層の充実を図っていかなければならない。

また、児童生徒質問紙調査の結果から、小学校では学校の勉強以外に１時間以上家庭学習に取り組む児童の割合が過去最低の結果となった。家庭学習が習慣化されておらず、継続して学習に取り組むことを苦手としている。また、話し合い活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思っている児童の割合は高かったが、原稿用紙２～３枚の感想文や説明文を書くことが難しいと思う児童の割合が高かった。中学校でも学校の勉強以外に１時間以上家庭学習に取り組む生徒の割合が低い結果となった。また、授業で分からないことがあったら、自分で調べる生徒の割合は高かったが、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることを難しいと思っている生徒の割合が高かった。

これらの現状から、本市の課題を「伝え合い、学び合う授業づくりを展開するための「聞く・話す・書く」力の育成と「家庭学習」の習慣化と質の向上と考える。

また、知立市学校教育スタンダードとして、「活用力（言語活動）」「粘り強さ（最後まで頑張る）」「生活･学習習慣」の三つを重点項目とし、市内全教員が大事にしたい教育的内容を共有し、学習指導・生活指導を行っていく。学習面では特に、主体的・対話的で深い学びを意識したアクティブラーニングの視点からの「聞く・話す・書く」に力を入れた学習過程の改善に取り組んでいく。

（１）活用力（言語活動）

言語に関する能力は学習活動の基盤であるとともに、コミュニケーションや感性･情緒の基盤でもある。体験、観察･実験などをし、それらをまとめ、知識や経験に照らして考えを論述するなど、教科の特質に応じた言語活動を充実させていく。

（２）粘り強さ（最後まで頑張る）

基礎的･基本的な知識･技能（学んだ力）を基盤として、課題を解決するために必要な力（学ぶ力）を身に付け、最後まで粘り強く学習に取り組む意欲や態度（学ぼうとする力）を育んでいく。

（３）生活・学習習慣

身に付けた活用力や粘り強さを生かすために、自らを律し規則正しい習慣を身に付けることが望ましい。毎日時間を決めて学習を行ったり、読書を継続したりすることを家庭に啓発していく。また、睡眠や食に対する意識やテレビやゲーム、携帯電話などに対する子供のモラル向上も図っていく。

**２．研究課題への取組状況**

（１）活用力（言語活動）を身に付けさせるために

・「知立市学校教育スタンダード　かきつばた」の視点での授業実践

各校で「かきつばた」の視点を指導案に位置づけるとともに、学力調査の結果を踏まえた重点項目を決め、授業実践を行った。教師の授業力向上を図り、子供たちが「分かった」「できた」という達成感が得られるようにした。

**「知立市学校教育スタンダード　かきつばた」**

**か**　課題（めあて）とふり返り（まとめ）を明確に、授業に見通しを！
**き**　「聞く」「話す」「書く」学習スキルの習得を！
**つ**　伝え合い、学び合う授業づくりを！
**ば**　板書で子どもの思考の足跡を！
**た**　だれもが「わかる」「できる」授業を！

・外部講師を招いた研究授業の推進

知立市学校教育スタンダード「かきつばた」を基に授業実践を見直し、教師の授業力の向上を図った。各学校の課題にきめ細かく対応するために、専門的な外部講師を招いた授業研究を行った。

・ワークシート・メモの活用

まとまりのある文章が書けるようにワークシートを準備し、作文指導を行った。①自分で作ったメモを貼る→②友達からの質問メモを貼る→③時系列を確認しメモを並び替える→④文を書く、の一連の学習活動を行い、読み手に分かるように整理して文章を書く力が付くように指導を行った。

・思考ツールの活用

目的や意図に応じて文章を書くために、思考ツール「マトリックス」「ウェビング」「ベン図」などを活用し、経験や情報を想起・整理し、文章を書く指導を行った。また、話し合い活動にも思考ツールを使い、自分の考えを整理する工夫を図った。

【学習ボードを利用して話し合う児童】

・「ペアトーク」「フリートーク」の活用

全員発言を目指し、苦手意識を取り除くために、担任もしくは子供から出された話題のフリートークの時間を設定した。

・「学習ボード」の活用

資料を挟む、自由に書き込む、黒板に貼ることができる学習ボードを、自分の考えを整理する場面や話し合いの場面などで活用し、言語活動の充実を図った。

（２）粘り強さ（最後まで頑張る）を身に付けさせるために

・基本的な学習習慣を確立する

話を聞くときには発表者に体を向け、顔をしっかり見ることや相槌を打ちながら話を聞くことなど、機会を捉えて指導した。また質問や付け足し、友達の意見を聞いてつなげて発言するなど、「話し方あいうえお」「聞き方かきくけこ」の合言葉で、聞き方・話し方が身に付くよう指導した。

・「学び合う」ことができる学習集団づくり

学力向上のための基礎（土台）は良好な人間関係にあると考え、学級づくり（学級経営）の充実を目指した。そのために、hyper-QU 検査を年２回実施し、結果から学級の傾向や児童一人一人を理解し、その対応にあたった。

・長期休業を生かす

長期休業時に「学びの日」（補充学習）を実施し、学習内容を振り返り、学力の向上を図った。支援の必要な子に対して、個別あるいは少人数で対応した。

・適応指導・日本語指導・少人数指導の工夫

最後まで諦めずに学習に取り組む習慣を身に付けるため、実態に合わせ、授業の形態を変えて取り出し授業・学級入り込み授業などを行った。「分かる・できる・楽しい」が実感できる授業を目指し、少人数指導では、単元による等質・習熟度別学級編成やティーム･ティーチングを行った。

・自己存在感を高める

機会を捉え、自分たちの学級についてみんなで話し合い、「できた」「自分の意見が仲間の役に立った」「自分にもよさがある」といった自己存在感、自己有用感を味わわせた。

・ＩＣＴを活用した授業の実践

タブレットや書画カメラ等視覚化を図るＩＣＴ機器を積極的に活用する。デジタル教科書を活用し、聞き取りが苦手な子に視覚的な情報を与え、支援した。

（３）生活・学習習慣を身に付けさせるために

・家庭学習の推進

子供たちが確かな学力を身に付けるために、発達段階に合わせた取組内容の紹介や目安とする学習時間を示した「家庭学習のススメ」（リーフレット）を改訂発行し、全家庭に配付した。また、リーフレット裏面記載の「我が家のチェックシート」（子供用･保護者用）について、全児童生徒･保護者に対してアンケートを取り、全家庭にその結果を配付する。

・学校保健会・学校給食センターとの連携

睡眠と生活習慣が学習に及ぼす影響に着目し、「早寝・早起き・朝ご飯」を合言葉に、市学校保健会で研究に取り組んだ。また、学校給食センターは「共食で心も体も育つ」の考えの下、食の大切さを「食育だより」として発行している。

【推進地区が行った指導･助言の状況】

・学力向上研究推進委員会を定期的に開催し、取組の進捗状況の評価を行い、今後の方向性や改善策を確認した。

・知立市ホームページに全国学力・学習状況調査の結果と考察を公表し、指標を示した。

・「これから求められる“資質・能力”と確かな学力の定着・向上」という演題で、夏季研修会を全教員対象に対し実施した。（平成28年度）

・教職経験４年目までの教員対象に「かきつばた勉強会」を実施した。（平成28年度）

・教務主任対象の研修会に外部講師を招聘し実施した。（平成28年度）

・知立市内における教育研究会において取組内容を発表し、研究成果の普及を図った。（平成29年度）

## ３．実践研究の成果の把握･検証

実践研究の成果を検証するために、以下の４項目で検証を行った。

①学習状況チェックカードによる子供の意識アンケートの実施

（小５・６年生と中２・３年生に対して平成28年3月と平成29年7･12月に実施した。）

②学習指導チェックカードによる教師の意識アンケートの実施

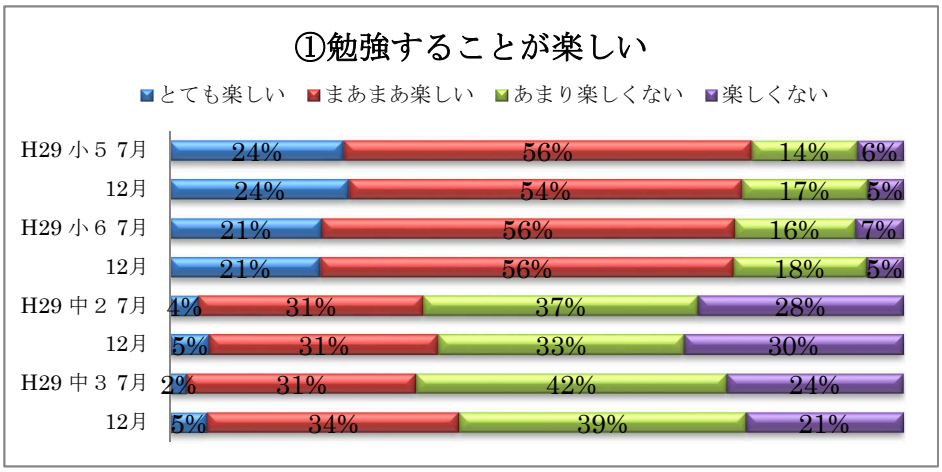
③全国学力･学習状況調査や標準学力検査等による児童生徒の調査結果と学習状況の把握と分析

④学校評価アンケート等による児童生徒・教師の学習・指導への意識の変容の把握と分析

**【検証結果】**

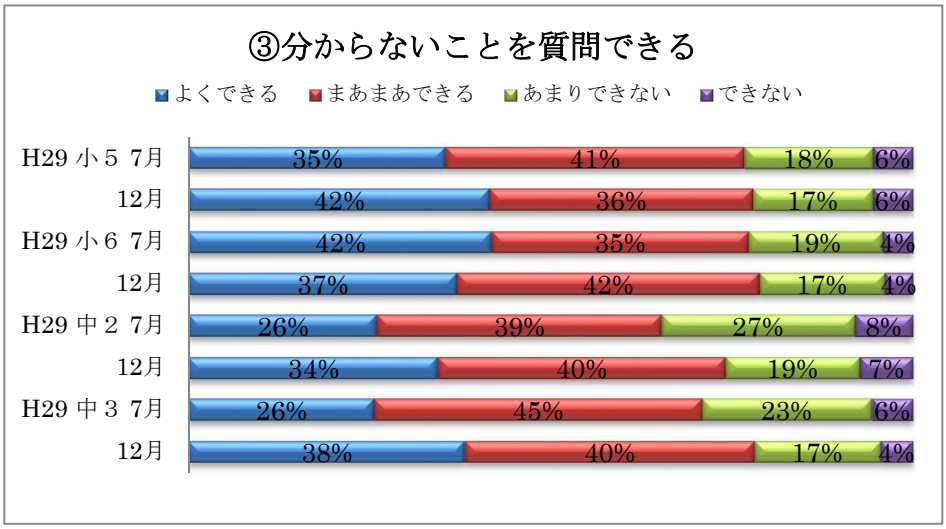
①学習状況チェックカードによる子供の意識アンケートから

小学生では「勉強することが楽しい」と約 80%の児童が答えているが、中学生ではその半分ほどの割合に減少してしまう。これは、学校生活や授業のやり方・学習量など、環境の変化が起因する、いわゆる中 1 ギャップの影響だと考えられる。進学した子供が学習環境の変化に戸惑わないよう、小学校と中学校の連携強化の必要性がある。




しかしながら、平成 29 年 7 月と 12 月の年度途中の調査結果の変化を比較すると、勉強することが楽しいと答えた小学生の割合が横ばいの状態に対して、中学生の割合は若干上昇している。（現中学２年生：35→36%　現中学３年生：33%→39%）これは、知立市学校教育スタンダードによる対話的な授業の改善が効果を上げているのではないかと考える。

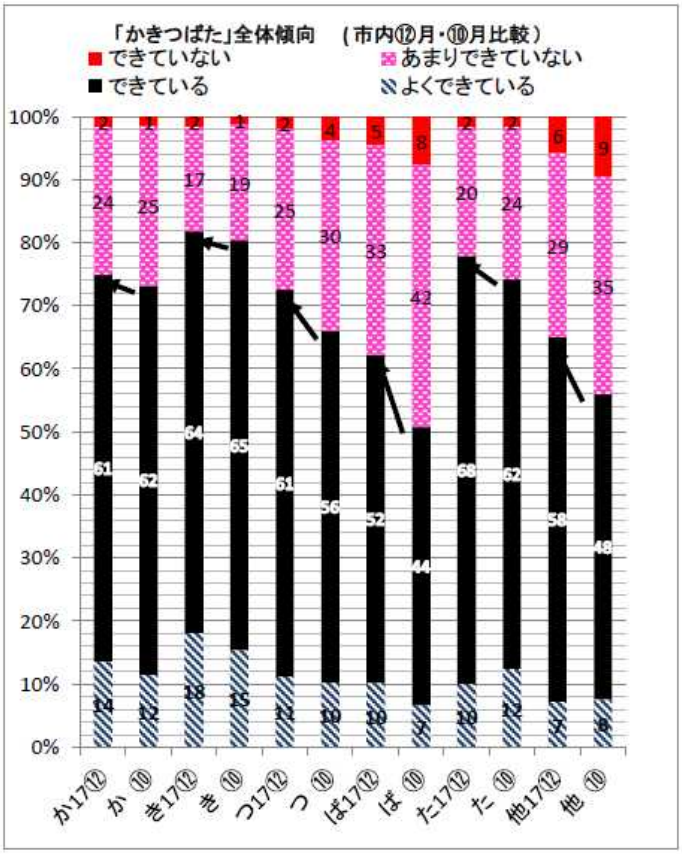
中学校では、全ての質問項目に対して「よくできる」「まあまあできる」と答えている生徒の割合が増えている。学習への意欲向上が見られた。例えば、「分からないことを質問できる」の問いに、２・３年ともに伸びていた。これは、「かきつばた」の特に「【き】　聞く　話す　書く　学習スキルの習得を！」や「【つ】伝え合い　学び合う授業づくりを！」において、授業改善がなされたからであり、その効果が中学校において高いことが分かる。また、上述の「勉強することが楽しい」という問いと違い、中学入学時に割合が大きく減少していないのは、市全体で「学校教育スタンダード」の重点項目を確認し、教師が授業改善に取り組んでいるからではないだろうか。小、中学校同じように、授業で「聞く」「話す」ことを大切に、伝え合い、学び合う授業を教師が意識して取り組むことが浸透しつつある。




②学習指導チェックカードによる教師の意識アンケートから

平成 29 年度 7 月と 12 月の教師の意識を比較してみると、「かきつばた」の全ての項目の割合が上昇していた。特に、「き」の意識が高く、市全体に教師が「聞く」「話す」ことを大切にした授業展開が図られていることが分かる。「つ」「ば」の意識が低いが、伸び率は高く、改善しようとする傾向が見られた。指導案中の〈教師の支援〉の欄に、「かきつばた」を明記することで、常に授業のポイントを意識して考えることができ、授業改善に効果的であったと捉えている。

しかし、平成 28 年度３月と比べると 29 年 7 月の教師の意識は、児童生徒のアンケート結果と同様に、かきつばたスタンダードに対する意識の減退が見られた。新年度になり、意識が一旦薄くなるのは、年度当初の立ち上げや学級づくりの期間が影響するのかもしれない。




また、アンケートの記述には、「板書計画を立てることで１時間の流れを見通すことができ、経験年数の少ない教師も課題を明確に示し、ぶれることなく授業を行うことができた」「授業記録を取ることで、授業を振り返り、教師の出場を減らし、子供たちによる伝え合う授業に取り組むことができた」など授業改善に取り組む姿勢が書かれていた。

③全国学力・学習状況調査等の結果から

平成 29 年度の調査結果は、小学校の学力調査の正答率が、国語ＡＢ・算数Ａにおいて全国平均を下回る結果となったが、前年度より正答率の差は縮まっている。算数Ｂの正答率は全国平均を上回ることができた。「かきつばたスタンダード」を全教師が意識し、話し合い活動を中心に授業展開の工夫を図ってきた成果が現れているからだと考えている。しかし、小学校では必ずしも話し合い活動を多く取り入れることが子供の学力を定着させることに効果的だったとは言い切ることができなかった。話す力が十分についていない発達段階の低学年では、話すスキルを含めた基礎的・基本的知識や技能を指導することが重要であり、それが基となってはじめて考える力が身に付くと考えられる。

中学３年生の学力調査の正答率は、国語Ａは全国平均と同等であり、その他は上回っていた。小学６年生当時と３年後の中学３年生時の結果を比較すると、明らかに学力が向上していることが資料①から読み取れる。かきつばたスタンダードの意識化は、特に中学校において学力向上の効果が高かった。もちろん、小学校からの授業改善も中学校の結果として出ていると考えたい。

【全国平均との差　同じ学年の経年変化】（資料①）

| | 国語Ａ | 国語Ｂ | 数学（算数）Ａ | 数学（算数）Ｂ |
|---|---|---|---|---|
| 平成 26 年度小６ | ＋０．２ | －５．０ | －１．３ | －０．７ |
| 平成 29 年度中３ | －０．４ | ＋１．８ | ＋１．４ | ＋０．９ |
| 比較 | －０．６ | ＋６．８ | ＋２．７ | ＋１．６ |

しかし、国語Ａにおける 0.6 ポイントの減少は、適切な語句を用いて書くなどの基礎・基本がおろそかになっているからとも言える。

質問紙の回答から、小学校でも国語の勉強が好きと答えた児童の割合が、28 年度より 2.9 ポイント増加しており、算数の勉強が好きと答えた児童の割合よりも低いものの、増え幅は大きい。（資料②）伝え合う授業づくりに力を入れたことにより、小学生においても意欲を向上させつつある。さらに、中学校では、国語の勉強が好きと答えた生徒の割合が、28 年度より 13.4 ポイントも増加しており、中学校での効果の高さが伺える。「考えの理由が分かるように気を付けて書いている」と答えた生徒の割合も 28 年度より 3.7 ポイント増加しており、「書く」「話す」ことを意識しながら学習に取り組むようになってきたと言える。（資料③）

【小学校　質問紙より】（資料②）

| | 国語の勉強が好き | 算数の勉強が好き |
|---|---|---|
| 平成 28 年度 | ５３．５％ | ６９．７％ |
| 平成 29 年度 | ５６．４％ | ７２．２％ |
| 比　較 | ＋２．９ | ＋２．５ |

【中学校　質問紙より】（資料③）

| | 国語の勉強が好き | 考えの理由が分かるように書いている |
|---|---|---|
| 平成 28 年度 | ４８．８％ | ６２．２％ |
| 平成 29 年度 | ６２．２％ | ６５．９％ |
| 比　較 | ＋１３．４ | ＋３．７ |

④ 学校評価アンケート等の結果から

各学校から、次のような報告があった。

・ワークシート・メモを活用して作文指導をしたところ、「上手に文章が書ける」と答えた児童が実践前の 43%から 60%まで上昇した。

・ペアトーク・グループトークを取り入れることで、自分の考えに自信をもって発言することができるようになった。「みんなで話し合う授業は楽しい」と答えた。

・学校評価アンケートで「授業中、意見や考えをすすんで発表しているか」の問いに対して「できた・だいたいできた」と回答した児童が平成 28 年度よりも 6.6 ポイント増加した。

## ４．今後の課題

「知立市学校教育スタンダード」の意識化を図りながら伝え合う授業づくりや講師を招聘しての研修会などを計画的に実施し、授業改善を進めてきた。その成果は、学力調査の結果が全国平均に迫り、越える結果が得られたことからも、着実に上がっていることが読み取れる。全市的な授業改善の統一した意識化を図ることによって高い効果が得られることが分かった。

しかし、小学校、中学校ともに国語の正答率が全国平均より低く、「目的や意図に応じて、必要な内容を整理して書いたり、文章全体の構成を考えて書いたりすること」「伝えたい事実や事柄について、根拠として取り上げる内容が適切かどうか吟味すること」にまだ課題があることも分かった。伝え合い、学び合う授業づくりを意識して研究実践を行ってきたが、相手に分かりやすく伝えるための語彙や文を作る基礎的・基本的な技能・知識を習得させることをさらに指導していく必要がある。特に小学校では、まず基礎・基本を身に付けさせる繰り返し学習など十分に行い、その上で伝え合い、深め合う授業を実践していく必要がある。

中学校では学年が上るにつれ、「勉強することが楽しい」と答えた生徒の割合が増加した。しかし、小学６年生の３月と中学１年生の７月を比較したとき、アンケート結果のどの項目の数値も一旦下がっている。小・中学校間にギャップがあると言わざるを得ない。持続可能な小中学校連携の推進体制

の強化が必要である。合同研修会を開催し、学校間交流の工夫を図っていきたい。

　また、「家庭学習のススメ」を作成して家庭との連携も進めてきたが、その成果について十分に検証することができなかった。「宿題以外に自分で考えてやっている」の問いに対して、中学３年生以外、肯定的に回答した児童生徒の割合が低い。家庭での自分の学力に見合った主体的な学習はいまだ不十分と言える。「家庭学習のススメ改訂版」を作成して発達段階に合わせた取組を家庭に紹介した。家庭学習への意識がどう変わったのかを注視しながら、さらに工夫し啓発を行っていく必要がある。家庭学習の時間の確保や学習内容の質を上げるためには、家庭の協力はもちろんのこと、学級担任、学校の取組が大きく影響してくる。市全体の取組の成果を共有しながら、今後も工夫改善に努めていきたい。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成２９年度委託事業完了報告書

【協力校】

| 都道府県名 | 愛知県 | 番号 | ２３ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 愛知県稲沢市立祖父江小学校 |
|---|---|

## ○　協力校として実施した取組内容

### １．当初の課題

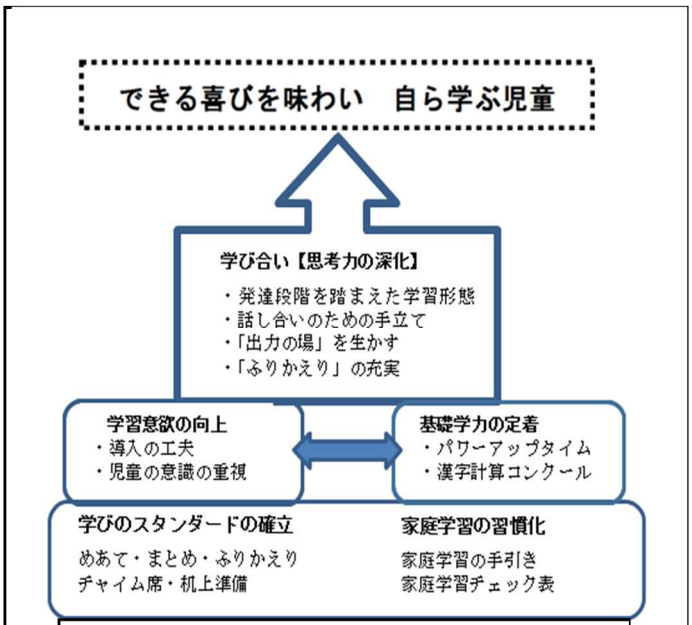
本校は、平成２８年度末の教研式標準学力検査 CRT においては、国語科、算数科ともに得点率は全国平均より低い傾向にある。領域別に見ると、特に国語科では「読むこと」、算数科では「図形」が、多学年に渡り低い数値になっている。本年度の全国学力・学習状況調査では、「学校の授業などで、自分の考えを他人に説明したり、文章に書いたりすること」に課題が見られた。木曽川沿いの校区には、水田と銀杏畑が広がっており、３世代が共に暮らす家庭が多いが、実家で暮らしている片親家庭も増えてきている。また、鉄道の沿線から少し距離があり、遠距離の学校への進学が難しいせいか家庭学習に対しての意欲はあまり高くない。平成２８年度は四つの柱（①児童が主体的に学ぶための授業改善、② 教師の指導力向上、③基礎学力の定着と家庭学習の習慣化、④読解力の向上を目指した読書活動を推進）を基に学力向上に取り組んできたが、いくつかの課題が残った。そこで、平成２８年度末に祖父江中学校とそこへ進学する小学校３校で連携し、次のような研究課題を定めた。

(1)　学びのスタンダードの確立

(2)　授業改善と評価活動の工夫

(3)　家庭、地域の学校との連携

本研究に際し、本校では資料１のような研究構想図に従って、研究実践に取り組んだ。



【資料１】本校の研究構想図

### ２．協力校としての取組状況

（１）学びのスタンダードの確立

児童が学習規律を守り、落ち着いて授業に取り組めるよう、小学校３校で共通の「五つの約束」を教室内に掲示した。また、話す・聞くときのきまり「聞き方のあいうえお」「話し方のかきくけこ」や話型も教室掲示し、授業の中で継続的に指導した。さらに、「めあて」「まとめ」カードも

４校で共通したものを作成し、どの授業でも活用できるようにした。

（２）授業改善と評価活動の工夫

ア　授業の流れの明確化

(4) 指導過程　　本時の学習課題　　〔　　〕個に応じた支援　　思考力を深めるための手立て

| 段 | 分 | 学習活動 | 予想される児童の反応 | 形態 | 手立ておよび評価 |
|---|---|---|---|---|---|
| つかむ | 2 | 1　前時の復習をする。 | 円の面積を求める公式は「半径×半径×３、１４」でしたね。 | 斉<br>具体物 | ○　前時の学習内容を想起させ、円の面積の公式について具体物を見せながら確認する。 |
| | 3 | 2　本時の学習課題をつかむ。 | 色を塗った部分の面積を工夫して求め、説明しよう。 | 斉 | ○　デジタル教科書で求める図を提示して視覚化することで、意欲化を図る。 |
| 筋道を立てて考える | | 3　色を塗った部分の面積を求める。 | | | |
| | 5 | (1) 自分で求める。 | この図形の色を塗った部分の面積をどうやって求めますか。<br>①円の面積÷４でおうぎ形の面積を求める。三角形の面積を求める。おうぎ形－三角形をして２倍にする。<br>②正方形の面積を求める。円の面積÷４でおうぎ形の面積を求める。正方形－おうぎ形をして二倍し、正方形から引く。<br>③円の面積÷４でおうぎ形の面積を求める。正方形－おうぎ形をして、おうぎ形からそれを引く。<br>※柔軟に考えさせ上記以外の考え方も承認していく。 | 個<br>図形<br>プリント | ○　自分の考えを必ずもたせる。<br>○　求め方は１通りではないことを伝え、いろいろな求め方を考えさせる。<br>（立式ができない児童）<br>・補助線を入れたり、線で囲ったりして、求めたい形をしっかり認識させる。<br>・既習の面積の公式を思い出させる。<br>（早くできた児童）<br>・１通りではなく、他の求め方にも取り組ませる。 |
| | 10 | (2) グループで話し合う。 | おうぎ形：10 × 10 × 3.14 ÷ 4 ＝ 78.5<br>三角形　：10 × 10 ÷ 2 ＝ 50<br>正方形　：10 × 10 ＝ 100　　答え　５７ｃｍ²<br>※上記の形を利用して求める。 | グ<br>図形<br>カード | ○　はじめに答えを伝えておき、自分の考えたものが正しいかどうか、各自で確認できるようにしておく。<br>○　「まず・つぎに・最後に」を使って説明させる。<br>○　つながる話し方を意識した発表をさせ、考えを練り上げさせる。<br>○　「まず・つぎに・最後に」を使って説明させる。<br>○　「つながる話し方」を意識させる。 |
| | 10 | (3) 発表する。 | | 斉<br>図形<br>カード | ○　図と式を結び付けて説明させる。<br>○　お互いの考えを伝え合ったら、自分と違う求め方を書き加えて説明できるようにさせる。<br>★　評価の場面 |
| 確かにする | 9 | 4　それぞれの式が表す意味を再度確認させる。 | 式を見て、どんな考え方をしているのか説明しましょう。 | 斉<br>書画<br>カメラ | ○　ノートの持ち主とは別のグループの児童を指名し前へ出てきて、図や式を指し示しながら説明させる。<br>○　「まず・つぎに・最後に」を使って説明させる。<br>○　自分が理解できているか確認しながら聞かせる。 |
| まとめる | 3 | 5　本時のまとめをする。 | 複雑な図形でも、今まで習ったさまざまな形の面積の公式を組み合わせれば、その面積を求めることができる。 | 斉 | ○　児童が残した表現を利用してまとめる。 |
| | 2 | 6　ふりかえりをする。 | | 個 | ○　分かったことや次につながる気づき・疑問を書かせる。 |
| | 1 | 7　次時の予告を聞く。 | | 斉 | ○　単元のまとめの問題を解くことを知らせる。 |

5　反　省
6　高　評

- 1 -

**【資料２】児童の思考の流れを示した指導案**

児童が主体的に学習に取り組むために、指導案の形式を工夫し、児童の思考の流れを明確化するようにした。【資料２】また、「めあて」と「まとめ」の提示と振り返りの場を設け、児童自らがめあてをつかんだり、学んだことをまとめ、振り返ったりする活動を設定した。

イ　学習意欲の向上

知的好奇心を高揚させ、「やってみたい」という必要感をもたせる課題提示の仕方や ICT 機器の活用、発問や問い返しなどの工夫を行った。

１年生の国語科「くらべてよもう・じどう車くらべ」で、教材には載っていない自動車について「しごと」と「つくり」を説明する文章を書くことをねらいとし、実践した。授業の導入では、自動車の写真を使って、未習の自動車を提示した。【資料３】写真を使って資料を提示したことによって、知りたいという気持ちを高め、意欲的に学習に取り組ませることができた。読み取りの場面では、今までの教材文同様に、学習を生かして「しごと」と「つくり」をまとめ、文にすることができた。その後のペアでの交流では、お互いの読み取ったことを伝え合うことができた。また、全体の前でも書画カメラを用いて、自分の考えに自信をもち積極的に発表をすることができた。【資料４】

**【資料３】自動車の写真の提示**

**【資料４】書画カメラを使った発表**

ウ　四つの出力の場の設定

導入、展開、まとめの各段階で、児童が書いたり話したりする４つの出力場面を設定した。【資料５】６年生の算数科「円の面積」での単元の導入場面では、円の公式を考える際に使った具体物を見せ、公式を確認した。既習後は、授業の導入場面で必ず確認し、全員が公式を言えるようにした出力場面①。課題解決の場面では、複合図形の求積方法について、まず自分の考えをもたせた出力場面②。そして、正答を確認してから考え方について４人グループで話し合わせた。出力場面③【資料６】その際色分けした図形カードを用意し、説明に利用させた。図形カードを効果的に使って説明し合う班もあった。解き方を発表する場面では、書画カメラを使ってワークシートに書き込んだ式をスクリーンに映し出し、図を指し示しながら「まず・次に・最後に」の順番を表す言葉を使って説明させた。３通りの解き方を紹介することができた。その後、どのやり方でも答えが同じになること、自分が考えやすい解き方をするとよいことを確認できた。最後に本時の活動について自己評価させた出力場面④ところ、主体的に活動できたと思っている児童が約８割であった。「友達と話し合うことで自分の考えが深まったり、広がったりした」と記述している児童も見られた。

| | |
|---|---|
| 導入 | 出力場面① |
| | 既習事項の確認 |
| 展開１ | 出力場面② |
| | 自分の考えをもつ |
| 展開２ | 出力場面③ |
| | 話し合い活動で自分の考えを広げ、深める |
| まとめ | 出力場面④ |
| | 学習内容の定着 |

【資料５】４つの出力場面

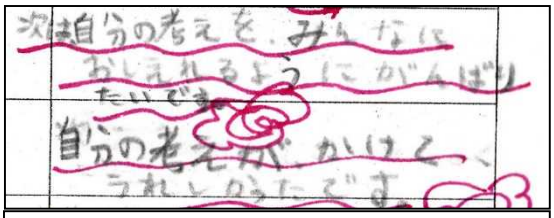
【資料６】話し合いの様子

エ　評価活動の工夫

振り返り場面において、教師の指導方法や児童の達成状況から、指導と評価の一体化を図ることができるような評価のあり方について取り組んだ。

①　児童の「ふりかえり」の充実

３年生の算数科「分数」の実践では、「同分母分数の加法の仕方について考える」というねらいに沿って、具体物を使って導入を行った。その後、ヒントカード、既習内容の掲示物、毎時の内容をまとめた分数ノートを活用し、出力場面②への手だてを行った。また、出力場面③では、書き手・司会・発表者などの役割分担を行い、それぞれの考えに「共通するところ」や、「気付いたこと」をグループで話し合わせた。その結果、「もとにする分数がいくつ分かを考える」という本時のねらいにたどり着くことができた。児童が書いた本時の自己評価では、児童全員が「自分の考えを書くことができた」と答えた。【資料７】「友達と話し合う活動に参加し、自分の意見を言えた」と答えた児童が８割であった。自分の考えをしっかりともてたことで、自信をもって参加することができた。




【資料７】振り返りカード

② 教師の「ふりかえり」の充実

研究授業後には、よかった点や改善点などを書き込んだ赤と青の付箋を用いて、ワークショップ形式での研究協議会を行った。【資料８】付箋を同じ項目で分けたり、見出しを書いたりしながら、手だての検証を参加者全員で行った。最後に、三つのよい点と１つの改善点をまとめ、授業の確認を行うとともに、全教師で共有を図った。

【資料８】ワークショップの様子

また、７月に行った教師意識調査の結果、学びのスタンダードについては意識できている教師が多かったものの、振り返り活動に弱さがみられた。そこで、２学期から振り返りシートの作成を統一事項として取り組んだ。

（３） 家庭との連携、地域の学校間の連携

ア 家庭との連携

昨年度に引き続き、「家庭学習の手引き」を配付し、学年懇談会の機会を通して家庭学習の習慣化を啓発した。保護者には家庭学習チェック表を配付し、毎日サインをしてもらい、家庭と連携しながら家庭学習の定着に取り組んだ。また、３年生以上には自主学習ノートに「自主学習ノートでの勉強の進め方」【資料９】を貼らせ、授業の予習や復習を中心に、自分の興味がある学習に自主的に取り組ませた。

自主学習ノートでの勉強の進め方

祖父江小学校　５年生

○ 毎日１ページ以上取り組みましょう。
（テスト前は，できるだけがんばりましょう。）

○ 教科は、どの教科でもよいです。
（ただし，毎日同じ教科というのはやめましょう。）

○ こんなことをやろう。

| | |
|---|---|
| 国語 | ① 今勉強しているところの漢字ドリルを、自主ノートにやる。<br>② 国語の教科書を読んで、自分の知らない言葉の意味調べをしてみる。<br>③ 市販のドリルを、やってみる。<br>④ 教科書を読み、大切だと思うところを、自分でノートに写したりまとめたりする。 |
| 算数 | ① 今勉強しているところの計算ドリルを、自主ノートにやる。<br>② その日学校で学習したことを、もう一度まとめてみる。<br>③ 市販のドリルを、やってみる。<br>④ 授業のノートを写す。<br>⑤ 教科書を読み、大切だと思うところを、自分でノートに写したりまとめたりする。 |
| 理科<br>社会<br>家庭<br>保健<br>総合 | ① 授業のノートを写す。<br>② 授業で気になったこと、もっとくわしく知りたいことを本や資料で調べて、自主ノートにまとめる。<br>③ 自分でやってみたい学習（追求できる課題に挑戦）をする。<br>④ 教科書を読み、大切だと思うところを、自分でノートに写したりまとめたりする。 |

【資料９】自主学習の進め方

イ 協力校における小中連携

１０月には、４校で連携した研修会を本校で行った。本校は小規模校で単学級のため、担任は６人しかいないが、連携している３つの学校から多くの教師に参加してもらい、協議会でも活発な意見交換がなされた。【写真１０】特に、若手教師にとっては、とてもいい刺激となった。また、各担任は、連携校で行われた授業研究会にも分担して一度は参加した。連携校の取り組みを直接知る機会となり、本研究への取り組み方の姿勢も変わってきた。

【資料１０】４校での協議会の様子

## ３．取組の成果の把握・検証

（１）教研式標準学力検査 CRT より

○ 全国平均と比較すると、国語科では３学年が、算数科では２学年が平均を上回ることができた。【資料１１―①②】

○ 前年度と比較すると国語科算数科ともに５学年中３学年の得点率が向上した。【資料１１―①②】

| | 祖小 | 全国 | 全国との差 | 前年との差 | 前年より向上 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1年 | 77.7 | 80.1 | −2.4 | | |
| 2年 | 77.9 | 76.8 | 1.1 | 0.1 | ○ |
| 3年 | 68 | 66 | 2 | 5.7 | ○ |
| 4年 | 68.9 | 70.5 | −1.6 | −9.3 | △ |
| 5年 | 69.1 | 67 | 2.1 | 5.2 | ○ |
| 6年 | 67.6 | 71.5 | −3.9 | −3.8 | △ |
| 平均 | 71.5 | 72.0 | −0.4 | | |

【資料１１－①】国語科得点率

| | 祖小 | 全国 | 全国との差 | 前年との差 | 前年より向上 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1年 | 74.5 | 79.4 | −4.9 | | |
| 2年 | 77.5 | 79.3 | −1.8 | 1.2 | ○ |
| 3年 | 74.7 | 76.6 | −1.9 | −3.7 | △ |
| 4年 | 72.6 | 68.6 | 4 | −5.5 | △ |
| 5年 | 69.4 | 68.6 | 0.8 | 6.8 | ○ |
| 6年 | 63 | 67.1 | −4.1 | 1.9 | ○ |
| 平均 | 72.0 | 73.3 | −1.3 | | |

【資料１１－②】算数科得点率

○　領域別にみると、国語科では「話すこと・聞くこと」の領域において向上が見られた学年が多い。【資料１２】四つの出力場面を設定し、出力場面３で、ペアや小グループでの話し合いを取り入れたことにより、話す・聞く力の向上が見られたと思われる。

| 平成２９年度 | | １年 | ２年 | ３年 | ４年 | ５年 | ６年 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 話す・聞く | 本校 | 71.7 | 83.2 | 80.2 | 77.8 | 85.3 | 75.5 |
| | 全国 | 69.8 | 81.0 | 78.3 | 76.8 | 80.6 | 75.8 |
| | 差 | 1.9 | 2.2 | 1.9 | 1.0 | 4.7 | -0.3 |
| | 前年検査時 | | 0.1 | -1.5 | 4.2 | 0.5 | 2.1 |
| | 前年との差 | | 2.1 | 3.4 | -3.2 | 4.2 | -2.4 |

【資料１２】国語科領域「話す・聞く」の得点率

| 平成２９年度 | | １年 | ２年 | ３年 | ４年 | ５年 | ６年 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 読む | 本校 | 65.8 | 63.3 | 57.7 | 61.1 | 65.9 | 51.8 |
| | 全国 | 69.4 | 61.5 | 55.9 | 63.6 | 59.9 | 60.4 |
| | 差 | -3.6 | 1.8 | 1.8 | -2.5 | 6.0 | -8.6 |
| | 前年検査時 | | -1.6 | -5.3 | 7.8 | -7.6 | -0.8 |
| | 前年との差 | | 3.4 | 7.1 | -10.3 | 13.6 | -7.8 |

【資料１３】国語科領域「読む」の得点率

○　課題となっていた「読むこと」の領域では、６学年中３学年が全国平均を上回った。【資料１３】全国平均を下回った学年もあるが、全体的にはやや改善できたと考えられる。出力場面３でのペアや小グループでの交流によって、読みを確かにしたり深めたりできた成果だと考える。

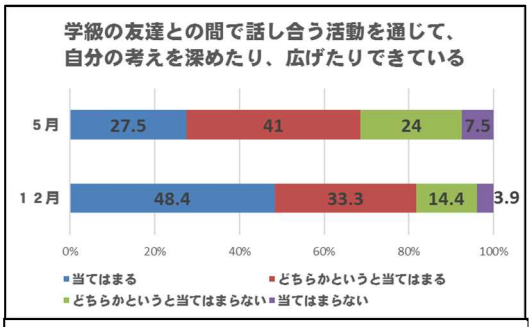
| 平成２９年度 | | １年 | ２年 | ３年 | ４年 | ５年 | ６年 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 図形 | 本校 | 65.9 | 65.8 | 76.1 | 78.1 | 80.6 | 75.1 |
| | 全国 | 71.7 | 66.3 | 75.6 | 66.8 | 73.3 | 79.1 |
| | 差 | -5.8 | -0.5 | 0.5 | 11.3 | 7.3 | -4.0 |
| | 前年検査時 | | -3.3 | -5.3 | 5.8 | -10.6 | -13.0 |
| | 前年との差 | | 2.8 | 5.8 | 5.5 | 17.9 | 9.0 |

【資料１４】算数科領域「図形」の得点率

○　算数科では、課題となっていた「図形」の領域において、全学年で前年より全国との差が上昇した。【資料１４】ＩＣＴ機器や具体物を用いたり、ワークシートを工夫したりすることにより、児童は課題を視覚的に捉えるとともに、自分の思考を表現することができ、その結果、図形への概念が育成されたと思われる。

（２）児童意識調査より【資料１５】

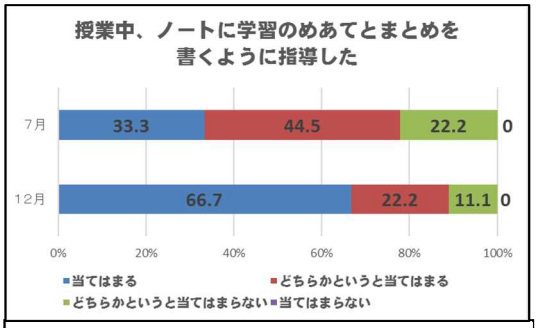
○　５月と１２月の児童意識調査を比較すると、「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりできている」と答えた児童が８割を超え、学び合いを通して思考の深めることができたことが分かった。課題としていた「学校の授業などで、自分の考えを他人に説明したり、文章に書いたりすること」にも改善が見られた。




【資料１５】児童意識調査

（３）教師意識調査より【資料１６】

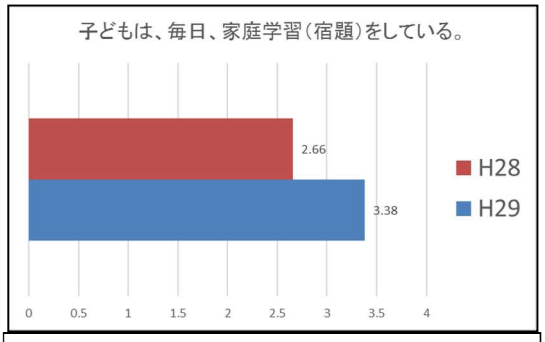
○　７月と１２月の教師意識調査を比較すると、「授業中、ノートに学習のめあてとまとめを書くように指導した」と答えた教師は８割を超えていた。教師が学びのスタンダードの定着に向けて、児童に学習規律を意識させ、継続的に指導に取り組んでいることが分かった。




【資料１６】教師意識調査

（４）保護者意識調査より【資料１７】

○　平成２８年度と平成２９年度の保護者意識調査を比較すると、「家庭学習をしている」と感じている保護者が増えた。家庭学習の手引き等やチェ




【資料１７】保護者意識調査（４段階評価平均値）

ック表、自主学習の進め方などに、家庭も連携し取り組んだことが分かった。

（５）授業における児童の変容より

○　四つの出力場面を設定し、継続的に同じ形式で学習を進めた結果、一連の学習の取り組み方を身に付けた児童が多くみられた。授業時間の終わりになると、児童から「もう、振り返り、書いていいですか」という声も聞かれるようになった。

○　導入における学習内容の確認出力場面１やワークシートの工夫により、出力場面２で個の考えを表現することができる児童が多くなった。

【資料１８】　話し合って求積する様子

○　出力場面３の小グループで話し合うときに、自分の考えを確かめたり、友達の考えと比べたりしながら、考えを１つに焦点化することができるようになったグループが増えてきた。【資料１８】また、話し合いで積極的に意見を言ったり、活発に交流を行ったりする児童も増えており、学び合いを楽しみにしている姿もみられるようになった。

| 平成２９年度 | | １年 | ２年 | ３年 | ４年 | ５年 | ６年 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 書く | 本校 | 83.8 | 73.3 | 62.3 | 66.7 | 56.4 | 73.2 |
| | 全国 | 86.5 | 74.0 | 59.4 | 67.0 | 58.9 | 75.9 |
| | 差 | -2.7 | -0.7 | 2.9 | -0.3 | -2.5 | -2.7 |
| | 前年検査時 | | 2.9 | -3.0 | 10.4 | -5.4 | -1.6 |
| | 前年との差 | | -3.6 | 5.9 | -10.7 | 2.9 | -1.1 |

【資料１９】国語科領域「書く」の得点率

## ４．今後の課題

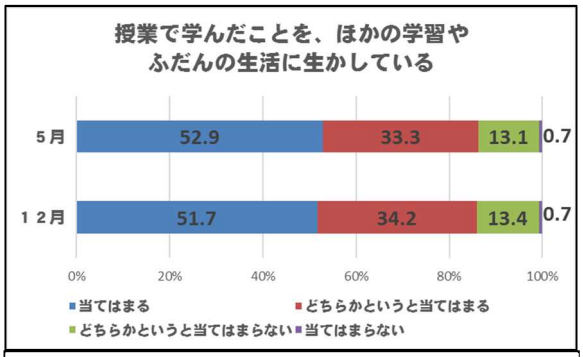
○　国語科の「書く」の領域では、６学年中５学年が全国平均を下回った。【資料１９】問題を読み取る読解力をつけるとともに、出力場面２を強化し、文章構成力、言語で書き表す力、語彙力をつける取り組みをしていく。

○　算数科の「数と計算」「数量関係」の領域などの積み上げが必要な領域は、多くの学年で全国よりも低い得点率となり、すぐに成果としては表れなかった。【資料２０】低学年からの継続的な指導をしていく。

| 平成２９年度 | | １年 | ２年 | ３年 | ４年 | ５年 | ６年 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 数と計算 | 本校 | 78.2 | 83.0 | 78.0 | 75.9 | 64.2 | 61.1 |
| | 全国 | 83.3 | 85.3 | 79.8 | 72.2 | 65.8 | 66.6 |
| | 差 | -5.1 | -2.3 | -1.8 | 3.7 | -1.6 | -5.5 |
| | 前年検査時 | | -1.7 | -1.5 | 12.2 | -3.9 | -6.2 |
| | 前年との差 | | -0.6 | -0.3 | -8.5 | 2.3 | 0.7 |
| 数量関係 | 本校 | 75.3 | 70.1 | | 70.7 | 73.3 | 64.3 |
| | 全国 | 78.2 | 79.8 | | 66.0 | 75.1 | 67.7 |
| | 差 | -2.9 | -9.7 | | 4.7 | -1.8 | -3.4 |
| | 前年検査時 | | -4.6 | | 12.9 | -1.4 | 0.5 |
| | 前年との差 | | -5.1 | | -8.2 | -0.4 | -3.9 |

【資料２０】算数科領域「数と計算」「数量関係」の得点率

○　１２月の児童意識調査では、授業で振り返りをしていると答えた児童は８割を超えるものの、「授業で学んだことを、ほかの学習や生活に生かしている」と答えた児童は５月の数値からほぼ横ばいで、「当てはまる」と答えた児童に関してはわずかに減少していた。【資料２１】このことから、児童の振り返りを充分に生かすことができなかったことが課題と考えられる。振り返りの内容を精選したり、自主学習や次時の学習へとつなげたりするなどの振り返り活動を生かすための手だてを工夫していく。




【資料２１】児童意識調査

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成２９年度委託事業完了報告書

【協力校】

| 都道府県名 | 愛知県 | 番号 | ２３ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 愛知県稲沢市立祖父江中学校 |
|---|---|

## ○　協力校として実施した取組内容

### １．当初の課題

本校の生徒は、学習に対する関心や意欲が低く、学力の低下が深刻な状況である。平成２９年度の４月に実施した全国学力・学習状況調査では、国語ＡＢ・数学ＡＢすべてにおいて全国平均を下回っており、長文の問題や思考力を問う問題での無回答率が大変高かった。また、生徒の意識調査からは「授業がよくわかる」とあまり感じていない様子が浮かび上がった。これは、授業の導入での工夫が足りないことや終盤における「まとめ」「振り返り」の活動が徹底できていないことが一因であると考える。さらに、「自分の考えや意見の発表」「話し合い活動」といった学習内容の出力に関して苦手意識があり、「学習内容の復習・活用」に関する意識が低いことも明らかになった。これらの実態を踏まえ、「確かな学力の定着と向上」を目指し、「主体的・対話的で深い学び」につながる手だてを講じていくことにした。

### ２．協力校としての取組状況

（１）学びのスタンダードの確立

学習規律や話し合い活動を全教員で共通理解し、生徒に浸透させるために、学習に関する掲示物を、特別教室を含めた全教室で統一化した。（資料１）

取組としては、はじめに学習規律の掲示を一斉に行った。すると、学習規律に関する教師の指導が統一された。それにより、今では学習規律に関する指導をしなくても、生徒が落ち着いて学習に向かう姿勢が見られるようになった。しかし、生徒の話し合いや発表の様子を見ると、自分の思いを一方的に述べるだけで、聞き手の反応や話し手の意図を汲み取ろうとする意識が低く、話し合い活動による考えの深まりや広がりがあまり見られな

○　学習規律「祖中三箇条」

・　返事　　姿勢　　発表

まず返事　正しい姿勢で　しっかり発表

○　話し合い活動の約束「話し方聞き方のあいうえお・かきくけこ」

| 聞き方のあいうえお | 話し方のかきくけこ |
|---|---|
| あ：相手を見て | か：顔を見ながら |
| い：いい姿勢で | き：気持ちを込めて |
| う：うなずきながら | く：口を開いて |
| え：笑顔で | け：敬語を使って |
| お：終わりまで | こ：声を大きく |

資料１　学習規律・話し合い活動の統一化

かった。そこで、「話し方、聞き方のあいうえお・かきくけこ」を全教室に掲示したところ、次第に、話し手を見てしっかり聞く姿や身振り手振りや指差しをしながら説明する姿が見られるようになり、発表の技能が向上してきた。（資料２）

資料２　学習に関する掲示物が掲示されている教室風景

## （２）授業改善と評価活動の工夫

### ①　授業の流れの明確化

授業の流れの明確化を図り、それを視覚化して提示することによって、生徒が把握しやすくなり学習がスタンダード化する。そこで、ユニバーサルデザインを取り入れた板書づくりとして、全教科共通の「めあて・まとめカード」を用いることにした。それにより、まず劇的に変化したのは教師の意識である。どの教室にも「めあて・まとめカード」を設置しておくことにより、使用することが教師にとって当たり前のようになり、次第に、どのような学習課題を設定すると生徒が興味や関心を示し、追究しようとする意識が高まるのかという、教師自身の追究へとつながった。生徒にとっても、毎時間「めあて」や「まとめ」が提示されることで、学習課題の把握やまとめ、振り返り活動が定着し、学びを実感できるようになった。（資料３）

資料３　全教科共通で「めあて・まとめカード」を用いた板書

### ②　学習意欲の向上

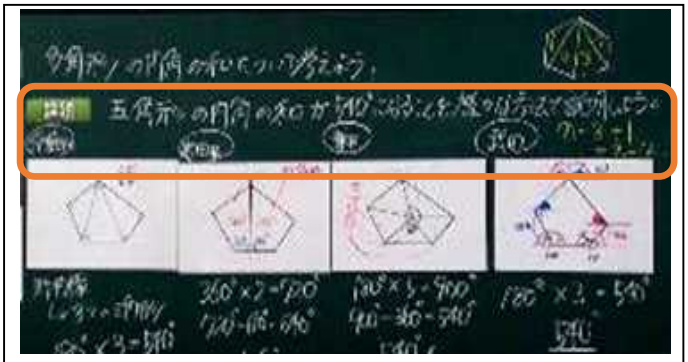
生徒が「追究したい」と思うような授業になるかどうかは、導入の３分から５分で決まる。それが、学習意欲につながる。生徒が自ら学習課題を見いだし、見通しをもって学習活動を行えるような授業づくりには、導入の工夫や毎授業のはじめに興味や関心をもたせられるような教材の提示や発問をすることが必要である。

以下に具体的な手だてを示す。

| |
|---|
| ○　学習意欲を高める活動の場の設定 |
| ○　学習の見通しをもたせやすくする工夫（教材提示・発問・学習課題の設定など） |

【取組例】２年数学「多角形の性質」

毎授業において、前時の学習内容を生かして本時の学習課題を設定した。そうすることで、生徒一人一人が学習内容を把握しやすくなり、見通しをもって課題解決をしようとすることができた。（資料４）また、学習課題の一文も、生徒の発言をもとに作成することで、学習意欲や探求心を持続させることができた。



資料４　前時の学習の振り返りの場「学び直し」

③　四つの出力の場の設定

一授業の中で、以下の四つの出力の場を設定した。

| |
|---|
| ○　導入　：既習事項の確認　《前時の学習の振り返りの場（学び直し）を設定》 |
| ○　展開１：自分の考えをもつ《話し合い活動の前に自分の考えをもつ場を設定》 |
| ○　展開２：話し合い活動で自分の考えを広げ、深める《交流活動の場を設定・工夫》 |
| ○　まとめ：学習内容の定着　《振り返りの場を設定》 |

【導入での取組例】２年数学「多角形の性質」

毎授業において、「学び直し」と称する前時の振り返り活動を行った。多角形の性質を学習する上で必要となる学習内容を毎授業確認することで、基礎・基本を定着させることができ、学習意欲も高まった。（資料５）

資料５　前時の学習の振り返りの場「学び直し」

【自分の考えをもつ取組例】１年美術科「文字のデザイン」

はじめにワークシートを用いて、個々に「米・酒・魚」の三つの漢字をデザインした。（資料６）その後、グループで自分のデザインを見せ合った。互いのよいところを称賛し合い、改善点を助言し合うことで、自分のデザインに自信がもてたり、具体的な改善点が見つかり修正したりする様子が見られた。（資料７）

資料６　自分の考えをもつ様子

資料７　自分のデザインを元に話し合う様子

【交流活動の取組例】２年英語科「接続詞 because の用法」

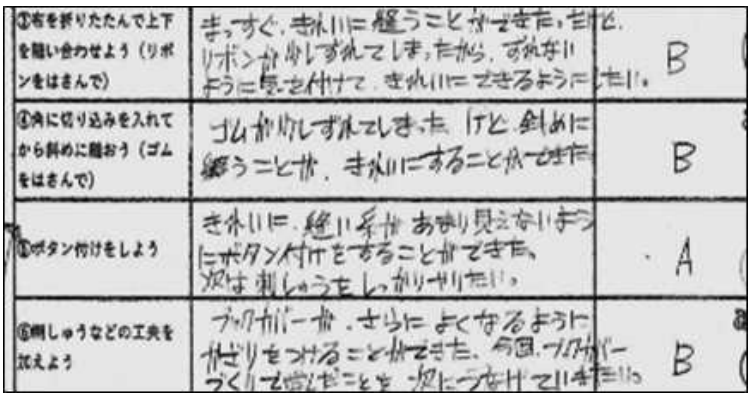
学習課題を追究する段階において、自分の考えをしっかりともたせてから、他と交流させることで、自分の考えを深めたり広げたりすることができる。

because の用法を個々にワークシートで学習させたのち、ペア学習で正しく書き表せているかを確認させた。間違いを指摘するだけでなく、どう正せばよいかを助言し合うことで、ほとんどの生徒が用法を理解することができた。その後、交流活動として、ペアを入れ替えながら会話練習をするコミュニケーション活動「回転ずしスピーキング」を行った。この活動を取り入れることで、because を用いた基本文が定着するだけでなく、自信をもって話すことができるようになった。（資料８）

資料８　交流活動「回転ずしスピーキング」の様子

【まとめの取組例】２年家庭科「衣生活と住生活（ブックカバー作り）」

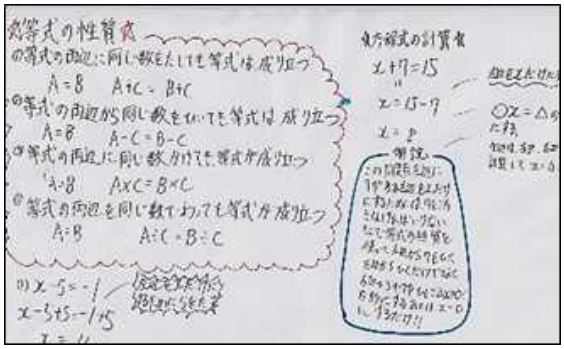
毎授業のまとめの段階で、学習したことをペアで話し合わせてから、振り返りカードを用いて学習したことや次時の課題、生活への活用などを記述させ、発表させたり紹介したりした。それにより、どうすればうまく製作できるかが共有できるだけでなく、次時の学習の見通しがもて、意欲が高まった。（資料９）



資料９　生徒の「振り返りカード」の記述

④　評価活動の工夫

学習の成果を客観的に評価し、生徒へフィードバックさせることで、基礎・基本が定着すると考えた。そこで、各学年で１、２学期末に学力コンクールを実施した。７月の取組では、学力コンクールの１、２週間ほど前から演習問題に取り組ませたり、直前にプレテストを行ったりと、教師側から良い結果や達成感が得られるような働きかけをした。しかし、生徒の様子からは意欲的に取り組もうとする姿があまり見られず、結果としても大きな変容は見られなかった。そこで、１２月の学力コンクールに向けての取組では、生徒同士で予想問題や解説プリントを作成したり、漢字を丁寧に大きく書いた掲示物を作成したりと自主性に任せた。そして教師は、生徒の「わかりたい」という思いに答えるような形で、昼の休憩時間に学習会を開いたり演習問題プリントに朱書きを入れたりするなどして関わった。すると、どの学年も学力コンクールで満点を取った生徒数が７月よりも増加した。



資料１０　学力コンクールに向けて生徒が作成した解説プリント

| | |
|---|---|
| １年 | １回目練習テストでは国語の正答率は 50.1%数学の正答率は 75.2%だったが本テストでは国語 98.9%、数学 86.2%に向上した。 |
| ２年 | 国語と数学の満点合計が、１回目は 191 人だったのが本テストでは 199 人に増加した。 |
| ３年 | １学期と比較して、国語の正答率が 86.1%から 96.0%に向上した。 |

資料１１　学力コンクールで得た成果

（３）家庭や地域との連携

本校学区内の小学校と、定期的に情報交換を行ったり授業参観や研究協議を合同で行ったりして連携を図った。連携を深める中で、板書カード「めあて・まとめカード」や話し合い活動の約束「話し方、聞き方のあいうえお・かきくけこ」が有効な手だてであることが話題となり、２学期から小中共通で用いることにした。それにより、教師の学習指導に対するモチベーションが向上したとともに、保護者にも学習指導を強化していることを伝えやすくなり、協力を得られやすくなった。

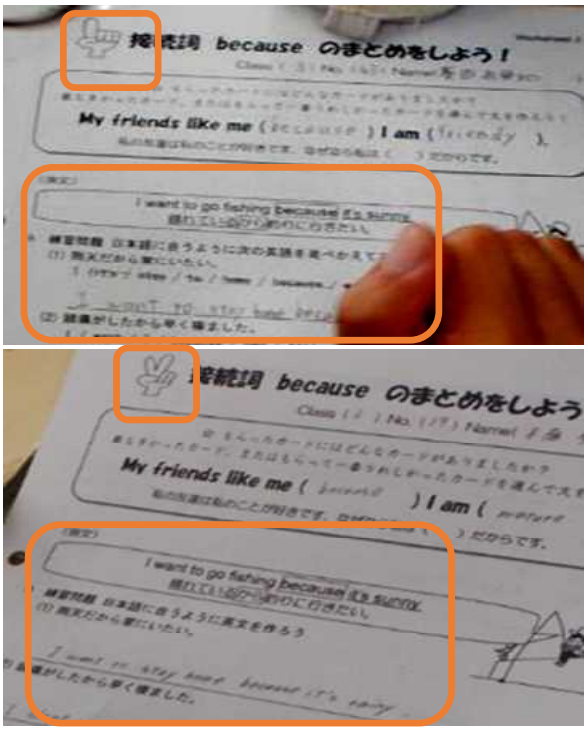
（４）その他、本校での取り組み　―習熟度別学習指導の工夫―

学習内容の定着を図るためには、生徒一人一人が自分の学力に合った問題に取り組むことが望ましい。しかし、中学生となると、取り組む問題の難易度を周囲に知られたくない心理も働く。

そこで、学習内容をまとめたり演習したりする際に、一枚のワークシートで習熟度別に取り組むことができるよう工夫した。

【取組例】２年英語科「接続詞 because の用法」

学習のまとめとして演習問題に取り組ませる際に、裏表で似た様式だが習熟度別になっているワークシートを用いた。表も裏も同じ和文を用いた問題が並んでいるため、見た目は同じように見える。しかし、表は「ベーシックコース」として、単語を並び替えて英作文を作る問題、裏は「アドバンスコース」として、自力で英作文を作る問題が提示されている。生徒たちは、自分に合った問題を選択して英作文に取り組んだり、「ベーシックコース」で練習してから再度「アドバンスコース」に取り組んだりと、自然と習熟度に合わせた学習活動を行っていた。（資料１２）



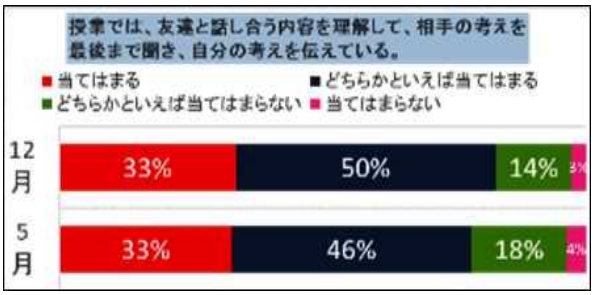

資料１２　習熟度別ワークシート

上 (表) ベーシックコース　下 (裏) アドバンスコース

## ３．取組の成果の把握・検証

### （１）生徒への学習に関する意識調査の実施（年度当初・７月・１２月）

年度当初と７月、１２月に、学習に関する意識調査をアンケート形式で行った。７月の時点では、生徒のアンケート結果から、「めあて」「まとめ」を意識して授業を展開できていなかったり、話し合い活動を取り入れられていなかったりと、授業改善に対する変容があまり見られなかった。そこで、２学期以降、板書カード「めあて・まとめカード」や話し合い活動の約束「話し方、聞き方のあいうえお・かきくけこ」の使用、話し合い活動の充実化を図ったところ、１２月のアンケート結果では、「自分の考えや意見の発表」「話し合い活動」といった学習内容の出力に関して苦手意識があった生徒が、積極的に話し合い活動に参加して、自分の考えを伝えたり相手の考えを取り入れようとしたりする姿が捉えられた。（資料１３）



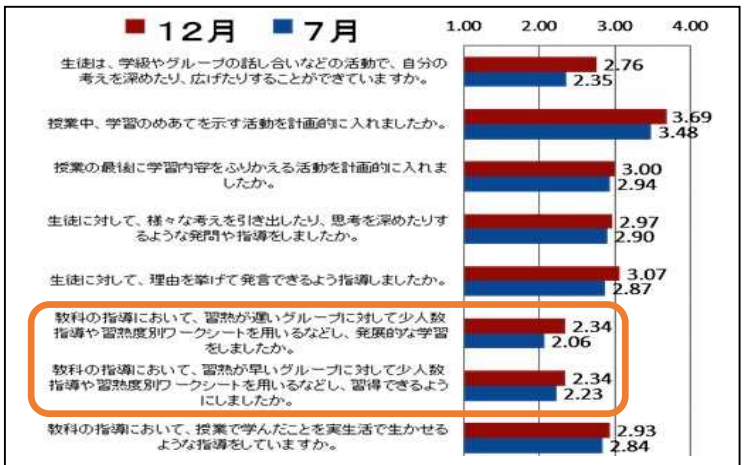

資料１３　生徒の学習に関する意識調査

授業の様子からも、「自分の考えや意見の発表」「話し合い活動」といった学習内容の出力に関して苦手意識のあった生徒が、積極的に話し合い活動に参加したり、自分の考えを伝えたり、相手の考えを取り入れようとしたりする姿が多く見られるようになった。また、まとめの段階で記述した振り返りの文章からも、学習内容に対する根拠を基にした考えや、交流するよさを実感し学習したことを今後に生かしたいという思いが見られるようになってきた。

### （２）教師への学習に関する意識調査の実施（７月・１２月）

年度当初と７月、１２月に、学習に関する意識調査をアンケート形式で行った。前述のとおり、７月の時点では、生徒のアンケート結果から、授業改善に対する変容があまり見られなかったた

め、１学期末に結果をグラフ化して全職員に提示し共通理解を図った。すると、「めあて」「まとめ」の明示、振り返りの場の設定などといった構造的な授業となるよう工夫をしている様子や、話し合いの場の設定や自らの発問などを工夫することで「深い学び」となるような授業づくりを心がけている様子がうかがえた。その一方で、まだ習熟度別ワークシートの充実は十分図られていないことが明らかになった。（資料１４）今後も、生徒が授業に主体的に取り組む姿勢を大切にしつつ、わかる授業づくりを目指してさらに授業改善を行っていく必要があるといえる。



資料１４　教師の学習に関する意識調査

（３）数研式標準学力検査（ＣＲＴ）の実施・分析

今年度の２年生の結果を昨年度の１年生と比較すると、どの教科も評定平均が上がった。これは、５段階評価の１と２の生徒数が減り、４と５の生徒数が増えたためである。これにより、学力が向上したといえる。今年度の１年生の結果については、昨年度の１年生と比較すると、どの教科も評定平均が高く、５段階評価の１と２の生徒数が少なく、４の生徒数が多かった。また、出身小学校区ごとで小学６年生の国語と算数の結果と比較すると、数学の全国比が高くなっていた。これらの結果より、１年生は中学校入学後から学力が高まっている様子が捉えられた。しかし、国語については大きな変容は見られなかった。そこで、教科観点別の結果を分析したところ、１年生、２年生ともに、国語の読む能力が全国平均を下回り、過去の結果と比較しても伸長が見られなかった。（資料１５）文章の内容を読み取る力が備わっていないと、他教科の学習にも支障をきたす。よって、今後は読む能力を高められるような指導の工夫が必要であるといえる。

H29　1年生

| 教科 | 平均得点率(%) | 全国比 | 5段階評価(人数) 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 評定平均 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国語 | 64.0 | 100 | 1 | 11 | 32 | 35 | 21 | 3.64 |
| 社会 | 65.2 | 102 | 6 | 12 | 25 | 35 | 22 | 3.55 |
| 数学 | 63.1 | 111 | 3 | 13 | 24 | 26 | 34 | 3.75 |
| 理科 | 74.2 | 109 | 2 | 6 | 23 | 38 | 31 | 3.90 |
| 英語 | 70.3 | 105 | 3 | 10 | 25 | 39 | 23 | 3.69 |

H29　2年生

| 教科 | 平均得点率(%) | 全国比 | 5段階評価(人数) 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 評定平均 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国語 | 68.7 | 105 | 1 | 8 | 30 | 37 | 24 | 3.75 |
| 社会 | 65.3 | 101 | 5 | 11 | 27 | 36 | 22 | 3.58 |
| 数学 | 69.6 | 112 | 5 | 12 | 18 | 26 | 40 | 3.83 |
| 理科 | 74.8 | 107 | 7 | 8 | 19 | 44 | 22 | 3.66 |
| 英語 | 63.9 | 105 | 3 | 16 | 22 | 30 | 28 | 3.65 |

H28　1年生

| 教科 | 平均得点率(%) | 全国比 | 5段階評価(人数) 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 評定平均 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国語 | 67.7 | 108 | 5 | 10 | 38 | 28 | 20 | 3.48 |
| 社会 | 65.5 | 107 | 10 | 14 | 27 | 29 | 20 | 3.35 |
| 数学 | 63.8 | 117 | 14 | 13 | 18 | 21 | 35 | 3.50 |
| 理科 | 76.5 | 113 | 13 | 10 | 18 | 32 | 26 | 3.48 |
| 英語 | 71.9 | 114 | 6 | 16 | 29 | 27 | 22 | 3.43 |

## ４．今後の課題

○　教師の学習に関する意識調査より、習熟度別ワークシートの充実化は十分図られていないことが明らかになった。生徒が授業に主体的に取り組む姿勢を大切にしつつ、わかる授業づくりを目指してさらに授業改善を行っていく必要がある。

○　数研式標準学力検査（ＣＲＴ）を実施および分析したところ、１、２年生ともに国語の読む能力が全国平均を下回り、過去の結果と比較しても伸長が見られなかった。今後は読む能力を高められるような指導の工夫が必要である。

**「主体的･対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小･中学校）」**

**平成２９年度委託事業完了報告書**

**【協力校】**

| 都道府県名 | 愛知県 | 番号 | ２３ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 愛知県知立市立猿渡小学校 |
|---|---|

**１．当初の課題**

（１）学力調査等から

昨年度２月に実施した標準学力検査（ＣＲＴ）の結果から分析した本校の学力的課題は

① 国語「話す聞く能力」「書く能力」が弱い。

② 算数「数学的な考え」が弱い

ということが分かった。今年度４月に実施した全国学力・学習状況調査の結果からも同様の課題が浮き彫りになった。この課題を克服していくために、今年度から主題研究において国語を中心に取り組んでいくことになった。

（２）かきつばたスタンダードの課題

知立市学校教育スタンダード「かきつばた」の「（つ）伝え合い、学び合う授業づくりを！」に関して意識して授業を組み立てていくことで、新学習指導要領が掲げている「主体的･対話的で深い学び」を意識した授業が構築できると考えている。

**２．協力校としての取組状況**

（１）教師の授業力向上に向けての取組

「知立市学校教育スタンダード　かきつばた」についての「学習指導チェックカード」を使い、自己分析し、その結果をもとに授業改善に努めている。また、教員のスキルアップのために、６月にはパルスイミングの方に水泳指導をお願いし、３年生以上の児童に指導していただいた。教員も児童への声かけやその指導方法を学び、その後の指導に生かした。また、学芸会前に劇団「うりんこ」の方に来ていただいて、児童を指導してもらいながら、その指導方法を学んだ。

【両端は指導法を学ぶ教員】

（２）学校全体での取組

「分かる」「できる」「楽しい」授業を展開していくために表現力を高め、主体性を育めるように授業改善を図っている。研究主題を「自らの考えをもち、表現する猿渡っ子の育成　～発達段階に応じた言語活動の工夫を通して～」とし、まじめに学び、主体的に活動する猿渡っ子の育成に向け、「自分の考えをもち、表現力を高め、

【自作の物語を読み聞かせる子供】

学び合う子」をめざす子供像とし、国語を中心として研究に取り組んだ。次期学習指導要領を見据えた「主体的・対話的で深い学び」について言語活動の工夫を通して研究に取り組んでいる。

本年度より愛知教育大学教職大学院教授の佐藤洋一先生の指導を受け、授業研究に取り組んできた。今年度は研究授業を７回行い、全ての授業で佐藤先生から助言をいただきながら研究に取り組んだ。また、２度示範授業をしていただき、教材に対する考え方や授業方法を学んだ。

【佐藤先生による示範授業】

（３）家庭への働きかけ

今年度も夏休み前と冬休み前に個人懇談会を行い、国語、算数の状況を中心に保護者に伝え、休み中に克服すべき課題について保護者と話し合った。今後も児童たちが充実した学校生活が送れるように働きかけていく。

**３．取組の成果の把握･検証**

昨年度から、表現活動を中心に実践を行ってきた。その結果、授業中発言できる児童は一生懸命考え、楽しそうに授業に参加し、授業を通して自己充実感を得ることができ、自己肯定感につながった。しかし、ただ聞いているだけで発言しない児童もいるので、どの児童も参加できるための支援方法等の工夫が今年度の課題となった。

【生き物クイズ大会の様子】

本年度は、国語を中心として授業実践に取り組み、そこで得たことを他の教科でも活用した。そこで、本年度の取組の成果を最後の授業研究である１年国語「育てるべき資質・能力を明確にした“生き物クイズ大会!!”～対話的学習で、主体性・深い学びを作る～」の実践で検証する。

この実践は、児童にとって興味、関心の強いクイズを出し合うことを中心に、活動を展開し、授業を通して相手の話をよく聞いて、話題に沿って質問したり答えたりして、交互に話すという対話の基礎を身に付けさせることをねらいとした。児童たちには、相手の話をしっかりと聞いたり、内容が正しく伝わるように話したりすることで、楽しみながら表現力を身に付けていった。「もっとたくさん答えていきたいです」とか「相手の子がしっかりと目を見て聞いてくれたので話しやすかったです」と、児童たちは感想に書いていた。少しずつではあるが着実に成果をあげてきている。

**４．今後の課題**

「自らの考えをもち、表現する猿渡っ子の育成」をめざした全ての授業実践において多くの児童が一生懸命考え、楽しそうに授業に参加することができていた。このような実践を積み重ねていくことで、児童たちは自己充実感を得ることができ、自己肯定感につながっていく。どの児童も意欲的に参加できるように、今後も支援方法等の工夫も含めて考えていかなければならない。

（様式３）

# 「主体的･対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小･中学校）」

## 平成２９年度委託事業完了報告書

## 【協力校】

| 都道府県名 | 愛知県 | 番号 | ２３ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 愛知県知立市立知立小学校 |
|---|---|

### １．当初の課題

（１）学力調査等から

H28 年度は国語の書くこと・読むことにおいて、また算数は記述式の問題で無回答が増えるという課題があった。そのため、自分の考えを明確にするために書き、さらにその考えを伝え合って、学び合う授業づくりが求められた。また、４月に行われた全国学力・学習状況調査によると、国語Ｂについて、自分の考えを広げたり深めたりするための発言の意図を捉える問題が全国・県の平均よりも大きく下回った。そのため、取り上げた叙述をどのように解釈しているか紹介し合い、自分の考えを深めていく授業に取り組む必要が指摘された。

（２）かきつばたスタンダードの課題

H28 年度は協働的な学習を意識して、特に班の中で学び合う実践が行われたが、学級全体で広く学び合うには不十分であった。かきつばたの「つ」、「伝え合い、学び合う授業づくり」を実現するために、話すこと、聞くことのルール作りを再検討し、話し合いが真摯な「聞き合い」の学びになることを目指して更なる実践の必要があると考えた。

### ２．協力校としての取組状況

（１）教師の授業力向上に向けての取組

８月 22 日（火）に愛知淑徳大学講師の前田勝洋先生を講師としてお招きし、授業づくり研修会を行った。そして、最低限取り組むべき約束事を確認した（あいさつによる学習規律の確立・導入発問の工夫・学習課題の提示・定型話法の確立・黙って挙手・チョークは３色（赤・白・黄）を使って簡潔に・ベルタイマーの活用・ハンドサインの活用）。

また、９月 22 日（金）と 11 月６日（月）には主題全体会の後、協議会にて前田先生よりご指導をいただいた。そして、さらに取り組むべき多くの知見を得ることができた。

（２）学校全体での取組

研究主題は「主体的に考え，学び合う子をめざして～子どもが生き生きと学習する授業づくり～」と題し、児童のコミュニケーション能力を高める「話す・聞くスキルの獲得」や「問題解決を意識した単元構想の作成」などに取り組んだ。そのために研究の組織を「授業部会」「授業環境部会」「学習スキル部会」「学級づくり部会」の４部会を設定し、全教員の参加体制を作って取り組ん

【おあさごタイムでの話し合い】

でいる。

また、火曜日朝の帯時間を「おあさごタイム」とし、エンカウンターの一手法「アドジャントーク」によるグループでの話し合いを継続的に行った。

さらに、全ての教員が一人一実践公開授業を行い、学び合う機会を設けた。

（３）家庭への働きかけ

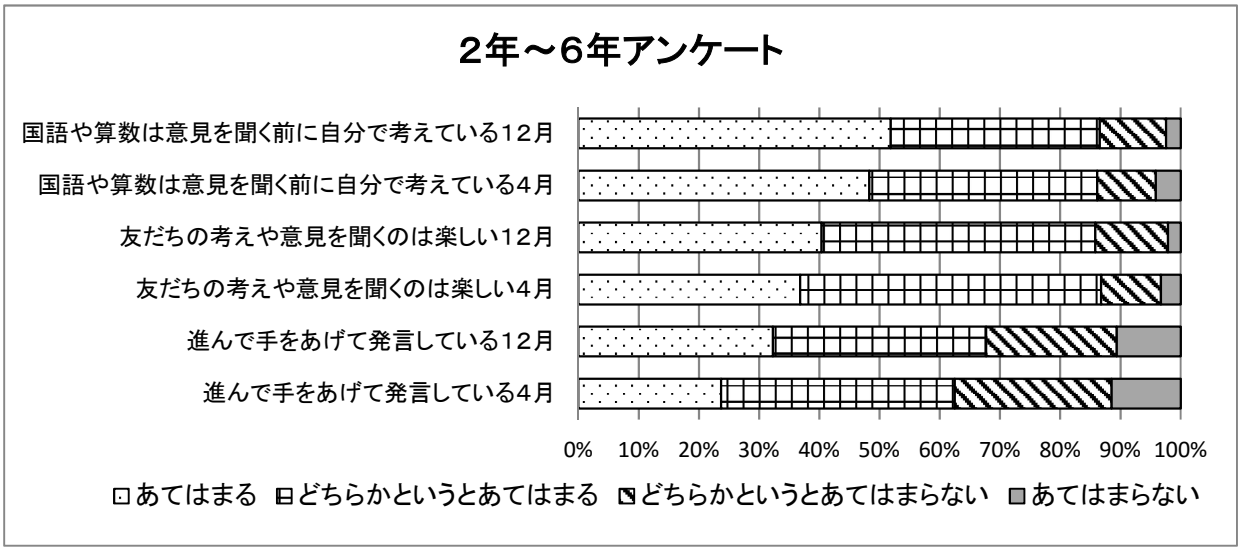
７月と 12 月の個人懇談会前に国語・算数の自作テスト（「振り返りテスト」）を行い、個人懇談会では、学習の状況を伝え、長期休業での家庭学習の指針を示すことができるようにしている。そして、家庭学習をより充実させてもらうようお願いしている。

**３．取組の成果の把握･検証**

【ハンドサインで関連した意見を言おうとする児童】

11 月６日（月）に行った３年国語「サーカスのライオン」の授業では、叙述を基にして、個々がどのように読み取り、どのような考えをもったかを聞き合って、深め合う授業を行った。児童が発言する際には、全校で統一したハンドサインが多用され、多くの児童が友達の意見と関連した発言を行うことができた。授業後の協議会では、板書のあり方や音読の重要性が確認された。また、逐語記録から発言内容を分析し、友達の発言を少しずつ言い換えて発言する児童の意図を把握して展開する教師の適切な出方はどのようなものであるかが再確認された。そして、児童の発言と教師の出場をおよその比で表したところ、４：１となり、多くの児童が主体的に発言することができたと考える。

２年から６年までを対象とした４月と 12 月のアンケート結果によると、意見を言う前に自分の考えをまとめて書こうとしたり、進んで手を挙げようとしたりする児童が増えた。




**４．今後の課題**

本年度は「伝え合う」ことを重視して研究を行った。そして、考えを書いてまとめて、その意見を伝えることができる児童が増えたが、具体的にどのような学力が向上したのかどうかは更なる分析が必要である。また、教師間での授業スキルには依然として差があり、校内研修を通して、教師同士が学び合う場の設定が必要と思われる。その際の研修方法のあり方を考えていかねばならない。

**「主体的･対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小･中学校）」**

**平成２９年度委託事業完了報告書**

**【協力校】**

| 都道府県名 | 愛知県 | 番号 | ２３ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 愛知県知立市立知立西小学校 |
|---|---|

**１．当初の課題**

（１）学力調査等から

平成 28 年度全国学力学習状況調査の結果、本校の児童の課題が見えてきた。国語・算数ともに概ね全国平均を超えている。国語科では、新聞をよく読み、読書が好きであるという面が伸びてきた一方で、話の内容を精選してまとめるといった「話す・聞く」力に課題が見られた。また、資料を読み取り、適切な使い方を考える問題では、弱さが感じられた。算数科では、積極的に問題の解法を考えられる児童が多くいるが、記述式の問題にあまり意欲的に取り組めない実態が明らかになった。また、学校評価アンケートでは、授業を楽しいと感じる児童が増えている一方で「授業中発言をしている」と答えた児童がやや減少した。これは、自分の考えに自信がもてず、積極的に自分の思いや考えを表現できない児童が多くいるということを感じる。

（２）かきつばたスタンダードの課題

これらの実態から、本校の特に重要な課題は、他者との関わり合いを通して、他者の思いや考えを受け止め、自分の思いや考えに自信をもち、積極的に表現できる子の育成であると考えた。かきつばたスタンダードの$\boxed{つ}$の部分を重点的に取り組むことにした。

【自分の考えを伝え合うペアトーク】

**２．協力校としての取組状況**

（１）教師の授業力向上に向けての取組

児童が主体的・対話的で深い学びを行うためには、自分の思いや考えを表現し、伝え合うことが重要であると考えた。児童同士の関わり合いを計画的に授業の中に取り込むために、ペアトークやグループトークの効果的な設定の仕方やその目的について協議を重ねた。

【コア図の作成研修】

さらに、児童と教師の関わり合いを構想するにために、愛知教育大学の志水廣名誉教授のご指導のもと、コア図の作成に全担任が取り組んだ。これは、児童の発言を予想し、その話し合いがねらいに迫ることができるよう、発言同士の関わり方を図で示したものである。コア図の作成により、どの発言がめざしているゴールに近づけるキーワードになるのか、イメージをもって授業に臨むことができた。

（２）学校全体での取組

児童の表現する力の基礎とするため、フリートーク、書けマス作文、ハンドサイン・話型の提示などに全校で取り組んだ。フリートークは、自分の思いを聞いてもらうだけでなく、友達の思いや考えを聞いて受け止めることができるように、毎週水曜日に全校で一斉に行った。全員が発言できたことを喜ぶクラスや、他のクラスのフリートークを参観してよいところを自分たちのフリートークに取り入れていくクラスなどがあった。

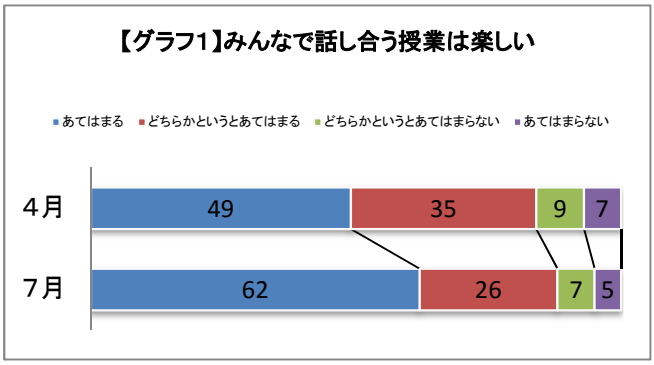
【スキルアップの成果　発言者の顔を見て聞く】

（３）家庭への働きかけ

毎月の学年だよりでは「今月のＹＯＵ＆Ｉコーナー」を設け、児童が思いや考えを伝え合う様子を家庭に知らせ続けた。

## ３．取組の成果の把握･検証

「表から気付いたことをペアで話すとき、〇〇さんが同じことに気付いていたので、自信をもって手を挙げることができました。」これは、６年生が書いた授業の振り返りである。ペアトークを取り入れることによって、この児童が自分の考えに自信をもち、発言することができたことを示している。ペアトーク・グループトークを取り入れる目的は、場面により様々であるが、児童に自信をもたせたり考えを広げさせたりすることに有効であった。




グラフは、４月と７月に児童に行ったアンケートの結果である。関わり合いを意識した授業を繰り返した結果、本校児童の 62%が「みんなで話し合う授業は楽しい」と答え、４月よりも 13%増えている。人と関わることが楽しい、自分の思いを伝えることが大切だ、と感じている児童が増えている。

## ４．今後の課題

フリートークの時間を楽しみにしている児童も多い。初めのうちは、発言をためらう児童も多くいたが、毎週水曜日に定期的に取り組むことによって、児童の抵抗感は減っていき、意見を言うのも聞くのも楽しいと答える児童が増えた。しかし、フリートークは楽しめる児童も、授業の中では発言を躊躇している様子がまだうかがえる。また、書けマス作文にも継続して取り組んだところ、短い時間でも作文用紙に自分の思いや考えを書けるようになった。そのことを児童も実感している。一方で、その授業を振り返り、学んだ内容をまとめる「振り返り」は得意だとアンケートに答えた児童が 74%と少なく感じる。話す・聞く・書くというスキルは継続的な取組によって向上してきたと言える。それが、授業に役に立ち、自分の学ぶ力となっているということが児童の実感となるまで、引き続き取り組んでいきたい。

**「主体的･対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小･中学校）」**

**平成２９年度委託事業完了報告書**

**【協力校】**

| 都道府県名 | 愛知県 | 番号 | ２３ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 愛知県知立市立知立中学校 |
|---|---|

**１．当初の課題**

（１）学力調査等から

全国学力・学習状況調査、４月実施の NRT の結果を見ると、国語、数学ともに概ね良好である。しかし、国語では「読むこと」のポイントが低く、複数の資料から情報を得て自分なりの考察をすることや、文章を要約することがやや苦手である。そこで「読むこと」とともに、根拠を明確にして自分の考えを書く指導に重点をおきたい。数学では、式の意味するところを理解したり、グラフや表から事象をつかみ取ったりすることが苦手である。読解力の向上に重点をおきたい。このことは、他教科にも同様な傾向が見られ、説明文の読解力が向上すれば更に正答率は上がると思われる。

また、生徒質問紙からは、家庭学習の時間が少なく、ＴＶやゲームに費やす時間が多い傾向があることや、自己有用感があまり高くないことがうかがわれた。

（２）かきつばたスタンダードの課題

「話す」と「伝え合い」については、これまでも習得を意識した取組を行ってきており、ある程度話すスキルが身に付き、自分の思いや考えを発表できる生徒が多いように感じられる。

しかし、生徒の話し合いの様子を見ていると、自分の意見の発表に夢中で、人の意見を聞き、思いや気持ちを考えたり、自分の意見を振り返ったりすることはあまりできてはいない。そこで、「聞く」学習スキルの習得を本年度も課題として取り組む。

**２．協力校としての取組状況**

（１）教師の授業力向上に向けての取組

ア　知立市学校教育スタンダード「か・き・つ・ば・た」を意識し、授業の見直しを行う

①お互いの授業を見合う

保護者が自由に授業を参観できる学校公開週間（年２回　６月・２月）を活用して、教員同士の授業参観を行った。参観後は、よかった点や改善点等を伝えるようにした。客観的な意見を受け、普段の授業を見直すことにつながった。また、経験の少ない先生は、先輩教員の授業の進め方や、生徒に対する指示の仕方等を学ぶ機会になった。

②教科部会の活用

指導案を作成する場合に、教科部会にて同じ教科の先生の意見を取り入れながら進めた。授業者の授業内容の向上につながっただけでなく、一緒に考えていくことで、その教科で身に付けさせたい力や、授業においての取り組ませ方を共通認識することにもつながった。

イ　講師をお招きし、授業力向上についてご助言いただく

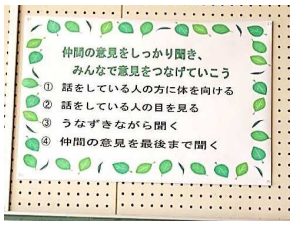
愛知淑徳大学講師前田勝洋先生をお招きし、「生徒のやる気と自覚を育てる－学級づくり・授業づくりをどう実践するか－」というテーマで講話をいただいた。授業を作るのは教師であることと、私たち教師が気を付けておきたい点について教えていただいた。子供がやる気になる教室づくりの重要性を教えていただき、学級づくり・授業づくりの具体的な手だてを示していただいた。

【前田先生による指導】

（２）学校全体での取組

・「聞く」ことに関するルールなどを共通で取り組むために各教室に掲示をして視覚化を行った。

・指導案には、本単元でどのように「聞く」を展開し、子供たちを生かすかを、「子供の声を大切にする授業」として記述し、本時の展開には「◎子供の声を大切にする手だて」を設け、子供の声を大切にするための手だてを記述した。




【教室掲示　聞くとき】

（３）家庭への働きかけ

・三者懇談会や家庭訪問、保護者会などの保護者と直接話せる機会においては、様子を聞いたり、その生徒にあった具体的な取り組ませ方を伝えたりした。

・学年便りや学級通信などの家庭向けの便りに頑張っている生徒の様子を伝えた。

・テスト週間中や長期休業中には学習会を開催して、学習支援に取り組んだ。

## ３．取組の成果の把握・検証

【学習指導評価シート結果（教員）】

| | | A | B | C | D |
|---|---|---|---|---|---|
| か | 7 月 | 8.3 | 46.3 | 41.5 | 3.9 |
| | 12 月 | 13.7 | 62.9 | 34.1 | 0.0 |
| き | 7 月 | 13.4 | 51.2 | 33.5 | 1.8 |
| | 12 月 | 16.5 | 59.1 | 22.0 | 2.4 |
| つ | 7 月 | 4.9 | 44.9 | 46.8 | 3.4 |
| | 12 月 | 7.3 | 64.9 | 27.3 | 0.5 |
| ば | 7 月 | 4.4 | 32.2 | 51.2 | 12.2 |
| | 12 月 | 5.4 | 45.9 | 41.5 | 7.3 |
| た | 7 月 | 7.3 | 50.7 | 40.0 | 2.0 |
| | 12 月 | 9.3 | 67.8 | 22.0 | 1.0 |

A よくできている　　B できている　　(%)
C あまりできていない　D できていない
「か」～「た」の各項目では 4 つの質問をしている
表は 4 つの質問の合計であらわしている

7 月から 12 月の結果を比較すると、すべての項目において結果が向上している。その中でも「き」の中の「聞くスキルの習得の取組」では、Ｃ＋Ｄの割合が 45.4%から 26.9%と大きな変化が見られた。これは全校体制で取り組んだ結果だと感じられる。また、同様の質問でＡの割合が下がったのは、進めていく中でよりよいものをと考えていったからだと思われる。生徒アンケートの「なるほどと感じながら聞くことができる」の項目では着実に数値の向上が見られた。教員の取組が生徒に伝わっていると言える。それとともに「勉強をすることが楽しい」「分からないことが聞ける」の全体的な結果も向上し、相乗効果を感じられた。

## ４．今後の課題

「宿題以外に自分で考えてやっている」の 割合が他の質問項目に比較すると低かったり、教員側も板書をはじめ「できていない」と感じたりしている部分も多くある。今できていることを伸ばすことと、不足している部分を今後も全校体制で取り組んでいきたい。

**「主体的･対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小･中学校）」**

**平成２９年度委託事業完了報告書**

**【協力校】**

| 都道府県名 | 愛知県 | 番号 | ２３ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 愛知県知立市立知立東小学校 |
|---|---|

**１．当初の課題**

（１）学力調査等から

平成 29 年２月に実施した標準学力検査（ＣＲＴ）の結果は、どの学年も国語･算数ともにすべての領域において得点率が全国平均に及ばなかった。平成 29 年４月に実施した全国学力・学習状況調査でも、国語ＡＢ、算数ＡＢともに正答率が全国平均や県平均に届いていない。本校は、「題意が分からないので問題を見ただけであきらめてしまう」「何度か読み返さないと内容が理解できない」という外国人児童の数が全校の６割を占めている。学力の土台となる日本語指導がいかに大切であるかを知るため、日本人児童だけを取り出して正答率を集計してみた。結果の一部を以下に示す。

【国語Ａ】について

○ 本校学年全体（48 名）の正答率　…　全国平均よりかなり低い

○ 本校日本人児童（18 名）の正答率　…　全国平均より少し高い

日本人児童だけの正答率は、学年全体よりも 35%高いという結果が出た。外国人児童の不足している語彙を補うための手だてを根気強く続けるとともに、国語・算数における少人数指導をさらに充実させていく必要がある。

（２）かきつばたスタンダードの課題

知立市学校教育スタンダードとして取り組んでいる授業の基礎・基本「かきつばた」について本校の実態は以下のようである。

・課題（めあて）を明確にして見通しをもった授業を展開している。か

・「聞く」「話す」「書く」のスキルを習得させることが難しい。き

・考えを深めていく主体的な授業づくりが難しい。つ

・板書計画を立案して授業に臨んでいる。ば

・だれもが分かる授業を工夫して実践している。た

このような実態から、教師一人一人がさらに授業力を向上させて「考えを深めていく主体的な授業づくり」を進めるとともに、「聞く」のスキルを習得させるため、「なになに金曜日」として毎週金曜日にコミュニケーション活動の実施を継続する。

**２．協力校としての取組状況**

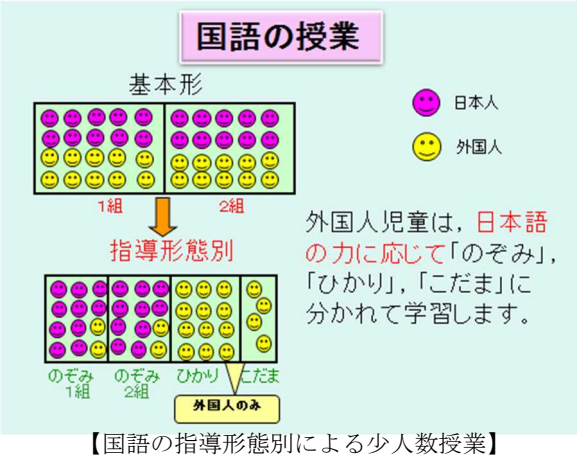
（１）教師の授業力向上に向けての取組

主体的な授業づくりとは「伝え合い、学び合う授業」をつくっていくことである。教師一人一人が授業力を向上させてキャリア教育を推進することが、主体的な授業づくりにつながると考える。そこで、「自分に自信をもって前を向いて生きていく子」をめざしてキャリア能力を育む授業を実践した。研究にあたっては、愛知教育大学の真島聖子准教授にご指導をいただきながら進

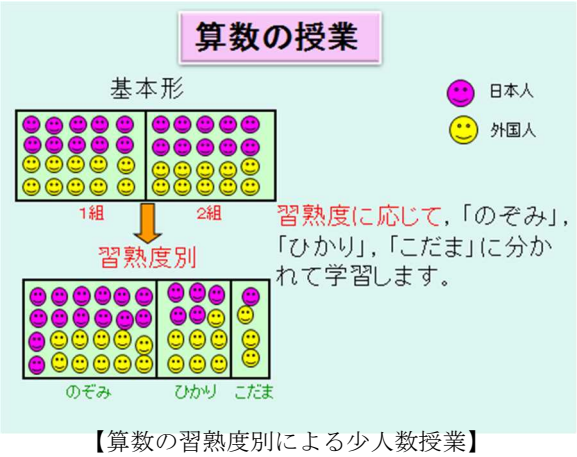
めてきた。８月 21 日にはキャリア教育についての現職教育を行い、12 月４日には研究授業全体会を設けて、全職員が指導助言をいただく機会とした。

（２）学校全体での取組

日本語の力に大きな差がある状態のまま国語の一斉授業を行っても成果は上がらない。それぞれの日本語力に見合った指導形態を考える必要がある。また、算数の学力を定着させるためには、児童個々の習熟度を把握した上で習熟度別にグループを編制した少人数指導が有効であると考える。そこで、国語は指導形態別、算数は習熟度別で少人数授業を行うことで学力の向上を図っている。




【国語の指導形態別による少人数授業】




【算数の習熟度別による少人数授業】

（３）家庭への働きかけ

「家庭学習のススメ」を各家庭に配付して以下の点について啓発した。

| |
|---|
| 「まいにちじかんをきめてべんきょうしよう」 １・２年生<br>「学校で習ったことを復習しよう」 ３・４年生<br>「長い時間勉強しよう」 ５・６年生 |

日本語の読めない保護者にはポルトガル語版を配付した。また、個人懇談会ではポルトガル語・スペイン語・タガログ語・英語の通訳をつけ、外国人保護者にも家庭学習が大切であることを理解していただき、家庭での協力を仰いだ。

## ３．取組の成果の把握･検証

国語の言語領域に関して外国人児童もよい結果が出始めている。特に「平仮名片仮名の書き」と「漢字の読み」はよくできており、国語の指導形態別授業の成果といえる。また、キャリア能力についてのめざす子供像を明確にしてキャリア教育を進めたことで､授業者が具体的なイメージをもって授業を展開することができ、児童が活躍する場面が増えてきた。「なになに金曜日」で新たな言葉を獲得した児童が、その言葉を使いたいという思いをもつようになり、授業で活発に発言する姿が多く見られるようになった。

## ４．今後の課題

児童の転出入が多く、例年、在籍児童の１割以上が年間で入れ替わってしまう。日本語を獲得した児童が転出し、日本語の話せない児童が新たに編入してくるという状況が、毎年繰り返されている。今年度も１月 11 日現在、すでに 30 名の外国人児童を年度途中で受け入れている。このような状況の中、年度途中の編入児童も含めて学校全体としての学力向上を成し遂げていくことは、かなり難しい。外国人児童の日本語指導にさらに力を入れつつ、日本人児童の学力向上もおろそかにすることなく今後も取り組んでいきたい。

「主体的･対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小･中学校）」

平成２９年度委託事業完了報告書

【協力校】

| 都道府県名 | 愛知県 | 番号 | ２３ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 愛知県知立市立知立南小学校 |
|---|---|

## １．当初の課題

（１）学力調査等から

・２年（低学年）が全国平均よりやや低いが、３～６年は全国平均より高い。本校は、毎年低学年がこのような傾向にある。基本的な学習習慣の定着に原因があると考えられる。

・国語は「意欲関心態度」や「書く力」が低い。

・算数も「意欲関心態度」が低い。また、「数学的な考え方の力」が低い傾向にある。

（２）かきつばたスタンダードの課題

か…「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けての授業実践が必要

き…主題研究の課題から、「聴く力」「話す力」「書く力」を高めていくことが必要

つ…主題研究の課題から、コミュニケーション能力を高め「学び合うことができる子の育成」

た…「だれもがわかる・できる」実感のもてる授業実践が必要

## ２．協力校としての取組状況

（１）教師の授業力向上に向けての取組

①「知立市学校教育スタンダード　かきつばた」を基にした授業改善

5年国語授業風景

か…「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けての授業実践

・授業研究 H29 ５年国語「物語のよさを解説しよう～注文の多い料理店～」

き…主題研究として「 聴く・話す・書く」ことを重点として CSU（ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ ｽｷﾙ ｱｯﾌﾟ）活動の充実を図る。

つ…主題研究「学び合うことができる子の育成」

5年社会授業風景

CSU活動…ペアトークの風景

・授業研究 H28 １年生活科「たねといのち」

５年社会「自動車をつくる工業」

H29 ６年 理科「生物どうしの関わり」

（講師：小笠原豊先生）

３年国語「ミラクルチェンジインタビュー」

３年国語「ニュース・ワン！はたらく犬ニュース番組を作ろう」

４年国語「読書会を開こう　～世界一美しいぼくの村～」

3年国語授業風景

・国語授業診断(2 学級:2-3、5-2)　（講師：佐藤洋一先生）

・全職員による授業実践（研究集録作成）

た…ユニバーサルデザインを取り入れた授業実践

・授業研究 H28 ３年算数「三角形」（講師：志水廣先生）

４年理科「体が動くひみつを探ろう」

（講師：小笠原豊先生）

1年算数授業風景

H29 １年算数「ながさくらべ」

６年算数「図形の拡大と縮小」（講師：志水廣先生）

・算数授業診断…H28（4 学級:1-2、1-3、3-2、6-1）

H29（5 学級:1-3、2-4、4-4、5-1、6-3）

6年算数授業風景4年理科授業風景

②プロに学ぶ授業実践（どの子にも分かる・できる・楽しいを実感できる授業づくり）

・ユニバーサルデザインを取り入れた算数の授業実践
…志水　廣先生の示範授業の実施（写真左）

・聞く力を育てる国語の授業実践
…佐藤洋一先生の示範授業の実施（写真右）

授業風景（志水先生・佐藤先生）

③「学力向上に向けての授業改善」のための研修会

・「分かる算数の授業」「音声計算」「問題文理解のための手だて」「じふく学習」（自復学習）についての研修会（４回）
（講師：志水廣先生、鈴木百合子先生）

・「主体的・対話的で深い学びの実現」及び「国語力の育成」に向けた研修会

研修会風景（佐藤先生）

学力向上研修会風景

④「ユニバーサルデザインを生かした授業実践」の推進

・通常学級に在籍する支援の必要な「児童へのアプローチの仕方」や「児童の特性を踏まえた指導・支援の在り方」を学ぶため、特別支援学級での研究授業を実施した。そして、教員が児童一人一人のニーズを正しく受け止め、どの児童にも「分かる・できる・楽しい」授業を目指した「授業のユニバーサルデザイン」を実践するよう努めた。

特別支援学級の授業研究風景

⑤教師の「かきつばた」授業改善意識アンケートの実施

・「かきつばた」授業改善の意識の高揚をめざし、教師の意識アンケートを年２回実施した。

（２）学校全体での取組

・コミュニケーション能力（聴く・話す・書く力）を高めるためにCSU活動を実施した。
・計算力を高める「音声計算」を実施し、事前事後での正答率調査と計算力実態分析を行った。
・長期休業時に学習相談会（個別学習）を実施し、学習内容の振り返りと定着、学習支援を進め、学習効果の向上に努めた。
・算数科における少人数指導（ＴＴを含む）を実施した。
・ユニバーサルデザインを生かした授業で、視覚的支援に有効な教材、ホワイトボード、タブレット等、ＩＣＴ活用を推進した。

自作教材・ﾎﾜｲﾄﾎﾞｰﾄﾞの活用

ﾀﾌﾞﾚｯﾄを活用した授業風景

・「学力向上に向けての取組」（各学年毎）計画をもとに、前期終了後、後期の取組計画を再度作成し、学力向上に向けて取り組んだ。
・年度末にＣＲＴ学力検査を実施し、結果をもとに講師を招聘（２月）し、学力課題に対する状況の把握と学力改善に向けての指導助言をいただき、 学力補充を進めた。

（３）家庭への働きかけ

・家庭学習の習慣化のために、「家庭学習のススメ」啓発リーフレット（改定版）を懇談会で配付し、家庭と連携して学習方法の定着を図った。低学年は、音読、漢字練習、音声計算をやって提出するよう指導した。高学年は、自主学習を推進し、自学ノートにより家庭学習の習慣化を図った。また、学校だより、学年通信でも家庭学習や規則正しい生活習慣の意義を説明したりして、定着への協力を促して、連携して学力向上に努めた。
・学校改善アンケートに「家庭学習について」の項目を追加し、変容を定量的に把握した。

## ３．取組の成果の把握･検証

（１）教師の授業力向上に向けての取組

・「**知立市学校教育スタンダード　かきつばた**」をもとにした授業改善

き…聞いたことを書取り、理由を考えて書いたり、考えを整理したりする力がついた。

つ…自信をもって全体の場で発表できるようになってきた。また、意欲的に自分の思いや考えを発表したりできるようになってきた。そして、根拠や理由を挙げて発言する児童が出てきた。生き生きと話し合い、考えを深め合う子が見られるようになった。

た…ユニバーサルデザインを生かした「だれもが分かる授業実践」を積み重ねてきたことで、約 90%の児童が「学校が楽しい」と回答した。

・教師の「かきつばた」授業改善の意識が少しずつ高まってきた。特に、か・き・たは約 90%と大変意識が高くなってきた。

（２）学校全体での取組

【音声計算事前事後正答率比較】(児童数300人)

| 音声計算 年比較 | 2016 ⑩事前 | 2017 ⑪事後 | 成長度 |
|---|---|---|---|
| ４年 | 91 | 99 | 8.0 |
| ５年 | 87 | 98 | 11.0 |
| ６年 | 84 | 99 | 14.8 |
| 平均 | 87 | 97 | 10.1 |

・音声計算を取り組むことで、計算が苦手な児童も四則計算に慣れ、正答率が上がった。また、習熟度の低い児童の計算力を高めるのに効果があった。(右表参照)

・ＩＣＴの活用により、児童の興味関心が高まり、理解が深まった。また、安心して学習に取り組むこともできた。

・算数科での少人数指導により、「分かりやすい」と回答した児童の割合が約 90%であった。

・長期休業中の学習相談会を通してゆっくり考え方を指導でき、苦手分野を補充できた。九九を克服できた。保護者の協力があった児童は学力が維持できた。

・きちんとノートを取ったり、自分の言葉や図、絵でまとめたりする児童が増えた。

・「ペア・グループトーク」での話し合いを通して、基本的な「話型」、「聴く・話す」習慣が定着し、自分の意見が言えるようになり、協働的な話し合いの場面が増えた。また、少ない時間で意見を書く力も高まり、自分の考えをまとめようとする児童が増えてきた。

（３）家庭への働きかけ

・音声計算、音読、漢字練習の継続により、基礎学力の定着につながった。特に、音声計算を家庭学習で進めることで、正確性と速さが上がった。漢字テストの正答率が上がった。

## ４．今後の課題

（１）教師の授業力向上に向けての取組

・学力向上に向けての研修会、授業実践を通して、教師の「かきつばた」授業改善の意識が高まってきているが、いっそう共通理解を図り、学校全体で取り組めるようにする必要がある。

・「学力向上に向けての研修会」で学んだことの実践と継続に努める。そして、「だれもが分かる授業」「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざした授業実践を推進する必要がある。

（２）学校全体での取組

・学力課題に対する状況を把握し、「学力向上に向けての取組」（各学年毎）をＰＤＣＡで具現化し、継続して意識して実践していけるようにする必要がある。

・「課題設定」「振り返り」を積極的に実施し、主体的な学習態度を育成する必要がある。

・ＣＳＵ活動の推進により、グループでの司会力、質問力を育成する必要がある。また、ＣＳＵ活動では個人差が見られたので、内容および支援方法を工夫する必要がある。

（３）家庭への働きかけ

・学習が苦手な児童ほど家庭学習の意欲が低く、保護者の認識、協力も低い。今後は児童の「じふく学習」等、自主的な家庭学習の推進と「家庭学習」の啓発に努める必要がある。

・個人差を減らすために、学力不振の児童について、長期休業中の学習相談会を充実させる等の学習意欲を高める手だてと学習支援を工夫する必要がある。そして、基礎学力の定着に向け、いっそう家庭との連携を推進していく必要がある。

**「主体的･対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小･中学校）」**

**平成２９年度委託事業完了報告書**

**【協力校】**

| 都道府県名 | 愛知県 | 番号 | ２３ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 愛知県知立市立知立南中学校 |
|---|---|

**１．当初の課題**

（１）学力調査等から

学力下位層の生徒が多いので、基礎学力の確実な定着を図るとともに、生徒が主体的に学ぶ力を育む必要がある。また、外国人生徒の割合が全校の 13.3%を占めることから日本語指導を充実させ、学力の定着を図る必要がある。さらに、家庭での学習習慣が身についていない傾向がうかがえるので、家庭との連携を図りながら望ましい生活習慣が定着するよう指導したい。

（２）かきつばたスタンダードの課題

知立市のかきつばたスタンダード内の５つの視点の中で本校は、以下の３点に重点を置く。

・学習に見通しを持たせ、学習を振り返る場を設定する。　視点か

・学んだことを進んで身に付け、事後に生かす。　視点き

・主体的に学習に取り組み、級友と学び合う。　視点つ

**２．協力校としての取組状況**

（１）教師の授業力向上に向けての取組

平成 28 年度は、教師向け研修会に大学准教授１名、授業研究会の指導・助言に大学教授１名、校長１名、総合教育センター指導主事１名を招いて、教員の指導力向上をめざした。本年度は、日本語指導と道徳教育に焦点を絞り、以下の取組を行った。

①日本語教育視察および主題研究全体授業（11 月 24 日）

愛知淑徳大学の小島祥美准教授をお招きし、本校の日本語教育について指導と助言をいただいた。また、日本語の取り出しによる授業と通常の学級における授業内での外国人生徒の支援の様子も参観いただき、授業の工夫・改善や今後の在り方について指導いただいた。

【小島先生によるご指導】

【学び合う生徒】

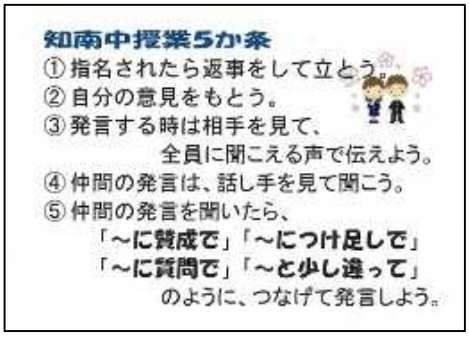
なお、西三河教育事務所より主事と語学相談員、知立市早期適応教室より先生も来校いただき指導・助言をいただいた。

②道徳教育研修および主題全体授業（12 月 21 日）

愛知教育大学教職大学院の鈴木健二教授をお招きし、「特別の教科　道徳」を見据えた授業研究会と講義をいただき、学校全体の道徳教育の方向性についてご指導をいただいた。

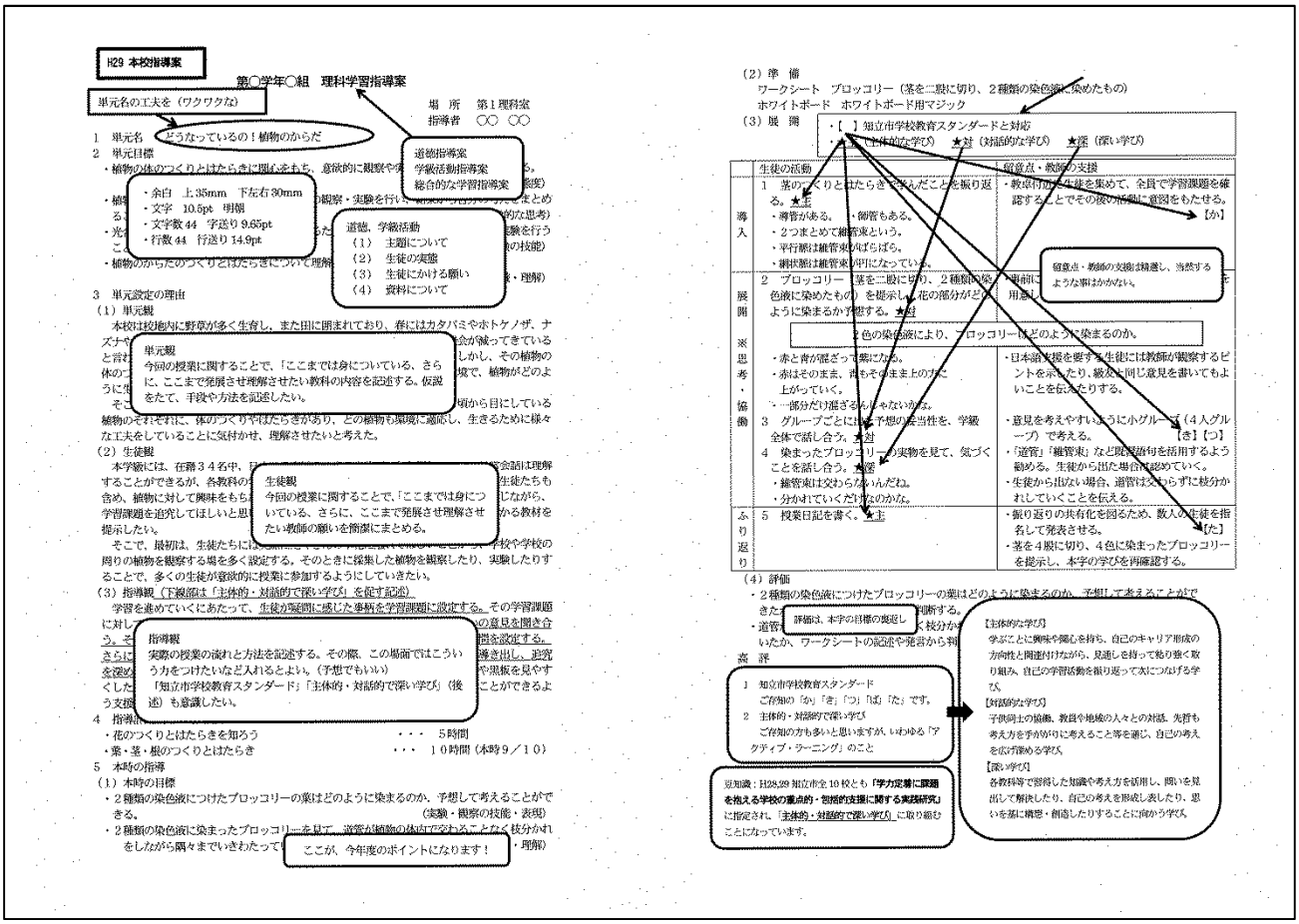
（２）学校全体での取組

研究主題を「主体的に学習に取り組む生徒の育成」として、授業実践に取り組んだ。研究主任と主題推進委員を中心に本校生徒の実情に合った授業づくりをめざした。さらに、教師と生徒がめざす授業を理解し合う為に、「知南中授業５か条」を教室等に掲示した。




【教室掲示物】

また、教師側の心構えとして指導案内に単元や１時間の授業で身に付けさせたい内容を記し、「知立市学校教育スタンダード」や「主体的・対話的で深い学び」を位置づけたりしてめざす生徒像に近づくような授業作りやその工夫・改善を進めている。



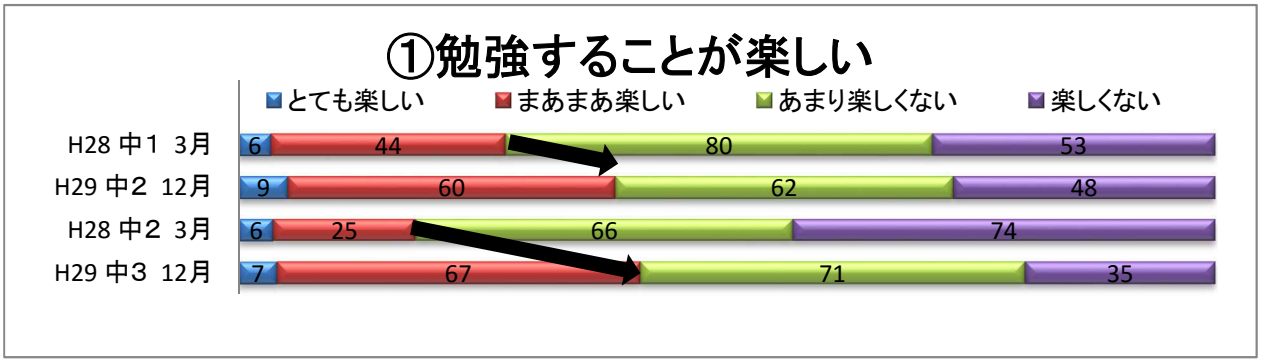

【指導案】

（３）家庭への働きかけ

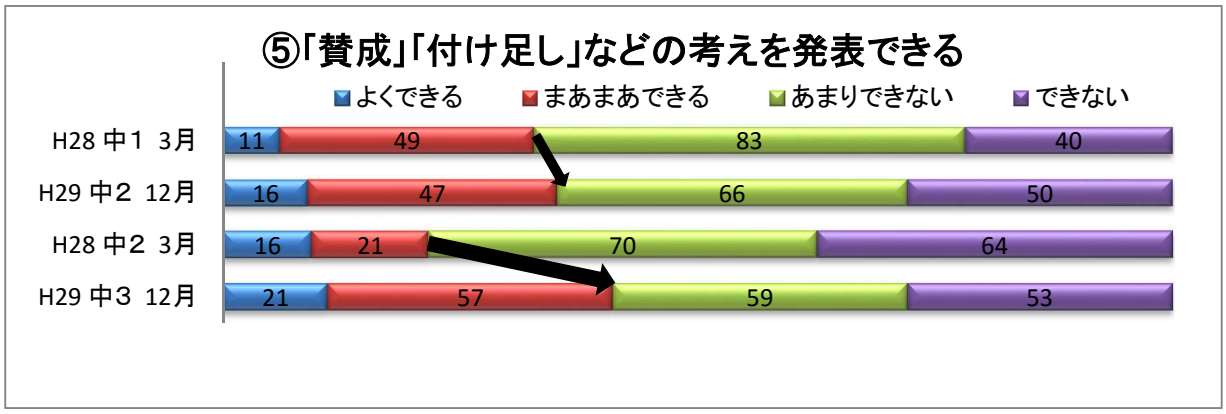
①啓発リーフレット「家庭学習のススメ」による家庭学習推進のお願い

②学校だよりや学年だより、保健だよりを使って生活習慣改善への呼びかけ

３．取組の成果の把握･検証

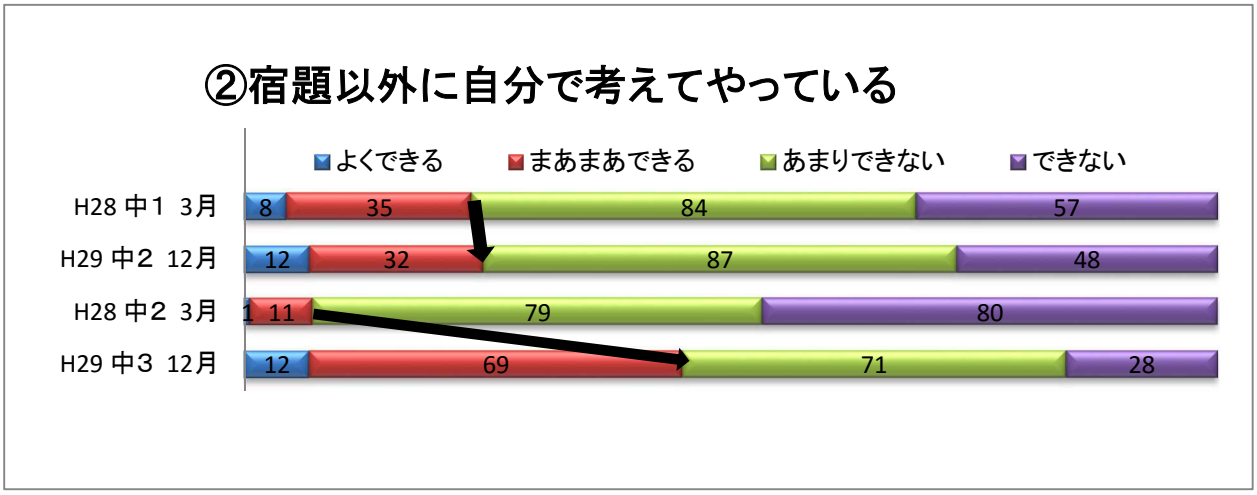



グラフは、平成 28 年３月と平成 29 年 12 月のアンケート結果の一部である。「勉強することが楽しいですか？」の問いに対して、「とても楽しい」「まあまあ楽しい」との回答率は２学年とも上昇している。




また、学んだ内容に自分なりの考えをもち、他人の考えを参考に自分の考えを深める生徒も増えてきたことが上のグラフから分かる。

４．今後の課題




上のグラフから分かるように、生徒たちが学習したことを事後に生かすようになるのは、３年生になってからである。もっと早期にこの気持ちが芽生え、学習に対して前向きな姿勢を見せるよう、授業のさらなる工夫や改善をする必要がある。また、今後増加する外国人生徒に対する指導をきめ細かに充実したものにする必要があると感じる。

**「主体的･対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小･中学校）」**

**平成２９年度委託事業完了報告書**

**【協力校】**

| 都道府県名 | 愛知県 | 番号 | ２３ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 愛知県知立市立八ツ田小学校 |
|---|---|

**１．当初の課題**

（１）学力調査等から

昨年度末に行ったＣＲＴ学力検査の結果から、平均得点率が全国比 100 を超えた学年は５年生だけであったが、４年生が平均値の 100 を示すなど学力の向上傾向も見られた。反面、教科によっては 80 を下回る学年も見られた。今年度４月に実施した全国学力・学習状況調査では、全体的に全国平均を上回り、観点によっては大きく平均を上回る内容もあり、学力が維持されていた。この学年が卒業する来年度以降の学力の全体的な底上げが課題である。

全国学力・学習状況調査の質問紙調査では「自分には、よいところがありますか」という質問に対して、「思っている」と答えた児童が全国平均より低いことから、自分のよさを認識していない児童や自信のない児童など、本校の研究テーマにもある「自尊感情」の希薄な児童の割合が多い結果となった。

（２）かきつばたスタンダードの課題

全国学力・学習状況調査の質問紙調査で、授業での情報収集、話し合いによる解決、ノートのまとめの意識が低いと思われる。また、「自分の考えを他人に説明したり、文章に書いたりすることが難しいですか」について「思っている」という回答が全国・県平均より低く、知立市学校教育スタンダードに掲げた学びの取組が十分に定着していないと考えられる。

**２．協力校としての取組状況**

（１）教師の授業力向上に向けての取組

授業実践では、知立市学校教育スタンダードを意識し、学習指導案の中に「かきつばた」の視点を取り入れた支援の手だてを明記することや、板書計画を作成し指導案に必ず添付することを実践した。板書計画を作成することにより、授業のはじめから終わりまでを見通して取り組むことに役立った。また、校内現職研修として、名古屋学芸大学の松崎利美特任教授によるユニバーサルデザインによる授業改善についての講義や、来迎寺小学校の丹節生教諭による道徳の授業実践の進め方の講義をいただき、授業力の向上を図った。

授業では一人１実践を設定し、主題全体会を学級活動（学級力）、総合的な学習、生活単元で行い、指導員訪問、知立市教育研究会の授業研究会、健康教育実地審査における公開授業などの機会に公開した。学級力向上についての授業研究会では、愛知教育大学の磯部征尊准教授に助言者として参加していただき、学級力の向上について助言をいただくとともに、学級力を高めることで学力の向上に結び付けていこうという考えを確認し合った。

（２）学校全体での取組

校内の研究テーマの一つである学級力の向上については、昨年度より引き続き、愛知教育大学の磯部征尊准教授をお招きして、７月までの実践をもとに学級力の実践の一つであるスマイルミーティングなどを行い、今後の方針について考える場とした。また、愛知教育大学教職大学院の倉本哲男教授をお招きし、「自尊感情」「カリキュラムマネジメント」を中心に講義をいただき、学校全体の研究の方向性についてご指導を受けた。

【磯部准教授による学級力講座】

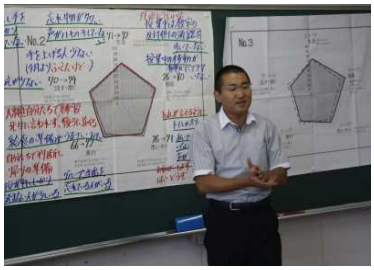
【スマイルアクションを考える】

（３）家庭への働きかけ

学校での学習の取組の様子をできるだけ保護者に見ていただくために、月１回の学校公開日を設定（運動会、学芸会などの保護者参観の行事はそれに替える）し、参観日の予定を案内プリントを通じて保護者に詳しく知らせている。

**３．取組の成果の把握・検証**

学級力向上に向けては、６年１組で学級力レーダーチャート作成に関わるスマイルタイムのもち方の提案授業を行った。子供たちの話し合いの仕方や、付箋の活用について意見が交わされた。６年生ならではの話し合いだったという意見も出され、学年による話し合いのレベルの差についても言及した。助言者の磯部准教授からは、例えばあいさつができるようになると「思いやり」の項目が上がるなど、項目の共有化の必要性や、今回の取組が今後のモデルとなる授業であるなどのご指導をいただいた。「安心・安全」があるから、子供たちが助け合える、認め合える学級になるというお言葉もいただいた。



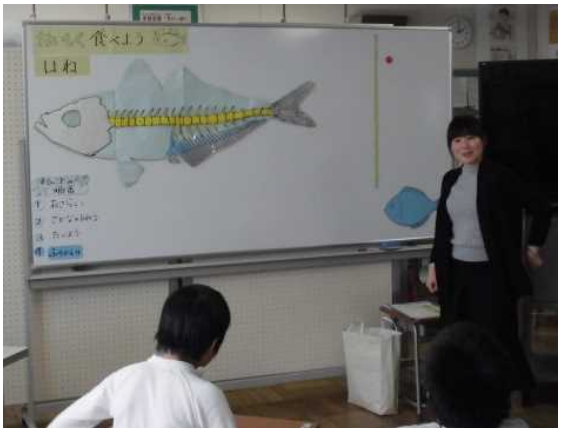
今回は２つのスマイルアクションから選んでほしい。

達成していないものからやればいいです。

総合的な学習、生活単元の実践では、栄養教諭とともに食育に視点をあてた授業を行った。「かきつばた」に重点を置き、「めあてとふりかえり」（か）「班や全体での話し合い」（き・つ）「板書計画」（ば）「２コブラクダの授業」（た）などの取組が見られた。「２コブラクダの授業」は授業の盛り上がりの場面が２回現れ、２回目のコブで「考える、気付く、できる、深める」場面になればという考え方である。

特別支援学級の生活単元の実践では、栄養教諭が大型の魚の模型を使って魚のつくりについて順を追って分かりやすく説明した。また、魚のほぐし方を実演し、それをタブレットから大

型テレビへと生中継で分かりやすく提示するなど、手作りの掲示物やＩＣＴ機器を使い分ける工夫が見られ、特別支援学級の子たちの理解を助ける授業となった。魚が苦手だった児童も、授業の中で焼いた魚を完食することができた。




【栄養教諭による魚のつくりの説明】

【魚のほぐし方を実況生中継】

## ４．今後の課題

本年度の主題研究授業を通して、次のような課題が浮かび上がってきた。

・授業のめあてを焦点化させるために、児童一人一人に自分なりのめあてをもたせる手だてを工夫する。

・学級の流れを提示することで、児童に安心感を与える。

・発見や驚きのある単元を工夫して、児童の興味・関心を引きつける。

・何をどのように映したいかを明確にして、タブレットの使用力を向上させる。

・班での話し合いは、自分の意見をもつためのものか、意見をまとめるものかを明確にする。また、役割分担、手順や約束事などのマニュアルを提示する。

・全体での話し合いでは、学習ボードなどによる視覚化・共有化を図り、互いの顔が見やすいような座席配置を工夫する。そして、学校全体として話し合いの方法も統一して、実践、実証していく。

・２コブラクダの２コブ目は主課題として、考える、気付く、できる、深めることをめざし、乗り越えたときの満足感や達成感を味わわせる。

・２コブラクダのコブの部分が何かを考え、コブの内容を精選する。

・児童の言葉による振り返りを行うとともに、自己表現が苦手な児童への支援の手だてを考える。

いずれも、「かきつばた」に関わるような事柄であるので、主題研究と併せて検討し、ユニバーサルデザインへの取組も含めて、深めていきたい。

**「主体的･対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小･中学校）」**

**平成２９年度委託事業完了報告書**

**【協力校】**

| 都道府県名 | 愛知県 | 番号 | ２３ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 愛知県知立市立来迎寺小学校 |
|---|---|

**１．当初の課題**

（1）学力調査等から

平成28年度末に行った学力テストにおいて、国語で全国平均を上回っていないのは、「話す・聞く」「書く」の観点であった（３学年）。算数では、どの学年もほぼ全国平均を上回っていたが、「考え方」の観点が低い学年が１学年あった。また、「関心・意欲・態度」が低い学年が目立った。平成 29 年度全国学力・学習状況調査の国語では、言語についての知識・理解・技能で正答率が高いところがあるものの、「話す・聞く」「書く」についての問題の正答率が低く、算数でも、記述式の問題で正答率が低いものが見られた。

（2）かきつばたスタンダードの課題

（1）の実態より、かきつばたスタンダードの以下の点について重点的に取り組むこととした。

「き」自分の考えを整理し、まとめられるようにする

「つ」自分の考えを伝え合い、考えを深め，表現できるようにする

「ば」視覚的に分かりやすい板書

「た」誰もが分かり、意欲的に活動できるような授業づくり

**２．協力校としての取組状況**

（1）教師の授業力向上に向けての取組

ア　愛知教育大学の土屋武志教授による授業づくりについての研修会

書きたいことが整理できるよう「見出し」を付けて自分の考え（作文等）を書かせる、自分の考えを明確にさせるため、意見を交換し合い関わりがもてるような場を設けるなど、具体的な授業づくりについて学んだ。

【愛知教育大学の土屋武志教授による研修会】

イ　江南市立布袋小学校の土井謙次校長を招いての主題研究全体会

これまでも、土井先生の指導を受け主題研究に取り組んできた。今回は、考えを整理するための思考ツールのよさについて再確認でき、児童の思考を助けるための板書や提示物、教材の工夫などについて学ぶことができた。

ウ　ICT 機器の活用についての研修会

ICT 支援員より機器の有効的な活用法を学んだ。

（2）学校全体での取組

ア　主題研究「友達と関わりながら、楽しく考えを深めることのできる来小っ子

～教科・目的に合った思考スキル・思考ツールを活用して～」に関わる取組

思考スキル・思考ツールを使うことで、自分の考えを整理（視覚化）し表現できる、思考スキル・思考ツールを使いながら友達と話し合うことで自分の考えを深めることができる、振り返る場を設定することで考えを自分の言葉で表現できると考え、主題研究に取り組んだ。思考スキル・思考ツールを使う

活動、ペア・グループ・全体などで話し合う活動、書く活動などを盛り込んだ実践を全員行い、そのうちの１時間を学年又は全体授業研究として公開し、協議会を行った。

| 月日 | 内容（お題） | 思考スキル・思考ツール | 実践した内容 |
|---|---|---|---|
| 6/22,29（４年） | クリーンセンターについて整理しよう！ | 整理する・計画する・ふりかえる KWL | 「K」には知っていること、調べたこと「W」には知りたいこと、調べていて疑問に感じたことを整理して見学計画をたて、「L」には見学を通して学んだこと、分かったことをまとめた。 |
| 9/21（１年） | どちらがすき？　パンとごはん | なぜなにシート | どちらが好きか選択し、理由を２つまで考え、数人のグループで意見交流した。 |
| 10/5（３年） | 前期の振り返り | 百マス作文 | 前期の振り返りと後期に向けての目標を書いた。 |

イ　スキルアップタイム（朝の活動）の活用

友達との関わりがもてるような話し合い活動や思考ツールがより使えるようになるための練習、百マス作文を書く活動などを行い、聞く、話す、書く力の定着を図った。

ウ　基礎学力アップタイム（朝の活動）の活用

国語、算数の補充問題を行い、基礎学力の定着を図った。

【スキルアップタイム
「班の仲間とクイズ大会をしよう」】

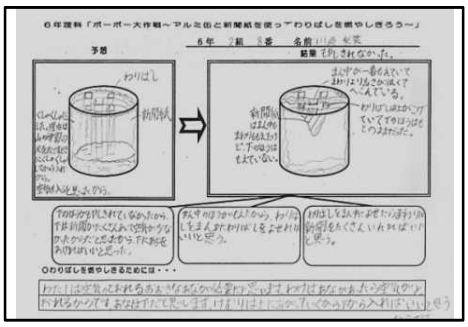
（３）家庭への働きかけ

夏休みと冬休みの前に個人懇談会を行い、それまでの学習状況や休み中に取り組む課題について保護者と話し合ったり、家庭学習の内容について伝えたりした。また、学校だよりではスキルアップタイムでの取組について紹介したり、学年だよりで児童の活動の様子や感想などを伝えたりした。

## ３．取組の成果の把握･検証

〈６年理科「ものの燃え方」の実践より〉

自分の実験結果の要因を考えるときに、どうまとめたらよいか分からなかった児童が、「BA なぜなにシート（思考ツール）」を使うことで、自分の考えを整理し明確にすることができた「き」。



【ワークシート（BA・なぜなにシート）】

伝え合う場面では、ホワイトボードに図を書いて説明することで、発表が苦手な児童でも考えを伝えることができた。また、視覚的にも他の児童の考えが理解しやすいため、友達の意見につなげた発言をすることができた。板書では、それぞれの意見が比較できるよう工夫することで、考えを深めることができ、さらに調べていきたいという意欲をもつことができた「つ・ば・た」。

他の実践でも、教科・目的に合わせて思考スキル・ツールを工夫することにより、自分の考えを整理し、表現することができた。スキルアップタイムでの成果もあり、低学年でもツールを使って考えたことをまとめることができた「き」。また、話し合いの場を工夫することで、話す抵抗感が少なくなり、意欲的に話し合い活動に参加したり、つなげた発言をするなど考えを深めたりすることができた「つ・ば・た」。

【ホワイトボードを使用しての発表の様子】

昨年度末と今年度 12 月に行った６年生の学習アンケートでは、「よくできる」「まあまあできる」と答えた児童の割合が「自分の考えや感想を書く」は同じであったが、「『なるほど』『さすが』と感じながら聞く」が 14 ポイント、「『賛成』『付け足し』などの考えを発表できる」が７ポイント向上した。児童の意識が変化したからと思われる。

## ４．今後の課題

今後は、教科･目的に合わせて思考ツールをさらに工夫したり、与えられたツールでなく、自分で思考ツールを選択して表現したりすることができるようにしていきたい。また、朝の活動で楽しく書く活動や話し合い活動が進められるよう、題材の開発を進めていきたい。

**「主体的･対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小･中学校）」**

**平成２９年度委託事業完了報告書**

**【協力校】**

| 都道府県名 | 愛知県 | 番号 | ２３ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 愛知県知立市立竜北中学校 |
|---|---|

**１．当初の課題**

（１）学力調査等から

本校は平成 28 年度全国学力・学習状況調査において、全国平均をやや下回る結果であった。正答率は全国平均と比べて、国語Ａが－0.8％、国語Ｂが－1.9％、数学Ａが－0.2％、数学Ｂが－0.2％である。また、設問ごとの分析からは、次の問題（領域）が苦手であることも分かった。

・国語Ａ：話を聞いて自分の考えを比較し、広げること（話す・聞く）

・国語Ｂ：必要な情報を読み取り、根拠を明確にして考えを書くこと（話す・書く）

・数学Ａ：特長や性質をとらえ、関係式や作図をすること（技能・知識）

・数学Ｂ：数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明すること（数学的な見方）

（２）かきつばたスタンダードの課題

このことから、知立市学校教育スタンダード「かきつばた」の５項目の内、特に以下の３項目を重点課題ととらえることにした。

「き」…聞く、話す、書くスキルの習得、向上を

「つ」…伝え合い、学び合う授業づくりを

「た」…誰もが「わかる」、「できる」授業を

**２．協力校としての取組状況**

（１）教師の授業力向上にむけての取組　～「き」「つ」の実現に向けた授業力の向上～

ア　愛知教育大学教職大学院教授　鈴木健二氏「道徳の何がどうかわるか」（H28）

外部講師として愛知教育大学教職大学院の鈴木健二教授を招いて研修会を行った。道徳の教科化に向け、「議論する道徳」の重要性について、何を議論させるのか（手だて）、その中で何を考えさせるのか（目的）を明確にすることの大切さをご示唆いただいた。また、そのために必要なのは、教師の授業構成力と教材開発力であり、充実した教材の視点として、「感動を覚える教材」「問題意識をもって、多面的・多角的に考える教材」であると述べられた。こうした議論を各教科において展開することで、生徒の聞く、話す、書くスキルの向上や質の高い伝え合い、学び合いが可能になることを学んだ。

【道徳研修会】

イ　愛知教育大学教授　大鹿聖公氏「協働学習活動　授業のあり方をお互いに学ぼう」（H29）

外部講師として愛知教育大学大鹿聖公教授を招いて、２回にわたって研修会を行った。協働学習を取り入れた授業づくりについてワークショップ形式で学んだ。協働学習グループと旧来

の学習グループの違いとして、相互協力関係・信頼関係や個人の責任等に重きがおかれ、協働学習を通して社会的技能の向上が図られることを学んだ。様々な場面で応用でき、また様々な場面で活用することで、その効果もあげることができる学習スタイルである。協働学習の要素と活動の特徴については以下のとおりである。

第１回は教師のワークライフバランスをテーマに提言をまとめる活動を、第２回目は知立市をテーマに 10 時間程度の授業の単元構想づくりを行い、各グループが発表を行った。代表係が話し合いをリードし、連絡係が他のグループとの情報交換を行い、物品係が資料の収集に走ったりと、どのグループも個々の役割に責任をもち、活発な議論が行われていた。学び合いを通して、対象となる課題に対する学びの深まりが得られると同時に、話す・聞く・書くというスキルの向上も大いに期待できることを参加した教師が実感することができた。研修後の感想には次のようなものがあった。

| 協働学習の要素 | 活動の特徴 |
|---|---|
| 1．相互協力関係がある | 個人→グループ、グループ→個人の学びが相互協力関係の中で繰返される。 |
| 2．個人の責任がある | 個人が各々の得意分野を生かした主体的な関わり方が必要。 |
| 3．メンバーは異質で編成 | 年齢、性別、成績を問わず、異質なメンバーでグループ編成が可能。 |
| 4．リーダーシップの分担をする | 各々の得意分野が生かせる活動で、役割を担う。 |
| 5．相互信頼関係あり | 一人ではできないことも仲間と一緒だったからこそできたと感じたり、活動の中で互いを認め合ったりするところから信頼関係が生まれる。 |
| 6．課題と人間関係が強調される | 課題達成はもちろん、グループのメンバーとやりとりをする中で、人とのかかわり方の大切さも強調される。 |
| 7．社会的技能が直接教えられる | 課題を解決する過程で、主張、理解、受容といった社会的技能を使う。 |
| 8．教師はグループを観察、調整する | 教師は、協働学習が円滑に進むように、観察、調整役としてグループを見守る。 |
| 9．グループ改善手続きがとられる | 毎回の活動後には必ず振り返りを行い、課題達成・協働学習に対して改善の有無、気づき等を挙げ、次の活動に生かす。 |

【協働学習の要素と活動の特徴】

一人一人に役割があることで、自分も必要な存在なんだと認識できると感じた。生徒にも様々な役割を経験させたい。（国語男性）

合唱の授業で、歌詞解釈に協働学習を取り入れてみたり、曲のイメージを絵で表してみたりと様々な活動を通して曲作りを深めていきたいと思いました。（音楽女性）

英語の授業でも今回のような協働学習は取り入れやすく、取り入れることで生徒間の学び合いがかなり深まると思う。（英語女性）

【ワークショップ・単元構想作り】

【ワークショップ・グループ発表】

研修後、実際に国語、社会、英語等複数の教科で授業実践を行った。中３社会「個人の尊重と日本国憲法」の導入「ちがいのちがい」の学習で協働学習を取り入れた授業を行ったところ、次のような生徒の感想があった。

それぞれ意見を出し合って、楽しく話し合いができました。他の班の意見を聞いたりして、団結力がより深まった気がしました。（中３女子）

様々な人の意見を聞いたり、その意見に対する、賛成や反対などを聞いて深まっていくのでいいと感じました。自分が考えていた意見の反対がでたりして、「そういう考え方もあるんだ」というふうに感じました。この社会のあるべき姿が少しだけ分かりました。また、様々な意見を聞いて、自分がいいなと思った意見をこれからの人生で活かし、よい社会作りをしていきたいと思いました。（中３男子）

生徒の感想からも、課題と人間関係双方の高まりが得られたことが分かる。

（２）学校全体での取組

個の困り感に寄り添った支援の充実　～「た」の実現に向けた授業改善～

誰もが「わかる」、「できる」授業を目指し、学校全体で指導案の改善に取り組んできた。生徒一人一人に目を向け、生徒のつまずき「困り感」に寄り添い、的確な支援をすることで「わかる」授業を目指した。そのために、学習指導案の作成にあたって次のような共通化を

図った。

①本時の目標を明確にする。

②本時の目標が達成された具体的な姿として板書計画を行う。

③目標に向かう主たる段階における「個の困り感」を具体的な生徒の様子として明確にする。

④何のために（目的）何をするか（手だて）を意識し具体的な支援の方法を立てる。

また、表面的な「分からない」、「できない」ではなく、目標に至らない思考の段階にあることが生徒個々の困り感であり、目標にいたる思考の深まりに向かわせることが支援であるという共通認識をした。

中２国語「枕草子」

夏の「をかし」についてのイメージを深め、広げる場面

| 生徒の様子 | 支　　援 |
|---|---|
| 視覚的なイメージを広げられない生徒 | ①色彩のイメージがもてるように、本文の「やうやう白くなりゆく山ぎは」に注目するように示唆する。<br>②具体的な視覚イメージがもてるように、「また、一つ二つなど、ほのかにうち光りていくもをかし」の部分に注目するように示唆する。 |
| 夏のキーワードの優劣がつけられない生徒 | 多くの人が共通して、よいと同意できるものが優劣の基準になっていると気付けるようにするために、「月のころはさらなり」に注目するように示唆する。 |
| 視覚以外の感性を含むキーワードを見つけられない生徒 | 聴覚、触覚などのよさがあるものもあることに気付けるように、本文の「雨」に注目させ、何がよいか考えるように示唆する。 |

中１理科「生き物の世界」

顕微鏡で花粉を観察しスケッチする場面

| 生徒の様子 | 支　　援 |
|---|---|
| 顕微鏡を上手く操作することができない生徒 | 顕微鏡の使い方を思い出させるように、教科書を使い、教師が一緒に一つ一つ手順を確認する。 |
| 花の種類による花粉の違いを見付けられない生徒 | 大きさや形、模様などに気を付けるよう声をかけたり、花粉の違いを見分けるポイントに着目するよう促す。 |

中１社会「世界の宗教」

世界の宗教分布を読み取る場面

| 生徒の様子 | 支　　援 |
|---|---|
| 読み取り方法が分からない生徒 | 色分けされている地域を赤丸で囲むことを促すことで、視覚的に表す表現方法について知らせる。 |
| 場所は分かるが、説明できない生徒 | 既習の知識を確認し、〇〇州の西や〇〇大陸の東などの既習語句を使うように促し、言語化できるようにする。 |

中３美術「自分を表す　形と色の挑戦」

自分を色や形で表現する場面

| 生徒の様子 | 支　　援 |
|---|---|
| 自分の考えに自信がもてず作業に取りかかれない生徒 | 参考作品を提示しながら、同じ要素を表そうとしても人によって表現方法が異なることを確認し、自分なりの表現方法を大切にすることを促す。 |
| 自分の要素から色や形を思いつかない生徒 | ①参考作品を提示し、作品の色や形からどんな印象を受けるか、教師との対話を通して考えることで、その印象を手がかりに自分の色や形を見つけるよう促す。<br>②複数の色や形を提示し、一般的な色の印象（暖色系・寒色系など）について一緒に確認し、自分のイメージに近いものを選ぶよう促す。 |
| 頭の中では思い付くことができているが、色鉛筆で上手く表現できない生徒 | どんな色や形を思いついているのか教師との対話を通して確認し、色鉛筆での色の混ぜ方や筆圧の調整などの表現方法を示唆することで、イメージを表現する方法についての理解を促す。 |

【個の困り感に寄り添った支援例】

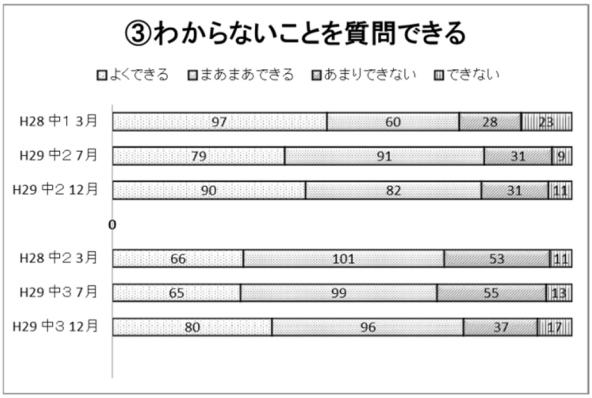
## ３．取組の成果の把握・検証

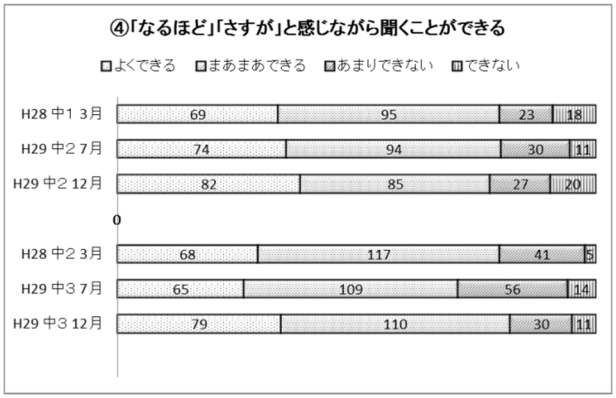
・平成 29 年度全国学力・学習状況調査では、全国平均を上回る結果であった。正答率は、国語Ａで＋0.6%、国語Ｂで＋1.8%、数学Ａで＋2.4%、数学Ｂで＋1.9%である。

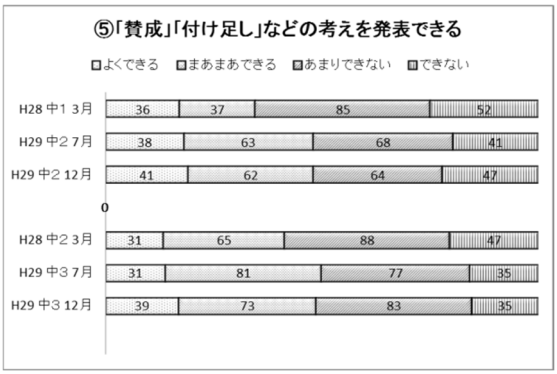
・学習スタンダードに対する教師の意識の向上が見られた。

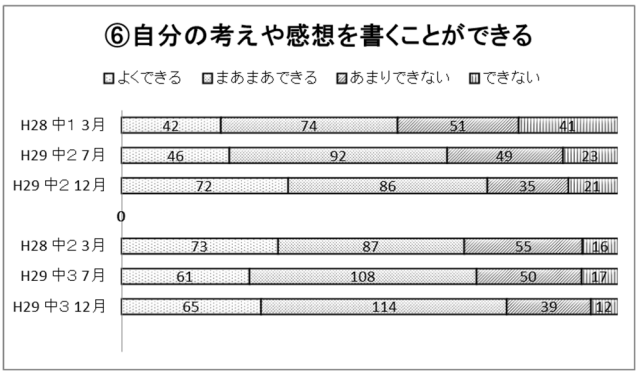
学習指導チェックカード（授業改善意識調査）から、「聞く、話す、スキルの習得、向上」に向けて、「できている」、「ややできている」と回答した教師は 80.75%（H29.7）から 88%（H29.12）に向上した。また、「伝え合い、学び合う授業づくり」に向けて、「できている」、「ややできている」と回答した教師も 69.2%（H29.7）から 78.4%（H29.12）に向上した。

・生徒の主体的に学ぶ姿勢や聞く、話す、書くスキルの向上が見られた。




【生徒学習アンケート結果（一部抜粋】

生徒向けの学習アンケートの推移を見ると、「わからないことを質問できる」生徒が増えており、主体的に学ぼうとする生徒が増えていることが分かる。「なるほど」「さすが」と感じながら聞くこと、「賛成」「付け足し」などの考えを発表すること、自分の考えや感想を書くことにおいても数値の上昇が見られる。授業の中で、学び合いや振り返りをしっかりと位置づけることで、自らの学びに自信をもち、さらなる学びに向かおうとする姿を読み取ることができた。

## ４．今後の課題

生徒の学力向上を図るための授業改善には、教師の力量向上が不可欠である。これまで取り組んだことを基盤に、教師への学習スタンダードのさらなる徹底、学び合いを深めるための研修の充実を通して、一人一人の力量向上につなげたい。また、ＩＣＴへの対応など環境の整備、家庭や地域との連携による家庭学習の充実も進めていきたい。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成２９年度委託事業完了報告書

【協力校】

| 都道府県名 | 愛知 | 番号 | ２３ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 愛知県稲沢市立長岡小学校 |
|---|---|

１　当初の課題

平成28年度全国学力・学習状況調査の結果を見ると、算数Ａ、算数Ｂ、国語Ｂは全国と同程度であるが、国語Ａが全国に比べ、大きく下回っていた。国語Ａでは、「書く」「言語」の正答率が低かったことから、学習後の定着に対する取組の改善が必要である。また、算数Ａでは「量と測定」の正答率が低かった。このことから、活用での指導場面の改善が必要である。質問紙の結果からは、学校として個に応じた指導や人材活用・施設の活用が低かった。個に応じた指導の工夫や人材活用の点で改善する必要がある。また、児童の家庭学習の意識は全国に比べ高いが、生活習慣や自尊感情について他の領域と比較すると低かった。児童に対する指導の方向を見直し、自尊感情を高めていく必要がある。

昨年度の取組を通して、授業形態の共通化（めあて・まとめ・ふりかえり）をすることによって教員の意識化が図られ、１時間の学習内容の流れが明確化し、児童の学習に対する理解度が高まり、意欲の向上につながっている。

平成28年度全国標準学力検査の結果（全国比100）を見ると国語や算数で興味・関心が前年度よりも高くなっている。**【資料１】**

国語の「興味」の前年度との比較

| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 平成27年度 | | 93 | 127 | 117 | 103 | 110 |
| 平成28年度 | 106 | 105 | 116 | 126 | 117 | 129 |

算数の「興味」の前年度との比較

| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 平成27年度 | | 90 | 114 | 117 | 102 | 112 |
| 平成28年度 | 106 | 107 | 116 | 119 | 109 | 125 |

**【資料１　国語と算数の「興味」の前年度との比較】**

また、朝の時間を活用し、学習と朝読書に取り組んだり、学期末のまとめのテストを活用して、基礎的な内容の定着を図ったことで、平成28年度全国標準学力検査の結果では「書く」と「読む」を全国比に近づけることができた。**【資料２】**

平成28年度　国語の「書く」「読む」の結果

| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 書くこと | 97 | 106 | 104 | 100 | 102 | 104 |
| 読むこと | 105 | 114 | 110 | 94 | 108 | 106 |

**【資料２　国語の「書く」「読む」の結果】**

家庭学習については、現職教育で各学年の発達段階に沿った適切な学習時間や学習の量、学習内容について検討し、充実した家庭学習になるよう意識して取り組むことができた。

今年度も引き続き授業形態の共通化・学習環境の統一を心がけるとともに、平成28年度の課題としてあげたノートや漢字ノートの指導など、基本的な形式について共通化を図っていくと共に、学年ごとのギャップが生じないように段階的な指導の在り方について職員の意識統一を図っていく。また、単学級のため、担任経験の差が学力定着に影響をおよぼしやすい。学校全体として情

報交換や研修の場を多く設定し、互いの力量向上に努める。

## ２　協力校としての取組状況

平成29年度は前年度の取組を継続し、児童の学力向上を図っていく。

(1)　学びのスタンダードの確立

①　聞き方や話し方の指導の徹底

学習環境を統一し、教室に学校全体で統一した「声のものさし」「ハンドサイン」「発表の仕方の話型」「発表の聞き方」を表示した掲示物を活用した。**【資料３】**低学年においては授業のなかで常にそれらを意識するように指導し、昨年度から引き続き習慣化を試みた。どの学年も、特にペアやグループでの話合いの場面において、「相手を見て」「うなずきながら」「終わりまで」話を聞く姿が見られ、児童の意識の高まりを感じた。

**【資料３】発表の聞き方の掲示物**

②　落ち着いて取り組む学習環境づくり

朝の活動時間を５分延長し、15分とした。火・水・金の８時10分～８時25分の15分間を朝学習の時間として漢字練習や計算練習等の基礎的・基本的な学習の定着を図った。また、月・木曜日の８時10分～８時25分の15分間を朝読書の時間として学校図書館や学級文庫等の本を活用して、読書に親しませたり、図書館司書補やボランティアの方の力を借りて読み聞かせを充実させることで、落ち着いた学習環境をつくった。

家庭学習について学年ごとの適切な学習時間を設定し、学年ごとの家庭学習の量を調整した。そのことを、学級懇談会や学年通信等で呼びかけ、各家庭との連携を図るように努めた。

(2)　授業改善と評価活動の工夫

①　授業の流れの明確化

授業形態を共通化して、授業の見通しをもたせるために、学習のめあてを「め」として板書に示すようにした。また、本時のまとめについても「ま」として板書をした。**【資料４】**これらは、協力校で共通理解を図り、掲示物を統一して取り組んだ。そのことで、視覚的にも１時間の学習内容の流れの明確化を図るようにした。

**【資料４】めあてとまとめを示した板書**

②　学習意欲の向上

授業の導入５分の教材提示や活動を工夫し、全員参加の授業づくりをめざした。

３年生の算数の導入において、卵１個の値段をもとにして代金を考えさせる際に、お金の絵カードを提示し、代金を考えさせた。このことで、低位の児童が問題の内容を視覚的にとらえやすくなり、「よし頑張ろう」とやる気を高めることにつながった。**【資料５】**

また、５年生の算数の導入では、教科書の挿絵を書画カメラで提示し、電車の中やエレベーターの中の人の混み具合が違うことに注目させた。ＩＣＴ機器を活用することで、学習のめあてをつかませ、関心をもって学習に取り組ませることに有効であった。

**【資料５】視覚に訴える導入**

③　４つの出力の場の設定

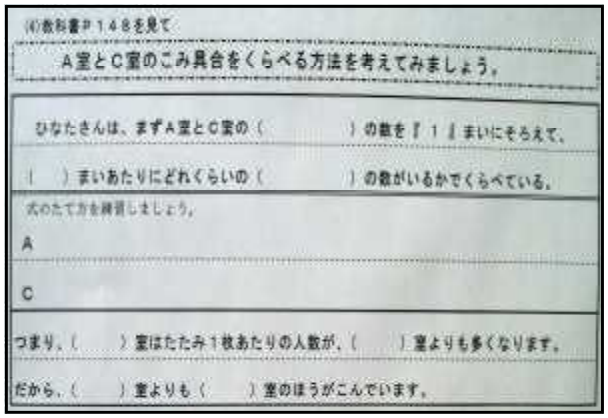
児童に自分の考えを「出力」させる場として、導入・展開１・展開２・まとめの４つの場を設定した。本校では、展開２、つまり、本時の課題についての考えを広げ、深める段階における指導を重点的に行った。ここでは、グループ学習や話合いの形態などを工夫し、学び

合いの中から、児童が主体的に学び、活躍できる場面を多く設定した。そのことで児童の自尊感情の向上にもつなげていった。

３年生の実践では、まず自分の考えをワークシートに書かせ、ペアで発表し合った後、全体の場で発表させた。**【資料６】**ペアで発表をしたことで、自分の考えに自信をもつことができ、全体の場で堂々と発表する姿が見られた。

**【資料６】ペアで発表し合う**

５年生の実践では、部屋のこみ具合を比べる方法について説明する学習において、相手に分かりやすい説明となるように、「まず」「つまり」「だから」を使って自分の考えをワークシートに書かせた。**【資料７】**接続詞を指定したことで、児童は自分の考えを整理しながら書くことができ、グループでの話合いに生かすことができた。



(4)教科書P148を見て

A室とC室のこみ具合をくらべる方法を考えてみましょう。

ひなたさんは、まずA室とC室の（　　）の数を『１』まいにそろえて、

（　）まいあたりにどれくらいの（　　）の数がいるかでくらべている。

式のたて方を練習しましょう。

A

C

つまり、（　　）室はたたみ１枚あたりの人数が、（　　）室よりも多くなります。

だから、（　　）室よりも（　　）室のほうがこんでいます。

**【資料７】工夫されたワークシート**

④　評価活動の工夫

授業計画を立てる段階で、本時の目標が達成されたかどうか、目標を実現している児童の具体的な姿をできるだけ明確にイメージして評価基準を設定した。そして、目標の実現状況を何で判定するのかを設定した。授業者は、それを基にして、児童の達成状況を確認し、指導に役立てていった。学習の終わりに、振り返りの時間を設定し、自分のことばで分かったことを書くようにしてきた。本年度も書くという作業を通して、分かったことを自分の中できちんと整理する活動を重視し、次時の授業に生かしていくようにした。授業の進み具合によって十分な時間を確保することが難しいこともあるが、重点単元を増やし、児童に振り返りを意識するようにさせた。振り返りを通して授業者の授業の評価に活用し、次時の授業に生かしていくようにした。

(3)　家庭や地域との連携

年度当初、学級懇談会や学年通信で、学年に応じて家庭学習の目安の時間を知らせ、家庭学習の習慣化を呼びかけた。

７月と１１月には、４校で連携した研修会を本校で行った。連携している３校から多数参加していただき、協議会でも、「学力向上をめざす授業づくり」チェックリストを活用し、活発な意見交換がなされた。**【資料８】**また、各担任は、連携校で行われた授業研究会に分担して一度は参加した。連携校の取組を直接知る機会となり、学ぶ意欲の向上につながった。

**「学力向上をめざす授業づくり」チェックリスト**

（　）月（　）日（　）限　　（　　）学校
（　）年（　　）組　　授業者（　　先生）
教科等（　　）　　単元名（　　）

《研究の柱立て》　学びのスタンダードの確立…①　分かる授業に向けての指導の工夫…②
出力させる場づくりの工夫…③　指導に生きる評価の工夫…④

| | ポイント | | チェック内容 | 大変よい　改善あり | メモ |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 学習規律 | ① | 学習規律（チャイム席、授業の準備、あいさつ、返事、姿勢）が守られていましたか。 | ４・３・２・１ | |
| 2 | 学習環境 | ① | 中で学習や掲示できる環境がちゃくられていましたか。集 | ４・３・２・１ | |
| 3 | 聞き方・話し方 | ① | 聞くことを意識させ、考えを伝えることができていましたか。 | ４・３・２・１ | |
| 4 | めあてとまとめ | ① | 学習課題（めあて）やまとめは適切であり、子どもに分かりやすく示されていましたか。 | ４・３・２・１ | |
| 5 | 授業の導入 | ② | 教材提示や雰囲気を工夫した授業の導入で全員を引きつけることができましたか。 | ４・３・２・１ | |
| 6 | 教材・教具 | ② | 具体物やＩＣＴ提示物などを効果的に使って、分かりやすく授業を行っていましたか。 | ４・３・２・１ | |
| 7 | 板書 | ② | 子どもの考えを取り入れた構造的で分かりやすい板書づくりがされていましたか。 | ４・３・２・１ | |
| 8 | 学習形態 | ② | 学習形態の工夫を通して、全員を授業に参加させ、一人一人の理解を深めることができましたか。 | ４・３・２・１ | |
| 9 |出力への工夫 | ③ | 全員が学習課題に対する考えをもてるような工夫がされていましたか。 | ４・３・２・１ | |
| 10 | 出力への意欲化 | ③ | 自分の考えを進んで発表することができるように見通しをもたせましたか。 | ４・３・２・１ | |
| 11 | 出力による深化 | ③ | 学習を設定を通して考えを広げたり深めたりする場面を設けましたか。 | ４・３・２・１ | |
| 12 | 出力による定着 | ③ | 本時学習で学んだことを定着させる場面を設けましたか。 | ４・３・２・１ | |
| 13 | 評価基準の提示 | ④ | 評価基準の提示を工夫し、子どもの意欲を効果的に高めることができていましたか。 | ４・３・２・１ | |
| 14 | 個別指導・個別支援 | ④ | 明確な意図を生かすことができましたか。 | ４・３・２・１ | |
| 15 | 振り返り | ④ | 効果的に机間指導を行い、指導・支援に生かすことができましたか。 | ４・３・２・１ | |
| | | | 学習時間は確保されていましたか。授業の振り返りの時間は確保できるような。 | ４・３・２・１ | |

《授業を参観して》

参観者（　　）

**【資料８】授業づくりチェックシート**

## ３　成果の把握・検証

(1)　標準学力検査（ＣＲＴ）の結果から

平成28年度と比較すると、国語と算数の興味・関心が高まっている。**【資料９】**

これは、授業の導入で挿絵を活用したり、ＩＣＴ機器を使って教材を提示したりして、児童の興味・関心を高めるなど、授業改善の取組を行ったことによって、授業の内容が児童にとって分かりやすいものとなり、児童の学習に対する意欲や興味につながった。また、ペアやグル

国語の「興味」の前年度との比較

| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 平成28年度 | | 106 | 105 | 116 | 126 | 117 |
| 平成29年度 | 116 | 105 | 114 | 121 | 115 | 110 |

算数の「興味」の前年度との比較

| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 平成28年度 | | 106 | 107 | 116 | 119 | 109 |
| 平成29年度 | 105 | 106 | 108 | 120 | 112 | 110 |

**【資料９　国語と算数の「興味」の前年度との比較】**

ープでの発表など活躍できる場面を多くしたことで、児童の自尊感情の向上にもつながった。

算数の「数学的な考え方」が前年度と比較すると得点率が伸びている。**【資料１０】**

算数の「考え方」の前年度との比較

| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 平成28年度 | | 91 | 101 | 96 | 114 | 113 |
| 平成29年度 | 115 | 91 | 111 | 102 | 101 | 116 |

**【資料１０　算数「考え方」の前年度との比較】**

これは、ペアやグループでの発表などの話合いの形態を工夫したり、自分の考えを整理しながら書けるようなワークシートを活用したりするなど、児童に「出力」させる場を工夫したことで、児童が主体的に学び、生き生きと活動することにつながったためである。

国語の「話す・聞く」が前年度と比較してわずかであるが伸びている。**【資料１１】**

国語の「話す聞く」の前年度との比較

| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 平成28年度 | | 104 | 107 | 102 | 102 | 99 |
| 平成29年度 | 106 | 94 | 109 | 104 | 101 | 101 |

**【資料１１　国語「話す・聞く」の前年度との比較】**

これは、学習環境を統一し、「ハンドサイン」や「発表の聞き方」などの掲示物を活用するなど、話し方や聞き方の指導を徹底したことで、児童の意識が高まり、学習規律の定着がみられたためである。前年度と比較して、特に算数の「技能」「知識・理解」において向上がみられた。**【資料１２・１３】**

算数の「技能」の前年度との比較

| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 平成28年度 | | 101 | 102 | 90 | 105 | 106 |
| 平成29年度 | 102 | 90 | 106 | 97 | 97 | 112 |

**【資料１２　算数「技能」の前年度との比較】**

算数の「知識」の前年度との比較

| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 平成28年度 | | 97 | 104 | 97 | 108 | 105 |
| 平成29年度 | 108 | 103 | 108 | 98 | 98 | 103 |

**【資料１３　算数「知識」の前年度との比較】**

これは、朝学習が充実し、ドリルやプリントを活用して繰り返し学習による学力の定着を図った成果である。

(2)　授業における児童の変容

児童に自分の考えを「出力」させる場を多く設けたことで、次のような、児童の変容が見られた。

グループ学習や話合いの形態などを工夫し、学び合いの中から、児童が主体的に学び、活躍できる場面を多く設定することで、自分の考えに自信をもち、全体の場で堂々と発表できる児童が増えた。また、友達の考えを聞いて理解を深めたり、話し合いながら自分の考えを広げたりする児童も増えた。さらに、自信をもって授業に取り組む姿が見られるようになり、児童の自尊感情の向上にもつながった。

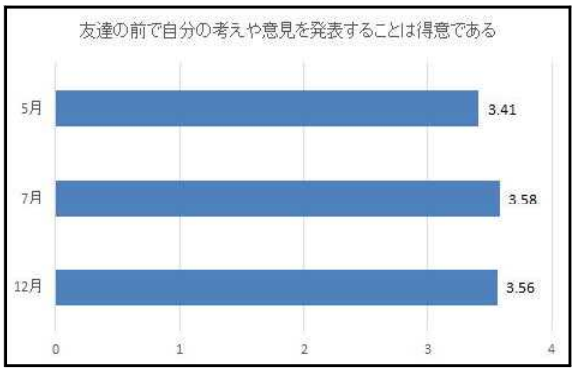
自分の考えを筋道立てて書かせる工夫やワークシートの形式の工夫をすることにより、自分

の考えがもてなかったり、相手に分かりやすく表現できなかったりした児童も、自分の考えをまとめられるようになった。また、ペアやグループでの話合いにおいて、自分の考えと友達の考えを比べながら活動することができ、互いの考えを深め合う児童の姿が見られた。さらに、国語や算数に限らず、他教科や道徳においても、自分の考えをもち、話合い活動に取り組む姿が見られるようになった。

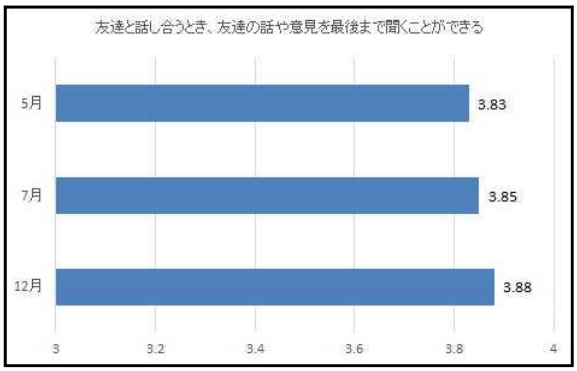
(3)　意識調査の結果から

①　児童の意識調査の結果から

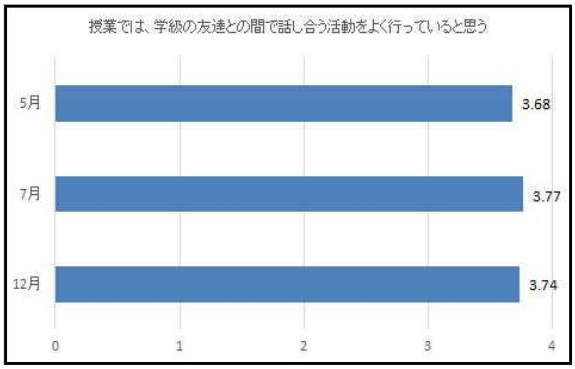
「出力」場面に関する意識調査の結果から、授業の中で「出力」する場を繰り返し設定したり、「出力」の仕方を工夫したりすることで、「出力」に対して抵抗なく学習に取り組み、自信をもって学習に臨んでいることが分かる。**【資料１４・１５・１６】**



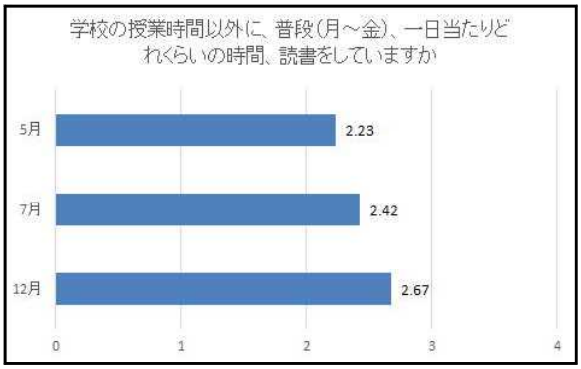

**【資料１４　グラフ１】**




**【資料１５　グラフ２】**




**【資料１６　グラフ３】**

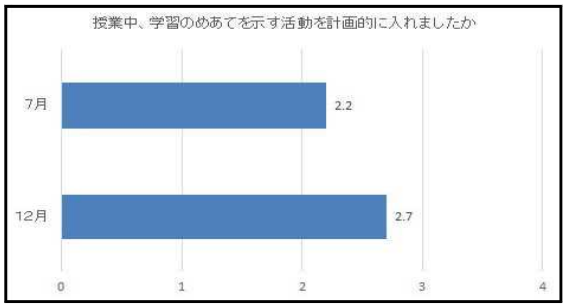



**【資料１７　グラフ４】**

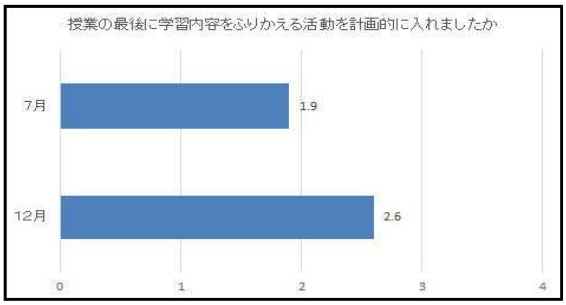
朝読書の時間を５分延長し学校図書館や学級文庫等の本を活用して、読書に親しませたり、図書館司書補やボランティアの方の力を借りて読み聞かせを充実させたことで、児童の読書意欲が高まり、読書時間が増加した。**【資料１７】**

②　教師の意識調査の結果から

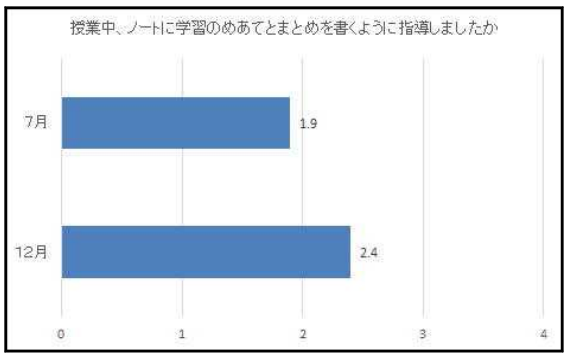
児童が生き生きと活動し、学力を向上させるために、分かる授業づくりをめざしたり、児童に「出力」させる場の設定を工夫したりすることに取り組んだことで、教師の授業づくりに対する意識が向上してきた**【資料１８・１９・２０・２１・２２・２３】**。



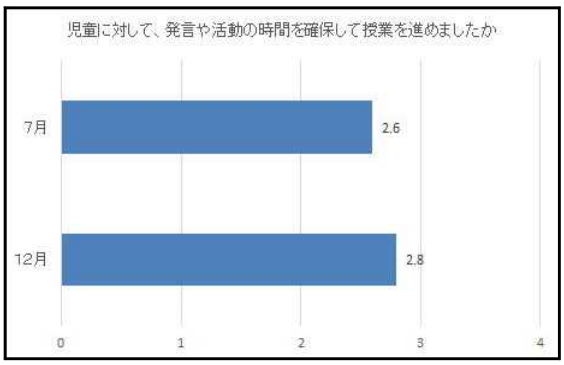

**【資料１８　グラフ５】**



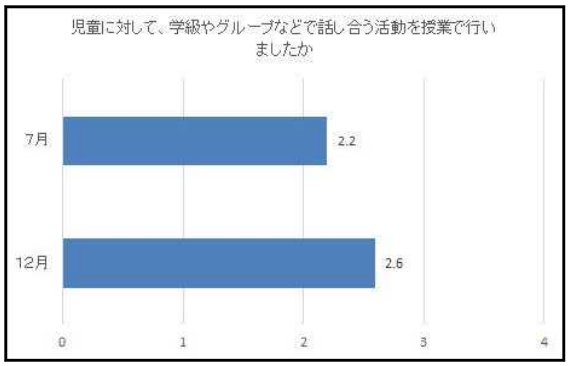

**【資料１９　グラフ６】**



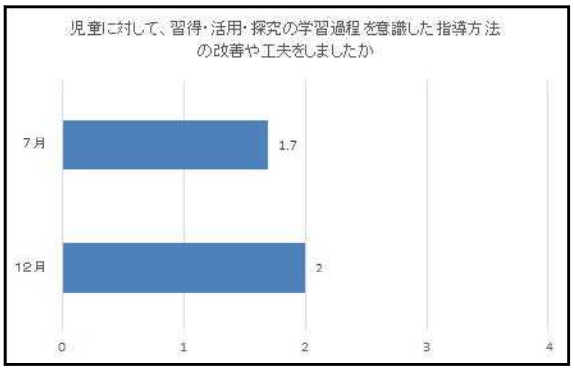

【資料２０　グラフ７】




【資料２１　グラフ８】




【資料２２　グラフ９】




【資料２３　グラフ１０】

## ４　今後の課題

・　単学級のため、担任経験の差が学力定着に影響を及ぼしやすい。分かる授業を目指して学校全体として情報交換や研修の場を多く設定したり、主体的・対話的で深い学びに向けた視点からお互いの授業を見合い、授業改善を行ったりするなど、互いの力量向上に努めていく必要がある。

・　次時の学習や家庭学習につなげるためにも、各時間の振り返りを、児童の言葉で書かせることが大切である。どのような視点で振り返りをさせるか、児童が書いた内容をどのように評価し、どのように生かしていくか、さらに検討を重ね、共通理解を図っていく必要がある。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成２９年度委託事業完了報告書

【協力校】

| 都道府県名 | 愛知県 | 番号 | ２３ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 愛知県稲沢市立領内小学校 |
|---|---|

## ○　協力校として実施した取組内容

### １．当初の課題

本校では、平成 28 年度標準学力検査（ＣＲＴ）においては、国語科では６学年中５学年、算数科では６学年中２学年の得点率が全国平均を下回っている。特に国語の「書く」「読む」の領域では、各学年で得点率が低くなっている。学習規律や各学年で身に付けなければならない基礎学力が定着しないまま高学年になり、このような結果になってしまったと思われる。そこで本年度は、「出力」場面を設定した分かる授業づくり、基礎・基本の定着、学習習慣の定着を校内研究の柱として、授業改善等に取り組み、分かる楽しさ、できる喜びを味わい、確かな学力を身に付けた児童の育成を目指すこととした。

### ２．協力校としての取組状況

（１）学びのスタンダードの確立

五つの学習スローガン（資料１）を掲げ、各教室に掲示した。特に、チャイム着席と学習用具の準備をすることに力を入れて全クラスで指導した。以前は、長い休み時間に運動場で遊んでいた児童が授業に遅れてくることもあったが、チャイムと同時に号令をかけ授業を開始できるようになった。

「出力」をさせるに当たり「入力」の必要性も課題となった。そのため、聞き方・話し方の指導として、『聞き方』の「あいうえお」、『話し方』の「かきくけこ」という合言葉（資料 2）を定め、児童が確認しやすいように、全教室の前面に掲示した。朝礼時には、全校児童にこの合言葉を伝え、戸惑うことなく実践していけるよう意識付けをした。各学級では、授業中はもちろんのこと、朝や帰りの会などにその都度この合言葉を意識させ、定着を図った。初めは、毎回声をかけて確認させながら、指導を続けた。徐々に教師に対してできるようになると、次は、児童同士のグループの中でもできるようになってきた。

１　チャイム着席
２　机の上はすっきり整頓
３　はっきり大きな声で
　「はい」「です」「ます」
４　背筋を伸ばして書く
　　話す人の目を見て聞く
５　あいさつは心をこめて

【資料１　５つの学習スローガン】【資料２　聞き方・話し方の合い言葉】

（２）授業改善と評価活動の工夫

ア　授業の流れの明確化

前年度に引き続き授業の流れの明確化を図った。各授業で「めあて・まとめ」の提示を行い、振り返りの場の設定をした。めあてを確認することにより、児童はその時間に何を学習するのかという目的意識をもって授業に取り組むことができるようになってきた。また、１単位時間でまとめの時間をとることにより、要点の確認ができ、学力定着につなげることができた。

イ　学習意欲の向上

①　指名方法の工夫

授業の導入における既習事項の確認では、挙手指名方式による指名を止め、一つの発問に対して無作為、または意図的に複数の児童を指名するようにした。既習事項であるため、ほぼ全ての児童が発言できるので、学級の雰囲気が活発になり、その後の授業にも良い影響を与えた。また、前時の内容が定着しておらず、発言できない児童に対しても、他の児童の発言を何度も聞くことで定着させる機会となった。

②　がんばり大会の実施

９月には夏休みの課題の中から、１月には冬休みの課題の中から出題するテストを実施した。全学年合格点を 80 点に設定し、合格点に達していない児童は、休み時間を活用して合格するまで繰り返し補習を行った。学習意欲の低い児童も、学習を重ねて何度もチャレンジすることで、確実に点数が伸び、学習意欲が向上した。

ウ　四つの「出力」の場を設定した授業とそれを支える手立ての実施

28 年度に引き続き、授業の中で出力の場を設けることで学力の定着を図った。四つの出力の場を設定（資料３）するよう、全教職員が授業改善を行った。

28 年度は「出力」の場を設定しても、「出力」できない児童が存在した。特に、展開２の場面においては顕著に表われていた。そのため、すべての児童が活動に参加できるように「出力」を支えるための手立てを、教職員で協議し授業研究を重ねた。主な手立てとしてはワークシートの活用と学習形態の工夫である。

**①導入　：既習事項の確認**
**②展開１：自分の考えをもつ**
**③展開２：話し合い活動で自分の考えを広げ、深める。**
**④まとめ：学習内容の定着**

**【資料３　４つの出力の場】**

主に国語の授業では、児童が容易に考えを「出力」できるような、ワークシートを活用した。教材文の行間を広くし、記号や色線で書き込めるようにしたことで、児童は疑問に思ったことや読んで分かったことなどを表せるようになり、話し合い活動も進んだ。また、話し合いをさせる前に、ワークシートに書き込んだ意見をペアやグループで読み合わせ、良いと思った意見に印をつけさせた。そうすることで、自分の意見に自信をもつようになった。また、自分の考えをもつことができなかった児童も、他の児童のワークシートを読み、考えをもてるようになり、すべての児童が話し合い活動を行えるようになった。

算数では、「めあての確認→考える→学び合い→まとめ→たしかめ」の流れで授業を行った。学び合いの時間に、高学年では話し合い活動を行い、低学年では自分の考えを互いに伝え合う

活動を行った。また、児童の「出力」の場を増やすために学習形態をペア・グループと小集団にして話し合いを行わせた。小集団にすることで意見が言いやすくなり、疑問を伝えて解決する過程で学びを深めていく児童の様子が多く見られた。

エ　評価活動の工夫

授業の振り返りにおいて自己評価をさせた。高学年では、自己評価シート（資料４）を用いて、単元を見通して評価基準を児童に示して取り組ませた。これによって、定着させたい学力が焦点化された。低学年においても評価の基準を具体的に示し、○・◎等で評価をさせた。教師は、授業を行う中で児童に示した評価基準を基に評価を行い、通過率を確かめながら授業を進めた。通過率が低い場合は、その場で補充を行い、定着を図った。

| 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 時 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 活用型学習 | | | 習得型学習 | | | | |
| 友達の発表の良い所を見つけ、自分のこれからの生き方や考え方についてより考えることができた。 | 自分が選んだ伝記の人物についての「ここがすごいで表」を書き、これからの自分の生き方や考え方についてまとめることができた。 | | 自分の今までの生き方や考え方を振り返って、これからの自分の生き方や考え方について学習シートまとめることができた。 | 儀兵衛の「心ひかれた一言」を選び、選んだ理由を学習シートにまとめて発表し合い、友達の良い考えを見つけることができた。 | 年号を意識して本文を読み、儀兵衛のここがすごいと年表にまとめ、儀兵衛のすごいところを考えることができた。 | 先生の「ここがすごいで表」の発表と判定基準表についての説明を聞き、これからの学習の内容について理解することができた。 | 学習したこと |
| | | | | | | | 自己評価 |

【資料４　見通しのもてる自己評価シート】

（３）家庭・地域の学校との連携

ア　学習チェック表の活用による家庭学習の習慣化

家庭学習の習慣を身に付けさせるために、家庭と連携して実践の徹底を図った。１年生から６年生まで統一して、音読学習を中心とした「学習習慣チェック表」（資料５）を使用した。毎日、学習の様子を各自で振り返り、その後、保護者の点検を経てサインをもらうようにした。また、学年に応じて、裏面に足し算・引き算練習カードや九九カード、リコーダー練習カードなどの点検表を付け足した。児童だけでなく、保護者の意識も徐々に改善され、毎月末に記入する児童の振り返り欄には、保護者からの励ましの言葉が書かれるようになった。この取り組みにより、家庭学習の習慣が少しずつ定着していった。

① 連絡帳や手紙は家の人に渡しましたか
② 音読はしましたか
③ 集中して取り組みましたか
④ 宿題以外の学習をしましたか（読書、自学を含む）
⑤ 時間割を確かめて、持ち物の準備はしましたか

【資料５　学習習慣チェック表のチェック項目】

イ　地域の学校との相互授業参観と掲示物の共有

稲沢市の協力校（３小学校・１中学校）と相互授業参観を行った。また、各校の代表者で「出力」の場を設定した授業とその手立てについて検討する機会を設け、学んだことを自校の全教員に広めた。特に、祖父江中学校で行われた授業では、中学校の実態を知ることができ、児童に小学校で習得させておくべき課題が実感でき、大変参考になった。授業参観の際に、校内の視察を行い掲示物の写真を撮影した。これも自校の教員で共有し、児童の学びに生かした。

（４）朝読書・朝学習の実施

登校後から朝の会までの 15 分間を確保し、毎週火曜日と水曜日は朝読書、木曜日と金曜日は朝学習の時間としている。学年毎の朝学習の内容は下の表（資料６）の通りである。低学年は教師が与える課題が多く、学年が上がっていくに従って学習する内容や量を各自で決めること

もあり、曜日や教科で固定するのではなく学年の児童の実態や発達段階を踏まえて内容を設定している。朝学習や読書のときはどの学級も静かで、昨年度より実施時間を５分間長くしたことで、さらに児童は落ち着いて取り組む姿が常となってきた。

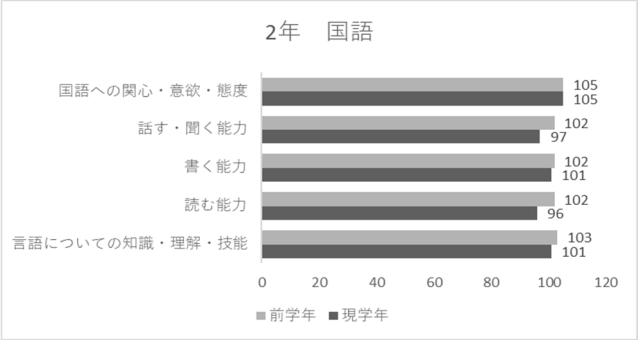
| 学年 | １年生 | ２年生 | ３年生 | ４年生 | ５年生 | ６年生 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 内容 | 視写 | 暗誦や視写<br>計算プリント | 計算や漢字<br>プリント | 計算プリントや<br>漢字練習 | 計算プリントや<br>漢字練習 | 計算ワークや<br>授業の復習 |

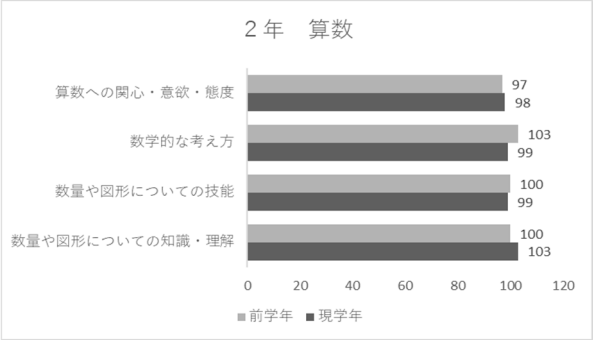
**【資料６　朝学習の内容】**

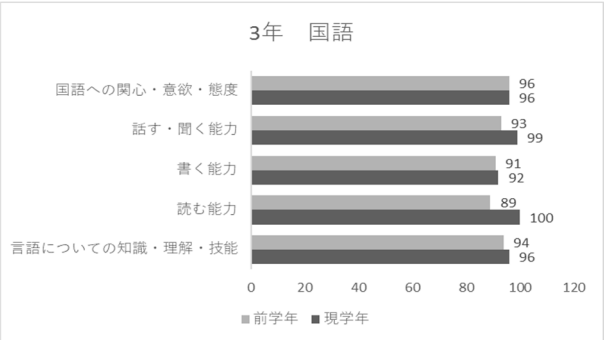
## ３．取組の成果の把握・検証

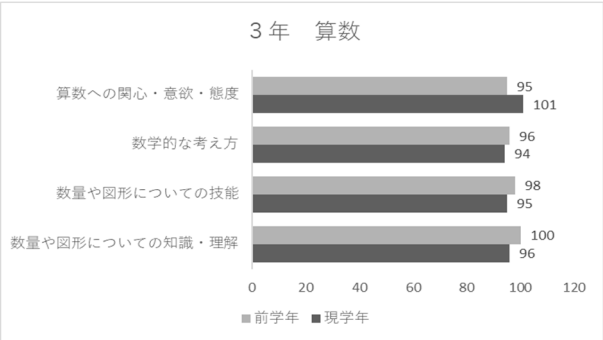
（１）教研式標準学力検査ＣＲＴの結果より

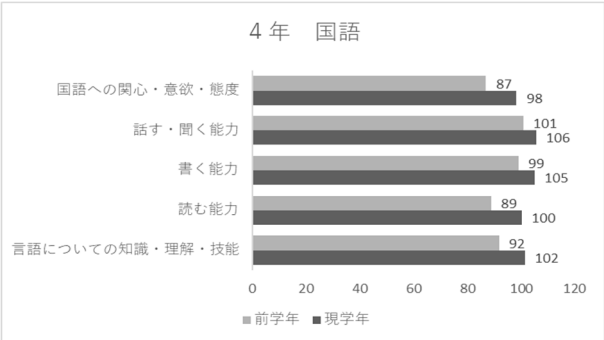
28 年度実施（前学年）と 29 年度実施（現学年）の全国比の値で検証した。

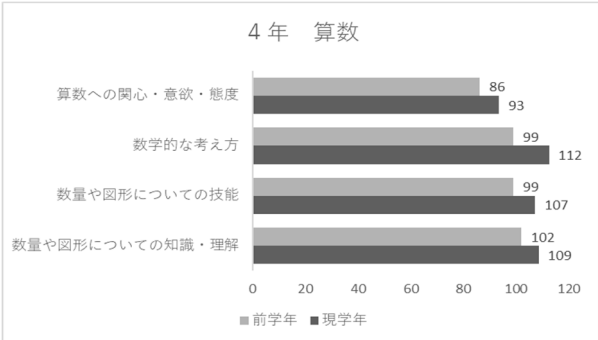


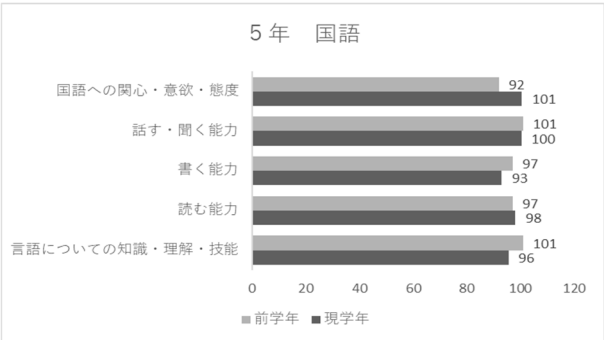



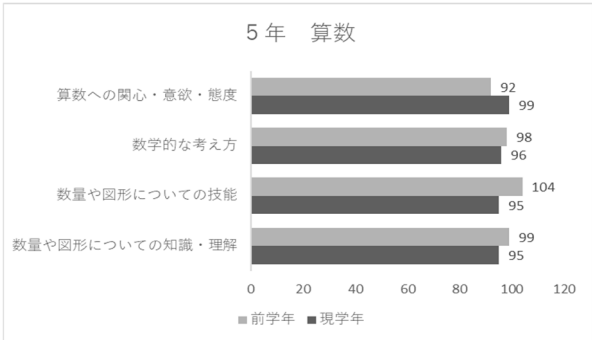



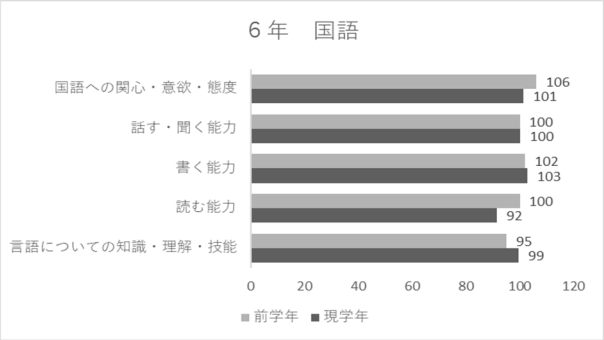



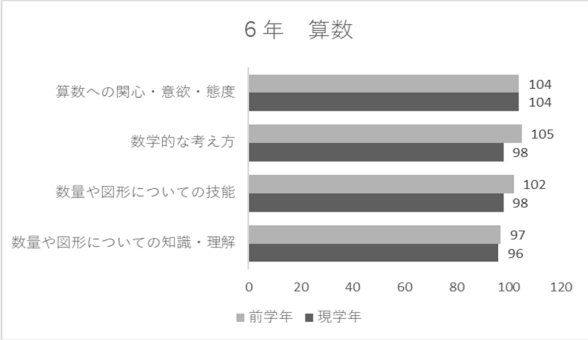






【全校】

○　国語の「関心・意欲・態度」は２学年、算数は４学年において、全国比の値が前年度より向上しており、ほとんどの学年で全国平均を上回っていた。

○　国語においては、「読む能力」が向上した学年が多くあり、ワークシートが有効に機能して読み取る力が高まったと考える。「言語についての知識・理解・技能」では、全国平均の値に迫る学年がほとんどである。日々の指導の中で繰り返し行ったテストや、家庭学習が定着した成果であると考える。

（３）がんばり大会の結果より

９月に行ったがんばり大会の合格者数の割合は、初回のテストで国語 68%、算数 74%であった。夏休みの課題の中から出題していることを鑑みると決して良い結果ではない状況である。およそ１か月の間、繰り返し再テストを行った結果、合格者数は国語 93%、算数 95%となった。がんばり大会のテストでは、主に漢字・計算など基礎・基本となる問題が出題されており、それを習得させることは学力定着に効果があったと考える。また、この取り組みは１月も行った。

（４）授業における児童の変容

出力の場を設定した授業を行ったことで、児童に次のような変容が見られた。

○　考えをもち、学び合う姿

前年度までは、個人追究の時間に自分の考えがもてなかったり、ノートに自分の考えをまとめられなかったりして、話し合いの中で学ぶことができない児童が多くいた。今年度は、自分の考えをもつことができ、さらに自分と他者の考えや意見を比べる児童が増えた。単に違いを見付けるだけでなく、どうしてそのような考えとなるのか質問をすることができるようになった。質問をきっかけに対話が生まれ、学び合いとなる姿が多くみられた。

○　友達の説明を聞いて理解を深める姿

ペアやグループなどの小集団で話し合い活動を行ったことで、友達の説明を聞いて理解を深めたり、話し合いながら考えを広めたりできる児童が増えた。また、グループで話し合うことで、つまずいた場面ですぐに質問したり、詳しく説明してもらったりしやすく、理解を深めることができた。

（５）児童の意識調査より

５月、７月、１２月に児童の意識調査を実施し、４段階で自己評価をさせ、その値を比較した。「授業中、黒板に学習のめあてが示されている」の項目の「当てはまる」と答えた児童が 76.9%

から 85.5%と増加した。前年度から授業の流れの明確化を掲げ、授業改善の一つとして取り組んだ「めあて・まとめ」の提示が児童にも確実に実感できるようになった成果である。

「授業で先生から示される課題や自分たちで立てた課題に対して、自分から考え、自分から取り組んでいると思う」の項目では、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と答えた児童が 69.7%から 82.7%となった。授業に対して受け身の姿勢であったものが、主体的に考え、学ぶ姿勢へと変化していることが表れている。

「友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意である」の項目では、「当てはまらない」と答えた児童は 24.3%から 17.2%へと減少した。「出力」の場を設定した授業を行い、児童の「出力」を支える手立てを講じた結果、考えがもてなかった児童や、自分の考えに自信がもてず、出力することができなかった児童が、出力型の授業に参加できるようになったといえる。

（６）教師の意識調査より

７月と１２月に教師の意識調査を行った。各質問項目に対して４段階で回答をさせ、その平均値をポイント(p)として比較した。「学習規律の指導を徹底したか」の項目では 2.85p から 3.31p へと上がった。五つの学習スローガンや聞き方・話し方の指導を積極的に行うようになったことが分かる。これにより、児童の学習に対する姿勢や学習環境が整えられた。「児童に対して、発言や活動の時間を確保して授業を進めたか」の項目は 2.92p から 3.31p へ、「児童に対して、理由を挙げて発言できるよう指導したか」の項目は 2.85p から 3.38p へ上がった。より多くの授業において児童が「出力」する場が増えたと言える。また、児童に考えを発言させる際には、これまで以上に理由や根拠を述べることを大切にするようになった。このような指導を通して、児童同士で徐々に話し合いできるようになり、学びが深まるようになった。

## ４．今後の課題

○　全校的に、学習に対して前向きに取り組む児童が増え、児童の学習に対する「関心・意欲・態度」の高まりは感じられる。しかし、他の成果は顕著に現れておらず、下位・中位層の児童に対する支援や学力定着のための手立てを今後も講じていく必要がある。

○　教研式標準学力検査ＣＲＴの結果からみると、５年生では、児童が対話をする時間を授業時間内に確保するために、穴埋め式のワークシートを多く使用し、論述させる機会が減ったことが、「書く能力」が伸びなかった原因であると考えられる。また、６年生では前年度の課題からノートに文章を書き、考えを表す機会を増やした。ノート指導や文章指導に力を入れすぎたため「読む能力」の向上がみられなかったと考えられる。学年により能力差に開きがあり、それに応じたバランスの良い指導を行う必要がある。

○　児童の意識調査の結果より「友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意である」の質問に対し「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と答えた児童の割合が減った。今後も、「出力」の場を設定した授業や聞き方・話し方の指導を行うとともに、誰もが学びやすい学級の雰囲気となるように、全教員で研究を積み重ね、学級運営・学校運営に取り組んでいく。